

1732(21)

胸の中は、外の何を見た時よりも、激しく騒ぎ立つた。それに尙だもう一品、オムレットの厚いのが出て来たので、この時の飯の旨さといつたら、到底徒歩旅行家の外の人には、味を知らせることの出来ぬほどのものであつた。さあ勘定をといふ一段になると、不安と恐怖の容子が復た彼に現れた。彼は金は要らぬと言ひつゝ、奈何しても押し戻さうとする。そして、私の方はまた何爲彼が然う物怖れをしてゐるのかといふことが、全然合點が行かなかつた。然うしてゐる内に、彼は顛へながら、役人だの間税係だのといふ、可怖しい言葉を口走つた。彼の説明した處に據ると、補税が面倒だから酒を隠匿し、人头税のために麪包を隠匿してゐるので、自分達が饑渴に迫られて死にかかつてゐるやうに見せてゐないと、苛酷い目に遇ふのだといふことであつた。斯ういふ問題については、今迄何等の觀念もなかつたところから、此の話を聽いて、印象がいつまでも消えずに残つた。其の後私の胸中に不幸な人民を憐れず、聚斂に對し、又壓制者に對して、非常な憎惡の念が發達して来たが、その種子は全く此の時に播かれたのであつた。此の農民は、窮困な境遇に居る者でもないに、自分の額の汗で儲けた麪包すら人前で喰ふことの出来ぬやうな目に遇

1732(21)

はされて、近所と同様の悲惨な状態に居るやうに見せかけて、辛と禍を免かれてゐるのである。私は深い感動と憤怒を抱いて此の家を出た。そして、自然が惜し氣もなく此の土地一體に降らして置いた慈惠の賚も、ことごとく無慚な收税吏の餌となるのであつたかと思ふと、うるはしい田園の運命が悲まれない譯に行かなかつた。

以上の追憶は、今度の旅行から得たものの中で、一番著しいものであつた。それゆゑ私は里昂へ近づいても、まだ依然行程を延ばすために、リション・Lignon川の岸を低徊して見ようと思ひつゝいた。といふのは、幼い時分に爐邊で種種な物語類を父と一緒に讀み耽つたが、その中で「ラストレエ L'achée」の筋だけは忘れる折もなく、絶えず憶ひ出されたからであつた。私はフォレエズ Forestsの方へ行く道を訊ねた。道道何處かの内儀と一緒に話をしながら行くと、フォレエズといふのは、鐵工の發達した處で、澤山鍛冶屋があるから、職人たちにはよい稼ぎ場所だといふことを聞かされた。この言葉はすぐに私の小説的な好奇心を沈静せしめて了つた。鍛冶屋共の中をいくら掻き捜して見たからと言つて、デアヌ Diane や シルヴンド

ル Sylvandre などの居さうな道理がないと思つたからだ。一かど私を勵ます積りてそんな事を言つた内儀は、確かに私をば鍛冶屋の下職とでも思つたのであらう(譯者云。「ラストレエ」は第十六、七基督世紀の間に、佛蘭西の貴族オノレエ・ヂャルフェ Honore d'Urie がセルヴンテス Cervantes などに倣つて書いた田園小説で、非常に持て囃されたもの。フレエズ地方を流れてゐるリニオン川の岸はこの物語の世界で、デアヌ、シルヴンドルは其の中の人物)。

1732(21)

里昂へ行く道道いろいろな處を觀て通つた。著くと私はシソット Chasottes へ行くつて、ワレンヌ夫人の友達のアトトレエ Chatelet 嬢に遇つた。前にル・メートルと此處へ來た時に、夫人の手紙を持つて來てゐたので、此の人とは豫ねてから知己になつてゐた。シアトトレエ嬢の話を見ると、ワレンヌ夫人は里昂へ立寄りはしたが、其から先はサザアに留らないとも極つてゐなかつたから、ビエモンテまで行つて了つたとも請け合はれない。若し望みならば消息を聞きに手紙を出して見ても

1732(21)

よい。その間、此の里昂にゐて、返事を待つたら奈何かと言ふのであつた。て私も其を尤もとは思つたが、然し返事が速く聴きたいといふことや、財布の都合で、長く便便としてゐる譯には行かぬといふことを思ひ切つては得言ひ出さなかつた。それは彼女の待遇が悪かつたからではない。悪いどころか、私を無上に可愛がつて皆と分け隔てのない款待をしてくれたために、此處で自分の境涯を見露されるのがつらくなり、今更となつて家人の伴侶といふ位置から、哀れな乞食の境涯に落されて了ふに忍びなかつたからであつた。持金ももう皆空になりさうなので、少しでも儉約しようと思つた。宿で食事をするといふことは、段段少くなり、旋てそれをも全廢して、了ひ五六スツで安飯屋の飯を喰つて、それで前に五倍も出した時と同じくらゐ腹を拵へた。最早宿で食事をせぬ程なら、唯寢にだけ行くといふことも如何なものだと思つた。宿に借金が溜つたといふのではないけれども、内儀に宿料も拂はないで、一室を占領するといふことが、氣が咎めたからである。季候は丁度よい心持の時であつた。或る晩ちと暖か過ぎると思つたほどのことがあつたが、野天で夜を徹さうと決心して、と

1732(21)

あるベンチの上に寄り凭かつてゐると、通りがかつた一人の學僧が、私の斯うして眠りかけてゐるのを見て、傍へ寄つた來て宿がないのかと訊ねた。これこれと打ち開けて言ふと、哀れを催したらしく、衝と私の側へ腰を卸して、いろいろ話し出した。その話はなかなか調子がよい。一言一句に引き附けられるやうであつた。十分私を釣り込んだと見濟ました彼は、自分は贅澤な宿泊はせぬ。ほんの一間しか借りて居ないけれど、私を斯うして廣場へ寢させ放しにして置く事はどうしても出來ぬ。今から宿を捜しに行くのも、もう遅いから、今夜だけは、窮屈でも、自分の寢臺を分けるから、といふことを話した。私は其の意に従つたばかりか、屹度自分の利益になつてくれる人であらうと思つて、内内喜んだ。二人で行つた。彼は燧鋼を鑽つた。室は狭いけれども小綺麗である。彼はこと更丁寧に私を請じ入れた。焼酎浸しの櫻子の這入つた玻璃纏を取り出して來た。それをてんでに喰つて、二人して寢た。

翌日になつて、僧は宿の美しい娘に、朝飯の仕度を頼んだ。娘は忙しいから可厭ですと言つた。またその妹に頼んでみると、今度は返辭もなかつた。私達は兀然

1732(21)

と待ち草臥れて、なか／＼朝飯に有りつけさうな様子はなかつた。て、二人してその娘の室に這入つて行つた。娘たちは僧を見ても、一向愛嬌のない顔つきをしてゐる。私はまたそれよりも、一層不満足な取り扱ひをされた。姉の方が、身體を振り向けるはずみに、私の足趾の、丁度肉刺が出来て、痛くて堪らなかつたから、靴を切り抜いて置いたその隙間へ、尖鋭つた靴の踵を突つ込んだので、私は飛び上つた。妹の方は丁度私が唇を卸さうとした椅子を、脊後から來て咄嗟抜き取つて行つた。娘達の母親は、窓から水を打ち撒けると言つて、私の顔へ飛沫をくらはせた。置いた物を取ると言つて私を刎ね飛ばした。這麼優待を受けたのは、生れて始めてあつた。侮辱するやうな嘲弄するやうな彼等の容子の底には、つくづく見ると、何か腹立たしいといふやうなものが潜んでゐるのだと思はせたが、まだそれを看破るほど私は慧しくなかつた。呆氣にとられて、彼等に憑きものがしたのである。うかなどと思つて、本氣に怖れてゐた。と、僧はそんな仕打は見飽きてゐると言つた。風で朝飯は待つて居ても來る氣づかひはない、と言ひ／＼此家を出た。私もあたまを跟いて出て、やつと三人の暴女を脱れてほつとした。道々彼は、カフェエへ行

つて飯を喰らうと勧めた。私はへと／＼に腹が減つてたけれど、それを謝つた。向うも強ひてとは言はなかつた。で、私達は街の三つ目か四つ目の角の處で別れた。那の兎ふべき家の影が、全く見えなくなつたので、氣持が清しくなつた。彼もまた、私に不安の感を起させるやうな家から遠ざかつて行くのを見て、大きに安心したらしかつた。是がために、里昂の市民には氣の毒のやうな印象が私に残つた。歐羅巴中で頹廢の極底に墜ちた都市、然らういふ觀念がいつ迄も消えなかつた。

斯ういふ變事に出會したといふことは、愉快な記憶を喚び起す幫助にはならない。若しも私が他の人のやうに、這入つて行く料理屋ごとで借金を拵へたり、踏み倒したりするだけの腕があつたら、もつと優な飲食が出来たのである。然しそんな事は私に出来ないし、嫌ひでもあつた。どの位嫌ひであつたかといふことは、私の殆ど全生涯が逆境に沈淪してゐて、時時麪包に事を缺くやうなことさへあつたけれど、即時に返金の出来ない限りは、一回として金貨の厄介になつたことがなかつた、と言へば凡そ解るであらう。私は衣食上の些々たる負債をも拵へる氣はなかつた。債務を負ふよりも、苦痛を負ふ方がずつと樂なやうな氣がした。

街道で夜を徹すといふこと、殊にこれは里昂でよくあつたことだが、これらは正しく苦痛といふべきものであらう。それでも財布の底に残つてゐる幾スウを、宿賃に使ふよりは、麪包代にする方を望んだ。幾ら寝不足をしたからと言つても、營養の不足ほど、死の懸念がなかつたからである。驚くてはないか、此の悲痛な境遇に居ながら、自分では不安も感ぜず、情ないやうな氣も起らなかつた。私は、未來に對して、何等の憂念をも抱かなかつた。そして、美しい星の下の地面が共同ベンチに寝ころんで、宛乎薔薇の花葩でも拵にしてゐるつもりで、すやすやと眠つて行つた。斯うしてシアトレエ嬢の處へ来る筈の返事を待つてゐた。

市街から少し離れて、ロオヌ川であつたか、ソオヌ Saône 川であつたか、判然記えてゐないが、その川沿ひの村徑で、美しい一夜を明したことがある。路の一方は段丘を成した園が、縁を取つたやうになつてゐる。其の日はいつもよりは餘程暑かつたが、夕方の氣分の良さは何とも言ひ様がなかつた。露は萎え行く草の葉を甦らせた。風もない清涼な夕で、身に染むほどの寒さでもない。落日は紅色の霞を大空一面に撒き散らしたので、それを反映した川水はばつと薔薇色に化した。段丘

1732(21)

の上の樹々は鶯の巢であつたか、啼きかはす聲が洩れた。私は魂を奪はれたものの如くに、理智も、感情もことごとくこの一境の歡喜の中へ放り入れて、獨りぼつつき歩いたが、これを自分一人て樂むのかと思ふと、有聲に何となく惜しいやうな氣もせぬてはなかつた。甘い幻影に吸ひ込まれた私は、疲勞も知らずに、夜の更けるまで進む足を停め得なかつた。偶と我に還つた。て私は段丘の扉に切り込んだ壁龕のやうな、非常口のやうな處の段の上へ、恍然となつた、自分の體軀を横へた。そのすぐ頭の上には、さし交した樹々の梢で、屋根が出来てゐる。一羽の鶯が、丁度其處にゐて歌で私を魔睡させた。その睡の樂しさ、その醒覺の更に優る樂しさ！ 一つの間に、か太陽は昇り切つてゐた。眼を開くと、水と、夏草と、野面の景色が、輝かしく眼の前に展げた。私は起き上がつて、元氣を附けた。空腹を覺えたので、未だ残つてゐた六ブラン Bread 二個(約計二十錢)で、旨い朝飯を喰はうと思つて、市街の方へいそいそと歩き出した。氣分が晴晴しいから、鼻歌などが轉がり出て来る。その歌は當時譜記してゐた「トムリイの浴泉 Les Bains de Thomery」と言つて、バチスタン Bastingin の歌謡曲であつたことまでも記してゐる譯者云。バチスタンは即ち Jean-

1732(21)

Bapiste Stuck. 第十七世紀末フイレンツェに生れた有名な樂匠。一七四五年頃巴里で歿した。願はくは神の慈觀、このよきバチスタンにあれ彼の美はしき歌謡曲にあれ！

この歌のお蔭で、豫想以上の朝飯にあり附くことが出来た。尙だ思ひ掛けない贅澤な晝食にもあり附いた。夢中で唄ひながら來かゝると、誰か背後から、人音がするから、顧みつて見ると、一人のアントナン Antonin(僧侶の一階級が、あとから跟いて來て、頻りに私の歌に聴き惚れてゐた。と、彼は傍へ來て、挨拶をしながら、音樂がお出来かと訊く。

「少しばかり」と答へたのが、餘程知つてゐるぞと言はぬばかりに聞こえた。未だ續いて種種のことを訊くので、身の上話の一部分をして聽かせた。その時に彼は、樂譜を寫したことがないかと訊く。「度々やりました」と答へる。これは實際のこと、私が音樂を知つたのも、多くは樂譜を轉寫してからの事であつた。

「然うか。どうだ、それでは一緒に私の處へ行かうぢやないか。暫時我慢すれば君が不自由しないぐらゐの爲事はあるから。」と、有り難く思つて跟いて行つた。

1732(21)

此のアントナンはロリション Polichon と言ふ人であつた。音楽の嗜味が深く友人同志の小音楽會などでよく唱つた。唯無邪氣で唯正直な人だつたが此の趣味が餘り狂ずる程に嵩じて行つた。それを強ひて壓し匿すやうにしてゐた。彼の案内に隨つて狭い室に連れ行かれた。自分で寫した曲なども澤山あつた。私には是々の曲を寫すやうにと言つて渡したが、中にも先刻唱つた歌謠曲を近日自分で唱ひたいからと言つて、それも命じた。此家で三四日の間は物を喰ふ時の外は、みづちりと此の仕事に取りかかつた。此の時ぐらゐ飢渴の強かつたことはない。此の時ぐらゐ旨い物の喰へたことはない。幾らでも喰ひ放題にさせてゐた。彼は自分で臺所から食事を運び出して來た。此の家の食ひ物が、いつも私に喰はせるやうなものばかりとしたら、暮し向きは餘程裕かに違ひないと思つた。生涯中で、此の時ほど、食事の快樂を感じたことはない。それと同時に、枯木のやうに乾燥し切つてゐた私に、這麼十分な旨い物が落ちて來たのは、實に天幸と思はねばならぬ。仕事をするにも、丁度物を喰ふと同じやうに真剣にした。斯ういふと大袈裟だが、然し實際それほど勉強した割には私の寫したものは正しくなかつた。四

1732(21)

五日して、ロリションと途中で出遇つた時に、どうも寫し物の中に、脱漏や重複や顛倒が多くて、其のまま演奏の出來ないものがあるといふことであつた。全く是は自分が一番不適當な爲事を擇んだからであつた。音符が綺麗でなかつた譯でもなく、寫し方が汚かつたのでもないが、長い時間の勞作の疲れて、逆上させて了つたものか、時間の大部分は、譜を寫すよりも、掻き消す方に費えた。だから綿密に校正でもしなかつた日には、その曲譜その儘では、演奏に適しないものとなつたのも、已むを得ぬ次第である。て巧く書かうとすればするほど、拙くなり、速くしようと思ふほど、間違だらけになつて了つた。それでもロリションは終まで大事にかけ、大枚一エキッ(約二圓)の謝禮まで、餞別にくれて暇を出した。

丁度此の時ワレンス夫人の消息が始めて手に入つて、今シャンペリイに居るといふことが知れた。それと一緒に旅費まで送つて來たから、夢心地で出發することにした。この後とても随分窮乏に陥ちたこともあるけれど、絶食までしななければならぬといふ程のことはなかつた。であるから、私は上帝の恩寵に對する鋭敏な心から特に此の時期を表彰したい。生涯の中で、境遇の悲惨と、飢渴とを感じたの

は、此の時期を最後とする。

尙一週間の餘も里昂に滞在して、母からシアトレエ嬢に頼んだ用事の済むのを待つてゐたが、其の間は彼女の家へ以前よりもしげしげ通つて、夫人の友達である此の婦人と話をするのを何よりの樂みにした。最早自分の境遇の可憐しい回想到胸を搔き擾されることもなく、強ひてそれを押し裏む努力をも要しなかつた。シアトレエ嬢は、若くもなく綺麗でもなかつたけれど、愛嬌には乏しくなかつた。物柔かい人懐こい上に、條理の解つた人で一倍懐愛しく感じられた。彼女はまた人道觀察の趣味があつて、人間を研究するといふ風であつた。私が同様の興味を持つやうになつたのは、全く此の婦人の感化であつた。彼女は、ル・サアジヤ La Sage の物語類、殊に「ジル・プラス Gil Blas」を愛讀して、私にもその筋を聞かせたり、本も貸してくれた。面白くは讀んだが、まだ斯ういふものを本當に讀み分け得るほどに發達してゐなかつたから、却つてもつとセンチメンタルな小説の方が氣に入つた。斯うして利益と興味とを持つてシアトレエ嬢の家で日を送つた。修練ある婦人の愉快で聰明な談話は、哲學臭い、街學的な書籍よりも、よりよく青年を教化するも

1732(21)

のであるといふことを信ずる。その外に、シアットで、いろいろの寄宿人や、その友人たちと懇意になつた。年齢は十四歳のセエル Seure といふ少女があつた。當時は餘り深く注意もしなかつたけれど、其の女の美しさに、其の後八九年を経てから、私が慕ひ寄るやうになつた(六〇二頁)。

1732(21)

程なく懐かしい母と再會が出来る、この期望は、今までの狂妄な空想を一時中止させた。將に來らむとする現實の幸福は、種種な幻影を趁ふことを見合はせさせた。私は再び彼女を見出した。否、彼女の傍で、彼女の力で、再び會心の境涯をも共に見出した。その譯は、私の柄に在りさうな職業を捜すことに骨を折つてくれたといふことを言つて寄越したし、またその爲に、彼女の傍を離れることも要らないといふのであつたからだ。其の職業といふのは、何であうかと、疲れる程それを考へ考へした。眞箇に考へ當てようと思へば、占筮家になつても成るより外はなかつた。不自由なしに旅行が出来るほどの金はあつた。馬に乗つて行けとシアトレエ嬢

1732(21)

に勧められたけれど、それには同意出来なかつた。これは私の方に理があつた。然うしては自分と馴染の徒歩旅行を最後の一回といふ處で楽しんで爲納めることが出来なくなるからであつた。私がモチエエ Mochien に住んでゐた間も、ちよくちよく附近へ遠足を試みたことはあつたが、それは徒歩旅行と名づけることの出来ないものであつた譯者云。モチエエ住居の事は後篇第十二巻に出る。

私の想像が氣持よく興奮するのは、境遇の一番低下した時に限つた。若し反對に、周圍が微笑をもつて自分を迎へるやうな時は、想像は少しも破顔しない。これは實に他と異なつた特質の一つである。變な私の頭は、物と同化することが出来ぬ。又物を育てはぐくむことも出来なくて、創造することばかりを好むのである。現實の萬物は、唯それが實際あるとほりにしか、私に感銘を與へぬ。自分で修飾の出来るのは、空想の萬物に限る。若し私が、春を描かうとすれば、冬でないと思ふやうに出来ぬ。美麗な野の景色を書かうとすれば、城壁に挟まれてゐる時でない、十分には行かぬ。幾度か他にも話した通り、若し私がバステイユ Bastille に禁錮されるようなことがあつたら、その時こそは、自由の姿を最も鮮明に描き出すことが

1732(21)

出来たであらう。里昂出發の際などは、歡喜の未來ばかりを眺めてゐた。巴里を出る時の不満足であつただけ、今度はそれだけ餘計に満足を感じたし、又それが當然でもあつた。それなのに、此の旅行中、今までの時に極まつて見たやうな楽しい夢を見ることが出来なかつた。心は清く澄んでゐたが、唯それだけであつた。今自分の遇ひに行く尊威ある女友に近づくに従つて、胸は騒いだ。私は早手廻しに彼女の傍で生活することを喜んだ。けれども酔はされるやうな心地はしなかつた。一緒になるといふ事は、平生から待ち設けた目的で、別に目新しい事とも思へなかつた。一番思ひになつたのは、今度の爲事といふのは、甚麼事だらうといふことであつた。心の中は一體に平和で安穩であつた。決して天を翔ることもなく、眩暈を起すやうなこともなかつた。自然の景象は私の眼に入つた。原野の眺めも注意を惹いた。樹木や、家や、水の流れも私に現はれた。村徑の四つ角では確と迷はされた。我が身を忘れてはならぬと警めた。で、決して忘れずに濟んだ。一言で言へば、最早天堂を巡るやうな摹似はしなかつた。今居る現實の場所を離れて、遙かに遠くの方を眺めるやうなことはしなかつた。

1732(21)

いつても私の旅行と言へば、旅行の爲に旅行をするので、到着が氣に喰はなかつた。親愛な母に近づくといふこととて、胸は鼓動したけれど、それがために、別に歩調を早めるでもなかつた。欲するままに行き、欲するままに停る、これが私の道樂である。揺めく生フワイイシンドロントこれが私の願望である。藍色に澄んだ空の下見惚れるやうな自然の真中を突つ切つて、外側の束縛なしに跣足でぶら／＼歩くといふこと、そして行く先には、或る幽しい目的が控へてゐるといふこと、其處に一番よく私の趣味性に適合した生活方法があつた。「見惚れるやうな自然」といふ語が、何を意味してゐるかは、既に理解されたであらうと思ふ。幾ら美麗でも、平坦な景色は、私には然う解れない。急湍、岩石、喬木、幽林、連山、登り降り、の凸凹道、自分の足元に瞰下すのも、可怖しいやうな崖端、斯ういふものがなくては納らぬ。幸ひに此のやうな思ひ通りの自然をば、ジャンベリーの附近で、その十分な娯の中味に味ふことが慥つた。それは、バード・レシエル Pas de l'Échelle と S 山サンの近傍で、シャイニエ Chailles と S 山サンの岩石を開鑿して造つた街道の上手であつた。千世紀間の浸蝕作用で、漸くに出来たと想はれるやうな、恐ろしい洞窟を目覓けて、一條の細い流が泡沫を立てて突つ走つて

1732(21)

行く。天災を防ぐ爲に、路傍に土堤が築いてある。土堤の上は、丁度深い沈思や、自由な冥想に耽るのに都合がよかつた。何爲なれば、此の嶮阻な位置を好むといふのは、その嶮しさに頭腦が惘となるからだ。自分の足元さへ確かであれば、這麼場合に眩暈を感ずることが格別好きなのであつた。確乎と土堤につかまつて、幾時間といふものは、沸き立つ泡沫や、青淵の水を、ちよい／＼頸を突き出しては眺め入つてゐた。すると眼の下、二百米突ぐらゐの處で、岩から岩へ、草叢から草叢へ、連りに飛び交ふ鴉や小禽の啼く聲を縫つて、どろ／＼と鳴る水の音が聞こえた。崖下の傾斜の幾分か真直で、草叢を透して下の方の見える場所を擇んで、石を轉下して見る積りでは、はるばる遠くから大きなやつを持つて來て積み上げた。それを一つづつ放り込んでゐると、底へ届くまでに、轉がるかと思へば跳ね上がり、時には粉微塵に碎けて飛ぶのを眺めて、獨りて悦に入つてゐた。

もつとジャンベリーの方へ寄つた處で、それとはまた別な光景に出遇つた。道は丁度、初めて見るやうな美しい深の下を通るやうになつてゐた。山が真直に截つ立つてゐるので、瀑の水は岩に觸れずに、弓形に遠くへ落ちて、その裏が通り抜けら

れるやうになつてゐた。然し其の時に注意して通らないと、騙されて酷い目に遇ふことがあつた。私もそれてやられた。崖が見上げる程高いので、水は途中で散れて飛沫が其處ら中へ散亂する。て、その霧にさはると最後何の氣なしにゐても何時の間にか全身がびつしよりになつてゐた。

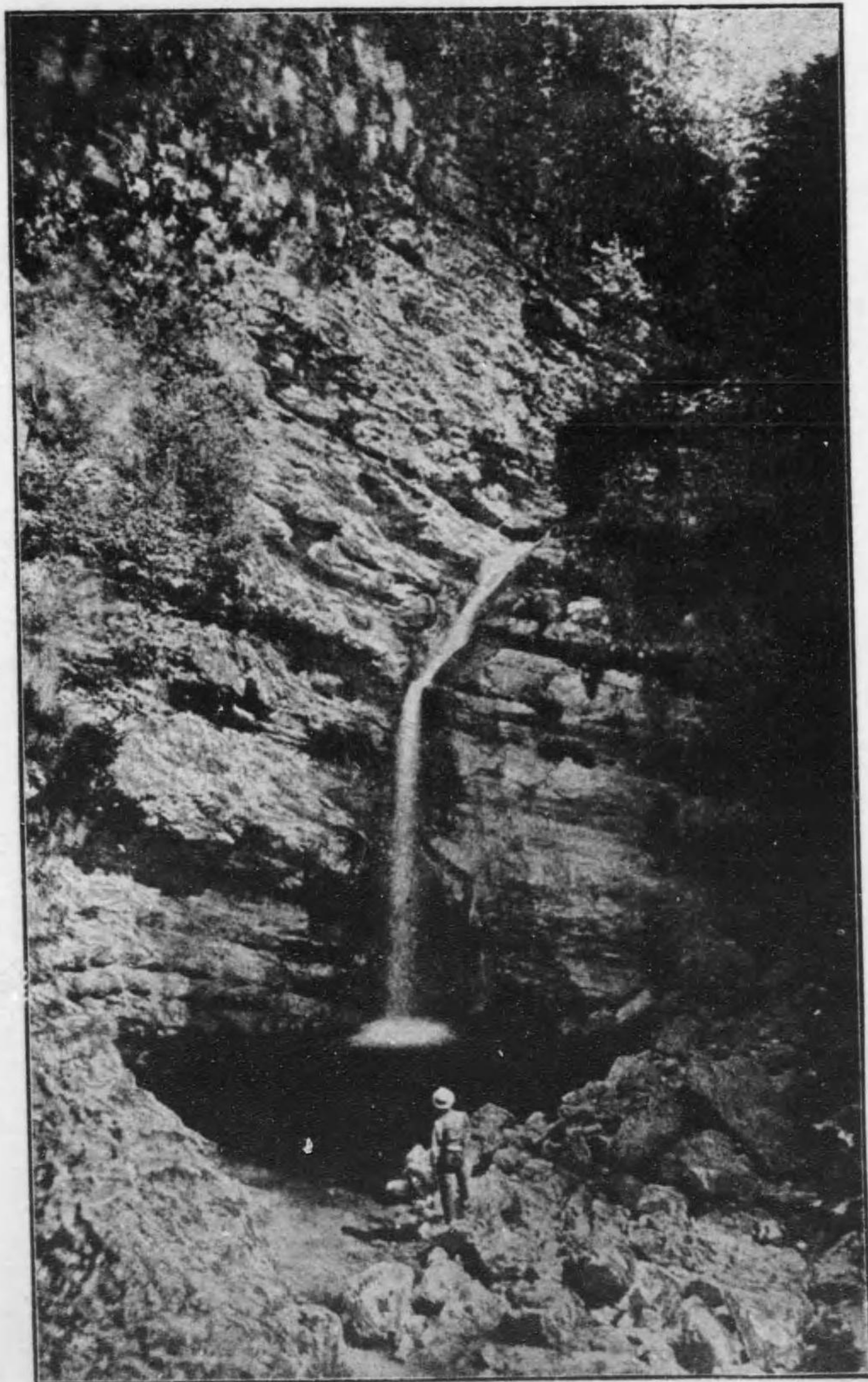
1732(21)

やうやくでシンペリイに著いて母に再會した。客が一人あつた。それは主計局長であつた。彼女は一語をも發せず、私の手を取つてその人に遇はせた。その時の彼女の晴やかな顔は、杜ちた胸を開かせるやうであつた。

「これが話申上げた兒でございます。どうか間に合ひますだけは、面倒を見てやつて下さいまし。然うなれば、もう此の兒のこととて心配致すことはございませんの。」

斯う言つて置いて私の方へ話を向けて、

「お前は今度から王様にお仕へ申すことになるのだよ。何事も局長様のお世話



(瀑 オソッル・クッァジ・ンァジ) 瀑の近附イリペンァシ

だからよくお禮を申し上げてね。

私は何と言ひ出すべきか何事も領解が出来ぬまゝに、目を瞪つて凝と眺めた。芽組みかける野心に心は占領されて、最早自分で局長になり済ましてゐた。しかし斯の幸運は、自分で想像したよりも、光りの薄いものであつた。が、現在としてはそれで生活するには十分であり、又私としては、此の上を望むことは出来なかつた。職業と言つたのは斯ういふ事であつたのだ。

ザイトリオアマデオ王は、最近戦争の結果と、父祖相傳の所領の現状から考へて、何時までもそれが自分のものであることを知つたから、その前に自分で放棄しようといふ思案をした。其處で、貴族に課税することになつたが、賦課を公平にして収入を増加させる見込で、新たに全國の土地の實測に着手した。此の事業は父王の代から始まつて、次代に至つて完了を告げた譯者云。一七三〇年、ザイトリオアマデオ二世は位を世子カルロ・エムマヌエレ Carlo Emanuele 三世に譲つた。人數が凡そ二三百人、半分は測量技手、半分は書記で、此の書記の中へ、私を加へて貰ふことにしたのであつた。大した好い位置でもないが、斯ういふ田舎で、生活の資本を

得るには不足はない。唯これが臨時の土地調査で、永續せぬ懸念はあるけれど、此の事業を終へた後に、一層安固な位置を求める踏み臺に出来る期望がある。母も其のために特に長官へ私の保護を頼んでくれたのであつた。

到著してから幾日も経たぬ中に、いよ／＼爲事に首を入れた。爲事と言つても、ひづかしいことはない。おきき手に著いて了つた。斯うしてジ・ネエを後にして四五年間狂痴と受苦とに身を委ねた後、始めて自力で立つて行く端緒を見つけたのである。

1732(21)

さて、是迄の長物語——幼時、少時の回想は洵とに下らぬことばかりと思はれたであらう。私もそれに疲れた。が、成る程自分も或る點では大人として生れては来たが、他の多くの點では、久しい間子供であつたし、今も尙依然たる子供である。私は讀者に對して、決して一個の大人物を提供しようとは約束しなかつた。約束は、有りのままの私といふものを描いて見せるといふことであつた。そして、後年

1732(21)

の私を理解するためには、是非とも初期の私を知つてゐて貰はねばならぬ。私に取つては事象そのものから受ける直接の感銘より、その事象を追想する時の感銘の方が餘程深い。私の思想は、悉く回想である。腦裏に刻まれた最初の印象は、永久に消え失せることがない。後から這入つて来る印象は、この先のものを磨滅せしむに、親しく結び附いた。まづ感情や思想の系列があつて、後から来るものをそれで整理するのが普通の手續きだから、正しい判断をするには、必ずこの系列を知つてゐなければならぬ。私は、此の基礎の原因を十分明かにして、それで結果との連鎖を意味あるものにしよと努めた。私は何等かの方法で、自分の靈を讀者の眼に透明ならしめよと望んだ。其がために、私は出来るだけ種々な見地から此の精神生活を讀者に示し、甚だに微細な事柄でも、洩らさず鮮明に現し出すやうな方法を取つた。然うすれば、私がどういふ根柢に立つ者であるかといふことを、讀者自身に歸納することが出来よと思つたのである。

若し私が結論だけを掲げて、私の性格は斯うであつたと言つたところで、恐らく讀者に對しては、縦しんば俺を過つ氣づかひはないにしても、彼奴自身で己を欺い

1732(21)

てゐるなといふことを思はせるだけであらう。それと反對に、私の一切の遭遇、一切の行爲、一切の思考、一切の感情を、出来るだけ細かく、そして生地の儘でならば立てたならば、故意でない以上は、讀者を過つといふことはあり得ない。此の方法にさへ據つたならば、讀者を錯誤に陥れるといふことは、容易に出来ないであらう。種種な材料を寄せ集めて、讀者自身に一個の人物を作り上げることは、その人々の任意である。すればその者は、彼等自身の作物だから、何か誤謬があつても、其の人の責任となるばかりである。此の目的から行くと、私の書くことは、單に誠實だといふだけでは未だ足らぬ。同時に精細でなくてはならぬ。私は自分て、事實の輕重を判定してはならぬ。私としては、單に一切の事實を提供するだけで、其の間に或る選擇を加へることは、讀者の方へ任せ切らなければならぬ。今まで私は此の考を念頭から離さないやうに、必死と努めて來た。今から後の話に就いても、また同様の覺悟を忘れまいと思ふ。然しながら、中年以後の追想は、初期のそれよりは、大抵鮮明の度が薄くなつてゐる。初期の追想に就いては、出來得る限り精細な描寫を試みた。若し中年以後の追想が、矢張初年のにも劣らぬ鮮明さを以て續々復

1732(21)

現されて來るやうであつたら、讀者は恐らく倦怠に堪へぬであらうと信ずる。けれども、私は決して疲勞は感ぜぬ。唯私の憂ふる一事がある。それは、餘り言ひ過ぎはすまいか、虚偽を書きはすまいか、といふことでなくて、言ひ足らぬ點はなからうか、真相を褻み隠すやうなことはなからうか、といふことである。

1732(21)-1736(25)

一七三二—一七三六。

シンベライへ著いて、王室の事業として、測量のことに關係し始めたのは、一七三二年であつたと思ふ。私も二十を過ぎて、一といふ年齢にならうとした。年齢に合はして感情の方は十分に發達したけれど、思考は尙だそれに伴はないので、切に指導する人々の手が待たれた。幾多の年の經驗はあつても、土臺から傳奇的の幻



第五卷

第五卷

1732(21)-1736(25)

影を逐ひ拂ふことは出来なかつた。殊に種々な悪徳に弄ばれて来たにも拘らず、
 那樣場合には更に出會した事もないやうに、全く世間も人間も知らなかつた。
 今起臥してゐるのは、自分の家、即ち母の家ではないか。それであるのに、アメン
 イの時のやうな室を見出すことは出来なかつた。庭もない、小川もない、平野もな
 い。彼女の住んでゐた家は、影の暗い物悲しい處であつた。そして私の室は家中
 で一番影の暗い、一番物悲しい處であつた。見晴らしの代りには壁、大通の代りに
 路次があるばかり、空氣は通はず、光線は射さず、居間は狭く、くしく蟋蟀や鼠が、朽ち
 た牀板の上を飛びまはつてゐる。これでどうして楽しい家といふことが出来よ
 う。然し何と言つても私は彼女の家の人となつて、彼女の傍に居るのだ。自分の
 卓に著いてゐるか、然うでない時は、彼女の室に入り浸りなので、室の陰鬱なもの忘
 れて居た。とにかく、這麼あさましい家に住むために、彼女がわざわざ此のシアンベ
 リイへ移つて来たのが不審でならなかつた。が、これは、尙且思はくがあつての事
 だ。それを一つ素破抜いて見ようと思ふ。

彼女がトリノへ行つたのは、好んで行つた譯でなかつた。最近の騒亂の揚句で、

1732(21)-1736(25)

宮中は未だ混雜の最中だつたから、本来ならまだ出掛けて行くべき時機ではなかつたのだ。其にもかゝらず、都合で、彼女が自身に出向かねばならなかつたと言ふのは、或は自身が忘れられて了ひはせぬか、冷遇を受けるやうな事になりはすまいかと氣遣はれたからである。殊に主計局長のサン・ロオラン Saint-Laurent 伯爵は、彼女の利益にならぬ人であることを知つてゐた。此の人はシアンベリイに舊い家を一軒持つてゐたが、酷い破屋で誰も借手がなかつたのを、彼女が進んで借りて移つて来たのであつた。是がために、わざわざ足を運んで行つたよりも、よい結果があつた。彼女の受け取る年金が削減されなかつたばかりでなく、其から後は、サン・ロオラン伯爵が、始終目を懸けて彼女と交際までするやうになつた。

家庭の狀態は、以前と大差がない。篤實なクロオド・アネエは相渝はずよく働いた。前にも話したやうに、彼はもとムウトリ、ウ・Moulin の農民で、子供の時分に、ジラ Tira 山中に這入つて、瑞西茶を製するために植物採集をしてゐたのを、ワレンヌ夫人が、召使の中に植物家があるのも便利でよからうといふ考で、おもに製薬をさせる積りで抱へたのであつた。植物の研究が何よりも好きであつた。母もそれが

ために、一方ならず獎勵した結果で、到頭眞物の植物學者になつて了つた。若し天
 死をしなかつたなら、實直な人間の事で、斯の學界に名を揚げることも出来たであ
 らう。沈著いた、重くしい人間で、齡も私よりは上であつたから、先生のやうに思は
 れて、大分自分の莫迦も癒してもらへた。彼の前では何となく可怕しくて、われを
 忘れることが出来なかつた。彼は主婦に對しても頭が高かつた。これは、主婦が
 惻巧な正直な男で、勤め振りもよいといふ處から、その言ふなりにさせて置いたか
 らである。

誰の眼から觀ても、彼は畸人て、私の知つてゐる人間の中では飛び離れた男であ
 つた。遲疑した、沈靜な、回顧的な、動作のはきはきせぬ、應對の冷かな、ぶつきらぼ
 う、何か意味有りげな、然うかと思ふと、非常に過激な情も蓄へてゐて、他には知らせ
 ぬやうにと裏んでゐながら、胸の中は懊惱に堪へ切れぬと言つたやうな處があつ
 た。一生に一度、この情のために莫迦な摹似をし出来た。それは我と毒を仰ん
 て死なうとしたことである。

その悲劇は私が來てから間も無くのことであつた。母は、此の男との親密な關

1732(21)-1736(25)

1732(21)-1736(25)

係を私に打ち開けねばならぬ羽目になつた。彼女の口からそれを聞かなかつた
 ならば、永久に私はそれに向つて疑を起さず、了つた處であつた。若しも精勤と
 熱心と忠實とで、斯ういふ報酬を彼女から得たものとすれば、道理といふべきであ
 る。そして彼がそれに相當した證據は、夫人の信用に負かなかつたことである。
 二人は稀に諍ひをすることはあつたが、何時も無事に納まつた。けれど一度無事
 に濟まないことがあつた。主婦が或る時激昂の餘り、男の方で我慢の出来ないや
 うな辱めの言葉を發したことがあつた。彼の相談相手には、絶望だけしかあかつ
 た。て手元に鴉片の小罎が有つたのを、みんな仰飲つて、これで永久に目を醒まさ
 ない覺悟で寢床に這入つた。不安に胸を騒がせてゐた夫人が、家中を彼方此方と
 迷ひ歩いてゐると、機會好く空罎を見つけたので、仔細が解つた。彼を搔ひにと飛
 んで行く時、夫人は雷ならぬ叫び聲を揚げて私を呼び立てた。事情を残らずうち
 明けて、私に助力を頼んだ。やつとの事で、呑んだ鴉片を吐かせて了ふことが出来
 た。此の場に臨んで、始めて様子は解つたものゝ、幾ら自分が間抜けとは言へ、直接
 に話を聞くまでは、二人の間にこんな關係が繋がつてゐるといふことを全然知ら

めくりのない教育が、一定の形を具へて、この後甚麼逆風の下でも儼とした操持を失はぬやうになつたのは、全く此の時期の賜物であつた。これと言ふべき事件にも出遇はず、時は暗黙の間に徐々として進んで行つたけれど、その發展は期して待つべきものであつた。

初の中は一圖に爲事の方へ心を奪られた。卓の束縛は他の考想を縦にする餘暇を與へなかつた。爲事の餘暇には、必ず母の傍にゐた。讀書の時間はなし、そんな氣も起らなかつた。然し、最早爲事がお定りになつて、精神を勞する事が少くなるにつれて、又そろそろ不安の念が萌して來た。書物が讀みたくて堪らぬやうになつて來た。そして此の願望は、いつでも何かの事情に妨げられる程、ますます増長する癖になつてゐたから、若し何等か他の嗜好が來てこの慾を紛らして了はなかつたら、丁度以前彫刻師の家の時のやうに終には激情に變じたかも知れぬ。

今度の爲事では、餘り高尚な數學など要らないが、時時難かしい問題に撞突することもあつた。此の困難に打ち勝たうと思つて、幾冊かの數學書を買つて來て、そればかりを研究した。相應に覺えられた。實用數學といふものも、本當に理解しよ

1732(21)-1736(25)

うと思ふとなかなか一寸考へたやうに淺いものではない。非常に面倒な計算などもあつて、随分達者な技手でも、迷つてくることがあつた。書物から得た觀念は、實地に當つてみると、一層明瞭になる。其の時には、自分で簡便な方法を案出することも出来る。従つて一種の喜悅の情も起り、精密といふ點で、理解力も満足するから、本來面白くない學科でも愉快に研究しようといふ氣になる。で終にはどんな算術の問題に出會しても、解けないといふものがなくなつた。

今日では、元習つた事が、日に／＼記憶から剝れて行く許りだが、此の學科だけは、三十年の餘も抛棄つて置いて、餘り忘れてゐない。四五日前にもダヴェンポット(Davenport)譯者云。後篇の末尾譯者の補注を看よを訪ねた時、宿の子供等が算術を觀てくれと言ふから、手傳つてやると、餘程込入つた問題が間違へずに解けて、自分で得意になつたことであつた。數字を並べて運算をしてゐると、丁度昔に立ち返つて、ジャンペリイにでも居るやうな氣がした。舊い事を憶ひ出したものだ。

技手等の持つてゐる著色地圖が、また圖畫の興味を惹き起した。それから繪具を買つて來て、花や景色を描き始めた。嗜好が圖畫にありながら、私にその技がな

1732(21)-1736(25)

1732(21)-1736(25)

ずにもたのは、我ながら呆れる外はない。然し、クロオド・アネエは、なか／＼の細心家であつたから、飛び抜けて眼の鋭い人でも、随分欺かれずにゐなかつた。二人の調和は始終圓滿に行つて、傍に居る私まで釣り込まれさうであつた。其からは、彼に對する尊敬が一層加はつて、或る意味では、彼の生徒、否、良生徒になつた。

然し、私は自分より他の人間が、私以上の親密さで彼女と交り得るものとはどうしても考へることが出来なかつた。自分でも、此の位置を占領しようといふやうな氣は更にないのだが、他人がそれを占領するのを見ては、感情を害せず居られなかつた。これは道理なことであつた。にも拘らず、彼女を横取りしかけてゐる此の男を憎むどころか、却つて自分の夫人に對する愛情が、その男にまでも波及して行くやうに感じた。私が夫人に望む第一のものは、夫人の幸福であつた。夫人のアネエに望む第一のものも、尙且アネエの幸福であつた。それゆゑ、アネエが幸福であれば、私もそれに不満はない。彼は又十分主婦の氣に入られてゐる上、私にも眞情を傾けた。位置を振りかざして威張り散らすやうな事もなかつた。唯實際に知慮の優れてゐる點だけで、私の上に立つてゐた。彼の賛成しない事は、私も

1732(21)-1736(25)

押し切つて爲る氣にはなれなかつた。不都合な事さへなければ、彼も無暗に非認するやうなことはなかつた。私達は斯うして幸福な一致の中に生活した。此の一致は誰かの死ぬまで破れることではなかつた。此の愛すべき夫人の淑徳に富んだ證據は、夫人を尊愛する人同士は、また互ひ／＼に敬愛を忘れなかつたのを見て解る。嫉妬、競氣も、一たび彼女の優しい力強い感情に觸れるとすぐ消えて亡くなつた。彼女を取り繞く人々の間には、一度として角芽だつやうなことはなかつた。讀者は少時書物を措いて、この讀詞に値する程の婦人が、外に在るか考へて見給へ。若し幸にしてあつたら、其の婦人に隨つて生活の慰安を求めが可い。

私がシャンペリイに来てから、一七四一年に復た巴里へ向けて出掛けた、八九年の間は、別に話をする程の出来事も起らず、生活は至つて順調で、單純であつた。今迄は絶え間なき困累のために、自分の性質を鍛へる暇もなかつたが、是からは是非とも此の順境を利用して、其の陶冶を圖らねばならなくなつた。今までの雜駁な、

めくくりのない教育が、一定の形を具へて、この後甚麼逆風の下でも儼とした操持を失はぬやうになつたのは、全く此の時期の賜物であつた。これと言ふべき事件にも出遇はず、時は暗黙の間に徐々として進んで行つたけれど、その發展は期して待つべきものであつた。

初の中は一圖に爲事の方へ心を奪られた。卓の束縛は他の考想を縦にする餘暇を與へなかつた。爲事の餘暇には必ず母の傍にゐた。讀書の時間はなし、そんな氣も起らなかつた。然し、最早爲事がお定りになつて、精神を勞する事が少くなるにつれて、又そろそろ不安の念が萌して來た。書物が讀みたくて堪らぬやうになつて來た。そして此の願望は、いつても何かの事情に妨げられる程ます／＼増長する癖になつてゐたから、若し何等か他の嗜好が來てこの慾を紛らして了はなかつたら、丁度以前彫刻師の家の時のやうに終には激情に變じたかも知れぬ。

今度の爲事では、餘り高尚な數學など要らないが、時々難かしい問題に撞突することもあつた。此の困難に打ち勝たうと思つて、幾冊かの數學書を買つて來て、そればかりを研究した。相應に覺えられた。實用數學といふものも、本當に理解しよ

1732(21)-1736(25)

うと思ふとなかなか一寸考へたやうに淺いものではない。非常に面倒な計算などもあつて、随分達者な技手でも、迷つくことがあつた。書物から得た觀念は、實地に當つてみると、一層明瞭になる。其の時には、自分で簡便な方法を案出することも出来る。従つて一種の喜悅の情も起り、精密といふ點で、理解力も満足するから、本來面白くない學科でも愉快に研究しようといふ氣になる。で終にはどんな算術の問題に出會しても、解けないといふものがなくなつた。

今日では、元習つた事が、日に／＼記憶から剝れて行く許りだが、此の學科だけは、三十年の餘も拋棄つて置いて、餘り忘れてゐない。四五日前にもダヴェンポット Davenport 譯者云。後篇の末尾、譯者の補注を看よを訪ねた時、宿の子供等が算術を觀てくれと言ふから、手傳つてやると、餘程込入つた問題が間違へずに解けて、自分で得意になつたことであつた。數字を竝べて運算をしてゐると、丁度昔に立ち返つて、シンペリイにでも居るやうな氣がした。舊い事を憶ひ出したものだ。

技手等の持つてゐる著色地圖が、また圖畫の興味を惹き起した。それから繪具を買つて來て、花や景色を描き始めた。嗜好が圖畫にありながら、私にその技がな

1732(21)-1736(25)

かつたといふことは不幸であつた。木筆や、畫筆の間に居れば、幾月でも、静と家の中て暮らすことが出来たであらう。餘り凝り過ぎたために、傍で黙つてゐないやうになつた。是に限らず、何の道に凝り出しても、必と斯うなるのが癖である。増長はする、夢中にはなる、遂には、その事の外は何物も眼に這入らなくなつて了ふ。年齢は取つても此の癖ばかりは痊らない。現に私が今これを書いてゐる最中ても、老老の癖に礙に解りもせず、益に立ちさうもない或る學問譯者云。植物學に溺り込んでゐるのだ。若い時分から深い研究を積んだ人たちですら、老いては願ひもすまいと思はれるものを、私は年老つてから、ぼつぼつ始めたいと思つてゐる處だ。

「或る學問といふ奴を、其の時に十分研究すれば、便宜が多かつたものと思ふことがある。位置がそれに適當してゐるから、そこを利用して、と思はぬてはなかつた。アネエが珍奇な植物をどつさり蒐めて歸つて來た時の満足らしい眼の色を見て、私も二三度連れ立つて採集に出かけようとしたこともあつた。一度でも此の男に跟いて行つた事があつたら、忽ち味を覺えて、今では一廉の植物學者になり

濟ましてゐたにちがひない。何爲なれば、私の自然趣味と一番親密な關係のあるものは、植物學であり、又その以後十年間の、私の原野生活といふものも、——確かな目的方法は備つてゐなかつたにしても——要する所、不斷の植物採集が主な爲事であつたからだ。然し、其の時は、植物について、奈何といふ考もなく、たゞ莫迦々々しいもの、可厭なものと思ふ外はなかつた。つまり一般の素人と同じやうに、植物學は藥物學の手引とばかり考へてゐた。母は植物が好きであつたが、それは他の考があつてなく、唯自分の製る藥品の原料にする積りて、普通植物ばかり蒐めた。斯ういふ譯から、植物學も、化學も、解剖學も、すべて私の頭の中では、藥物といふ總稱の下に雜居してゐた。唯毎日面白づくに、冷評して見れば、折々母に脅かされたりなどするばかりであつた。

此の外にも、一つの趣味がぼつ／＼發達し出して、やがて他の一切の嗜好を吸收して了つた。それは音樂である。確かに私は音樂のために生れて、幼年の頃からその味を噛み分けた。こればかりは、何時、如何な場合でも興味を持ち續けた。それほど天稟ともいふべき音樂でありながら、稽古に骨の折れたことは嘘のやう

1732(21)-1736(25)

て生涯かゝつて練習を怠らなかつたに、一見して樂譜通り正確に唱ふことが出来なかつた。それほど進歩の遅かつたのは不思議である。でも親愛な母と一緒に唄が唱へると思ふだけで、何となく樂みには感じた。外の嗜好では二人の間に一致は少かつたが、音樂だけは幸ひに二人を結び附けた。母の方は、大分私より上手であつた。其の時に漸く母に隨けるまで進んで、二三回の練習で、鼓歌ぐらゐはともかくも遣つて退けることが出来た。ひよつと母が竈の前で忙しうにしてゐるのを見て、

「お母さん、面白いゾエトオがありますよ。これを唱つてると、藥がいゝ鹽梅に煮立ちますぜ。」

と私が言ふと、

「また那樣ことを言つて、若しか藥が焦げついてゝも了つたら、屹度お前に吞ませ上げて上げるから可い。」

と彼女が答へる。無理無體に彼女をクラヴサンの處へしよびいて行く。火に掛けた藥のことなどは忘れてゐる。杜松子やアブサントの精分は、皆焼け附いて了

1732(21)-1736(25)

つてゐる。それを母が私の顔へべた／＼塗りつける。どうして、大へんな騒ぎだが、そんな事が私達に面白かつた。

爲る事がいろいろあつて、時間がなかなか足りなかつたといふことは、これに直に知れよう。未だその上にもう一つ娛樂が殖えて、他の總ての向うに廻るやうなことになつた。

私達は氣息の窒りさうな牢獄と言つてよいやうな家に住んでゐた。だから、時新らしい空氣を吸ひに出る必要があつた。で、アネエの勸めて郊外に庭園を借りることにして、其處へ種種な樹を栽ゑつけた。此の庭園には、ちんまりとした別荘が附屬してゐて、一とほりの設備が整つてゐた。寢床などもあつた。私達は其處へ行つて晚餐を喰つたり、時時寝たりした。何時とはなしに此の小さな別荘がすつかり氣に入つて了つて、本を持つて行つたり、版畫などを澤山運び込んだ。暇があれば家の裝飾に必死となつて、母が散歩がてら立ち寄つた時に、驚かしてやらうと企んだこともある。彼女を放つて獨りて此家へ来て、そして彼女のことを考へ込んで、樂みに耽つたこともある。これも依然私の氣まぐれの一つで、別に辯

第五卷

明しようとは思はぬが有つたことは有つたこととして自白して置くのである。ちよつと憶ひ出したことがある。リックサンブル夫人が、或る男を冷評して這麼話をしたことがあつた。其の男が一緒に居る戀しい女に手紙が遣りたくなつてわざ／＼餘所へ離れて出ることがあるといふことであつた。其を聞いて私も丁度そんな風の男ですと、リックサンブル夫人に言つたが、それに附け加して實は時其の男を正て行くことさへあります、と言へぬこともなかつた。かと言つて、私は彼女と離れてゐなければ戀しくならぬといふのでもなかつた。顔を合はしてゐても、自分獨りゐる時と心持に少しも區別はなかつた。是はしかし、男女に拘らず、またどんなに自分の思慕する人であつても、母以外の人の傍ては到底望まれぬことであつた。けれども、彼女は大抵の時は訪問客に圍繞れてゐる。殊に自分とは氣質のあまり合はぬ客が多かつたから、輕蔑と煩ささとのために、餘儀なく自分の隱栖に引籠つて、邪魔のないところで、思ふさま彼女を思ひ詰めてゐたのである。

第五卷

斯うして爲事と、娛樂と、研究とに心を費やした。その生活はまことに穩かであつたが、歐羅巴の方は、私の身の上のやうに平らかにには行かなかつた。佛蘭西と、皇帝とは、互の間に宣戰を布告した。サルヂニア王は此の戰爭に参加した。そして佛蘭西軍は、ピュモンテに侵入してミラノ Milano を威嚇しようとした譯者云。この時一七三三年の末、波蘭王位繼承の亂が始まつて、佛蘭西方は國王路易第十五世の舅に當るスタニスラフ Stanislaw を援け、皇帝カルル第六世と露西亞のアンナとはザクセンの選舉侯アウグスト三世を援けた。そのミラノ侵襲隊の總督はヴァリアル Villars 將軍であつた。その一師團はシャンペリイを通過した。其の中のシャンペリアニ、聯隊の隊長はラトリムイユ Le Trimoille 公であつた。私は此の人に遇つて、種々な利益を約束されたが、彼は屹度私のことを忘れて了つたであらう。私達の別荘は郊外の高地に建つてゐた。軍隊はすぐその傍を通つたので、面白がつて見物に出かけたばかりでなく、恰も此の戰爭が自分の一身にも關係あるものやうに、一方ならず氣に掛けた。其の時まで、私は些とも政治のことに興味はなかつたが、こゝを始めて新聞を読み出した。そして自分の最負が佛蘭西の方であ

1732(21)-1736(25)

つたから、甚麼に小い勝利でも、佛蘭西方だといへば嬉しく胸が騒がれ、それが反對なら自分が打ち負けたも同様の心配に閉ぢられた。這麼氣まぐれが、唯一時のことであつたのなら、茲て話をせずともだが、しかしこの事は別に理由もなしに深く心へ沁みついて、此の後私が巴里で非專制主義や、大膽な民主説を倡道した時でも、自分の卑みつゝある其の國家、誹りつゝある其の政府に對して、内心窶かに依怙最負をせずにもらねぬほどになつた。面白かつたのは、自分の主義に反對な傾向を持つてゐるのが氣恥しく、誰にも此の事は打ち明かさないうて、唯佛蘭西の敗軍を嗤つてゐながら、心の負傷は彼等自身のそれよりも太甚しかつたことである。自分を厚遇してくれる人民と共に住み、その人民を崇拜してゐながら、表には彼等を輕侮するやうな假面を被つてゐたといふやうなことは、私でなくては出來得まいと思ふ。それでも最負の力は可怕しいもので、私が佛蘭西を出てからでも、——また政府も、官憲も、論客も、揃つて私に怨を抱くやうになつてからでも、——非理、不當、侮辱が身に降りかかるやうになつてからでも、——私はこの氣まぐれを治すことは出來なかつた。甚麼に佛蘭西人から冷遇されようとも、彼等を受することは渝ら

1732(21)-1736(25)

ぬ。

私は長い間此の最負の原因を考へてみたが、それを生み出した場合の外は奈何しても見出すことが出來なかつた。文藝の趣味が次第に深くなつて來て、佛蘭西の書物が一番私の注意を惹いた。従つてその著者、著者の郷國といふものが慕はしくなつた。佛蘭西の軍隊が、私の眼の下で分列を行つたときなどには、丁度ブラントオム Brantôme の「名將傳 Grands Capitaines」を讀んでゐた。頭の中は、クリッソン Olliverson や、イヤアル Bayard や、ロオトレヘク Lantree や、コリニイ Cohigny や、モンモランシイ Montmorency や、ラトリムイユなど一杯になつてゐて、是等の將軍の功業や武勳の繼承者として、其の子孫を尊敬した。通つて行くどの聯隊を見ても、私は昔しビエモンテで多くの功績を挙げた彼の有名な黒旗兵を今復た見るやうに思つた。私は書物から得た種種な感想を、今睹るものに當てはめてみた。不斷に讀む書物は皆この國のものばかりなので、その國まで愛せねばならぬやうになり、遂に何物にも破られぬ盲目的な最負の癖が出來上つて了つたのであらう。其の後私は那箇這箇を旅して廻つて斯う氣附いた。——あゝ言つた印象は私に對してばかり

1732(21)-1736(25)

てない。佛蘭西は文藝の國だと言つて、多少ともに最負する者は何處の國にてもある。と然う思ひ知ると、佛蘭西人の尊大な風も、それ程悪く感じなくなつて來た。佛蘭西の小説は、佛蘭西の住民よりも餘計に各國の女子たちを牽きつける。名作の戯曲は、青年を駆つて佛蘭西の劇場に走らせる。高名な巴里の劇場は、外國人の羣集を吸ひ寄せる。吸ひ寄せられた人たちは皆、熱心な崇拜家となつて歸つて行く。とにかく此國の優等な文學は、人の感情を征服する。今度の戦争の結果が香しくなかつたにも拘らず、文學家、哲學者たちは、軍人のために曇らされようとした佛蘭西の榮光をば、その力て持ち直した。

熱心な佛蘭西人、そこから私は政客となつた。道聽塗説の男女と一緒に、四つ角で立つて郵便の來るのを待つてゐた。寓言の中に出て來る驢馬よりも、もつと淺はかな私は、今度は何の主人のために駄荷を背負つて行くことになるだらうと思つて、ひどく取越苦勞をしたといふのは、其の時の噂で、私達は佛蘭西の所轄に這入つて、サヴァアとミラノとは、交換になるであらうと言ふことであつたからである。けれども、實際私は幾分の疑懼を抱かぬではなかつた。何爲なれば、若し此の戦争

1732(21)-1736(25)

が同盟軍の方の不利に終はつたら、忽ちワレンス夫人の年金にさし響いてくるからであつた。然し、私は十分益友たる佛蘭西人を信用した。そして今度は、ブロイユ Broglie 將軍の驚いたにも拘らず、此の信用は誤らなかつた。今迄考へたこともないサルデニアに感謝しなければならぬ。

伊太利亞では戦争中に、佛蘭西の方では歌舞が始まつてゐた。ラモオの歌劇は、佛蘭西で大した評判を取つた。彼の音樂論は難解の點で崇拜者はごく小い範圍に限られてゐたが、復た呼物になり始めた。私は不圖彼の「和聲論 Traité de l'harmonie」の事を知りて早速本を買つて來た(譯者云。Jean-Philippe Rameau. 一六八三年)。佛蘭西デジヤン Dijon に生れ、一七六四年巴里で歿。樂理に通じ、又オペラの刷新を名を馳せた。樂理に關したものは本文の「和聲論」の外に Nouveau système de musique théorique が名高い。オペラ又はバレエの Ballet 作許多ある中で特に著しいのは Hippolyte et Aricie, Castor et Pollux, La Princesse de Navarre, Le Temple de la Gloire 等。ラモオ

とヴォルテールとルッソとの關係談は、第七卷に詳しく出る。

丁度それは私が炎症を起した時、豫後に一箇月もかかつて、外出も出来なかつたから、その間にも思つて「和聲論」を読み耽つたが、冗長で、錯雑で、本當に理解するには、餘程手間が取れさうに見えた。て、それも歌めて、新奇にまた樂譜を読み出した。ベルニエ H. Bernier の歌謠曲などは、よく練習したもので、始終胸の中を往來した。四五曲譜記した中に「眠れるキツビッド Les Amours dormans」といふのがあつて、その後もう一度見る機會もなかつたが、大方忘れてゐない。「蜂に螫されたるキツビッド」 Amour piqué par une abeille」といふクレランボオの愉快な歌謠曲も、此の頃習つたまゝ、よく覚えてゐる。

よゝ鹽梅にパレエ Palais と言ふ人の良い若いオルガニストの僧侶が、アオスタ Aosta の山地から出て來た。クラヴサンが巧手に弾けた。早速遇つて、昵懇になつた。伊太利亞で名高いオルガニストの弟子であつた。種々な自家の樂理を聴いて、それをラモオと比較してみた。頭の中は、伴奏だの、和絃だの、和聲だの、一杯になつた。唯それらに對する自分の耳を拵へることが必要になつた。母に強請ん

て毎月一回づつ、家で音樂會を開くことにして貰つた。それから晝といはず、夜と言はず、他の事は顧みないで、そればかりに熱衷した。時間の大部分は、樂譜や演奏者や、樂器を集めたりすることにかかつて了つた。母も唱つた。此の前にも、後にも出る神父カトン、此の人も唱つた。ロオシ、Rochie といふ舞踏教師とその息子とは、ヴィオロンを弾いた。ビエモンテの音樂家で、其の後巴里に行つて結婚したカナブス Canavas といふ人が、一緒にやはり測量にかゝつた關係から、これも來てセロを弾いた。パレエはクラヴサンの伴奏をやつた。私は柄になく、棒乳切を振りまはして指揮者たる榮譽を荷つた。甚だに楽しい會だつたらう！ トレエトラン氏の家で開いた會とは比べられないにしても、大して劣りもしなかつた。會の主催者が、王の情で命を繋ぐ、新改宗者のワレンス夫人だといふ事は、仲間中の偏信家には不平を起させた。然し譯の分つた人たちには、愉快な娛樂であつた。譯の分つた人では、誰が一番だつたらう。それは一人の修道僧であつた。腕もあり人柄の良い人もあつた。此の人の薄倖は、その後私の心を痛めた事夥しい。殊に彼の記憶と、自分の樂しかつた日のそれとが結び附いてゐるので、今でも哀れ

1732(21)-1736(25)

に思はれてならない。其の人はフランス教會の神父カトンである。前にドルタン伯と一緒に里昂で那の氣の毒な小猫君の樂譜匣を押收したその人である。この舉動は決して彼の歴史を飾るものではなかつた。彼はソルボンヌ大學の得業生で、久しく巴里に住んでゐたから、上層の事情にも通じ、殊に當時サルヂニアの大使であつたアントルモン Aulmeiron 侯爵の知遇を得てゐた。背の高い清楚な、圓顔の、眼つきの可愛い、黒い髪を厭味なく兩鬢へ捲縮らせて、一見して貴族的に、快瀾に、謹直に見える人であつた。動作が滑かて程がよくて、坊主臭い所もなく、鐵面皮な風もない。然うかと言つて、流行の輕薄才子らしい様子は勿論見えぬ立派な紳士であつた。僧衣をも恥ぢないで、良い社交界に立ち交つて、自重と自信を失はなかつた。音樂の教師になるほど深い研究はなかつたが、素人にしては勿體な過ぎるくらゐよく知つてゐた。自分の技倆を吹聴しないから、奥床しく見えるといふ得もあつた。世俗との交際が長かつたから、硬い學問より面白い藝術の方が好きになつた。感情に富み、詩も作り、話が巧く、唄も上手で、顔は美し、オルガン、クラヴサン、那箇も弾けた。此人を迎へるにしても、斯う種種の長所は要らなかつたのだ。

1732(21)-1736(25)

それがこの有様であつたので一層歓迎された。かと言つて、この爲に職務を辭るといふことはなかつた。て競争者の嫉視も多かつたけれど、自分の郷里のデフ・ヒトゥール Défendeur 即ち俗に云ふ教會の大黒柱に選ばれた。

神父カトンは、アントルモン侯爵の屋敷で、母と知己になつた。私達の方の音樂會のことを聞いて、それなら一つ出ようと言つて、それから來て光を添へた。皆揃ひの音樂狂であつたから、すぐ懇意になつた。若し強ひて隔てをつければ、向うは本物の音樂家であり、私はほんの駈け出しに過ぎなかつただけだ。カナダスやバレエ師と伴つて、その室に行つて演奏したり、祝祭日などにも彼のオルガンで唱歌した。又折々彼の隱栖で晚餐會をやつた。僧侶に似ない客々としたことが嫌ひで、何事をも派手に贅澤にする官能家であつた。音樂會の度ごとに母の家で晚餐を喰つて行つた。その時の愉快さ面白さ。人々は腹の底迄傾けて話した。ジュエトオも唱つた。私は氣が暢りとした。高興は私の機智を誘ひ出した。カトンは可愛く見え、母は尊く見えた。バレエ師は牛のやうな聲で吼え出すから、會の騷り物になつた。ああ、心行く許り嬉まされた青春が去つて後の年久しさにうち驚く。

1732(21)-1736(25)

哀じべき神父カトンに就いては、たとと話す機会もあるまいと思ふから、茲て簡單に彼の悲惨史を結ばう。彼は價值ある人物であつた。僧侶として、少しも墮落の虞なしに、都雅な態度を持ち續けてゐたのに、他の修道僧等は、自分達と同じ様な惡者でないといふ其の點から深い怨みを抱くやうになつた。首魁達は、彼に反對して黨を結んだ。そして彼の位置は狙つても、實力のない賣僧どもを囂集つた。皆して彼を散散に辱かしめて、遂にはその位置を奪つた。質素ではあつたが折角彼が丹精して凝つた裝飾などのしてあつた室まで捲きあげて、何處かへ放逐して了つた。斯ういふ虐待の結果は、誠實な誇りを持つてゐた彼の精神を、夥しく動亂させた。ごく快闊な社交界の花形は、何處かの土窖か、牢獄の冷たい寢床の上で、知る限りの、やさしい人々に惜まれ嘆かれて、重なる憂愁の裡に死んで行つた。強ひて彼の不都合の點を求めれば、修道僧であつたのが不都合といふより外に何もな

50

1732(21)-1736(25)

這麼生活に馴らされて、音樂に身を入れた外には、他事を顧みる邊もなかつた。心にもない爲事を厭々ながら勤めてゐた。その束縛と骨折とは刑罰を受けるよりも苦しく、いつそ爲事を廢して音樂に身を委ねようかとも思つた。けれども然うするには反對を受けることは知れてゐる。定住の心もない樂師達の尻馬に乗つて職務を抛ち、俸給を棄てて了ふこと、——これは我が母を喜ばすには餘りに考のない爲方であつた。それが思つたとほりに成功するものとして見ても、多寡の知れた音樂師といふ處が、行き留りになるだけであつた。母は私のために大きな希望を抱いてゐた。オオボンヌの言葉をも信じないで、私が下らぬことに氣を取られるのをなさげなく思つた。巴里では其程流行らないが、此の地方に言ひ傳へた斯ういふ諺を始終繰り返して聞かせた。

Qui bien chante et bien danse

Fait un métier qui peu avance.

唄やをどりて出世は出来ぬ。

彼女は一方で、私がこの強い嗜好のために、逆上せてぼんやりして了つてゐるこ

1732(21)-1736(25)

とを知つた。職務はそのために奪り上げられる虞があつた。それほどなら、自分から進んで辭任した方が、餘程氣が利いてゐる。私は母に斯う言つた。この爲事はそれ程永續はすまいから、今の内に何か將來の策を立てておかねばならぬ。何時まで他の厄介になれもすまい。また今さら新奇な職業を覺えようとしたところで、年が長けては成業の見込もなし、麴包すら得られぬやうな羽目になつて了ふ外はないから、其よりは自分の趣味にも適ひ、母も勧めてくれた音楽をどうでもして完成げた方が、はるかに利益でなからうかと。理窟づめに納得させるよりも、甘えたるやうな哀願の調子で、到頭彼女を説き伏せた。すぐ土地調査局長コッセルリイ(Cocelli)氏の處へ、恰もそれを名譽のやうに挨拶かたへ、出掛けて、屑く職務を抛つた。固より正當な理由も、口實もなしに然うしたのであつたが、考へてみれば、足かけ二年前に、始めて此の職を得た時にもまさる程の嬉しさであつた。

無分別は勿論だが、新しい境遇に變つたために、地方の人からは却つてよい鹽梅

1732(21)-1736(25)

に尊敬を受けることになつた。或る者は、何處かに尻押しをするものがあつて、暗に私を助けてゐるのだと考へた。或る者は、職業を放つてまで、熱心になるからは、實際相當な音楽家に相違あるまいと判断した。盲人國では隻眼の者が王である如く、此の界限は音楽に聳の者ばかりであつたから、立派に音楽の先生で立つて行けた。少くも聲樂の下地はあり、いくらか年齢と風采にも助けられて、生徒も可成り集まつて來たので、測量の書記でゐるよりは、収入も増した。

生活の樂しさを思つて、這廬に速く一方の極端から、他の極端へ移るといふことは、到底出來ないことであらう。書記をしてゐれば、毎日八時間ぐらゐづつ可厭な爲事も爲事だし、仲間には一層可厭な、頭髮も手入れせず、垢は溜り次第の田舎者等と一緒に、氣息と汗とから來る惡臭を堪へ、して、陰氣な事務室内に密閉されてゐなければならぬ。

心配と悪い空氣と、壓迫と、疲勞とて、眩暈を催すことも少くなかつた。其と違つて、突然明い世界へ躍り出て、良衆の家へ招かれて盛んにやい／＼言はれるやうになつてからは、甚麼心持であつたらう。何處へ行つても大事にかけられて、可愛が

1732(21)-1736(25)

られて、お祭り騒ぎをされて、美しい貴女たちに待ち兼ねられて、全心の媚に迎へられて、引つ張り合ひをされて、眼に入るものは愛嬌満々としたものばかり、鼻を撲つものは薔薇やオランジの花の香ばかり。唱歌と私語と、艶笑と遊樂と。これらの包圍は、いくら切り抜けて行つても際涯がなかつた。すべて是等の樂みには、甲乙がない。だから執れを探らうと言つて躊躇することは要らぬほどのものであつた。この時には全く遺憾を感ずるやうなことはなかつた。今日になつては、一切の行動を理性の權りに懸けるやうになつて、當時峻かされた無考へな動機には與しなくなつたが、それでも此の時のこと、悔を貽したと思ふやうなことは何もない。

意欲の動くさまな振舞ひをしながら、少しも豫期に欺かれなかつたのは、この時だけであつたらうと思ふ。この地方人の人懐かしさ、穩かな氣風、隔てなき好意は、愛すべき社會との交際の味はせた。この味から推して、若し私に反社會的の氣分があるとすれば、それは私の罪よりも、社會の罪とせねばならぬ。

不幸にしてサヴァアの人々は餘り富んでゐない。けれども、若し富んでゐたら一

1732(21)-1736(25)

層不幸であつたかも知れぬ。何となれば彼等は皆、私の知つてゐる限り一番やさしく、一番社交的な人達であるからだ。愉快に、そして始終滄らぬ交際の間に、生興味を味ひ得るやうな小都市が世にあるとすれば、それはシアンペリイであらう。此の邊の貴族は、生活に必要な財産を持つてゐるだけで、贅澤をするほどの餘裕はない。て無暗と野心を煽ることも出来ないから、已むを得ず、キネアス Kinens の誠めに従つてゐる譯者云。キネアスは上古エペロス Epeiros 王ピロス Pyrrhos に臣事した政治家。また雄辯を以て聞こえてゐる。ピロスは羅馬に對して絶えず戰鬥を續け、満満たる野心の餘、キネアスの忠諫をも肯かないで、伊太利亞へ侵入した。非常な惡戰の末幸にして勝利を得たけれど、つくづくキネアスの言葉が身に應へた。キネアスの此の諫言はブルウタルコス「英雄傳」にもボアロオ Boileau の「上奏文 Epître au roi」にも出てゐる。つまりキネアスといへば、非望を遇める人といふ意になる。彼等は壯年には軍職に身を委ね、任務を終へてから、再び郷里に歸つて靜かに餘生を樂む。名譽と義理、それが彼等の殊に重んずる所のものである。女は美しい。そして唯美しいだけで満足してゐる。艶なる色を競べようとするれば、彼

1732(21)-1736(25)

女たちにも素質はあるが然うはしない。職業柄として、多くの若い女たちに接した私は、シャンペリイで一人として愛嬌のない娘を見なかつたのも一奇である。これは、私に、然う思つて了はうとする心があつたからであらうと言ふかも知れぬが、私には殊更然う思はなければならぬ必要もなかつた。眞實自分の女生徒たちのことを回想するに愉快の伴はぬといふことはない。

多くの愛らしいその生徒たちの名前を擧げて、その人たちに取りまかれて、無邪氣に楽しく送つた幸福なその時分のことを回想して見よう。

まづ第一にはメラレド嬢がある。近所の娘で、ゲエム氏の弟子になつてゐる子供の姉妹に當る。髪は薄黒い、生々として愛の零れるやうな、快闊で敏捷な、それで少しも輕はずみな所のない娘であつた。少し僧身な方だが、これは、此の年頃の少女には有りがちなことだらう。輝いた眼つき、清楚した物腰、牽きつけるやうな舉止は、肥つてゐぬからと言つて、人の目を歡ばすに不足はない。私は毎朝彼女の家へ通つて行く。すると毎時大抵褻服のまま、髪は無造作に縮ねて、私が見える、と、色ある花をそれに挿し添へ歸つて行く時には、それを抜いて髪を上げ直すので

1732(21)-1736(25)

ある。世の中に褻服を着た美しい女ほど可怕しいものはない。晴れの衣物を着飾つた女は、これに比べれば、私を驚かすことは百分一にしきや當らぬ。

午後に訪ねて行くマントン Mention 嬢が即ちそれ、彼女から得た快い印象は、それとは種類が異つてゐた。灰色がかつたブロンドの髪、繊美な姿、純白な色、何處か用心深い處があるやうで、緩やかに透き通るやうな、音律の正しい聲は、包ましかかに聞き做される。胸元に熱湯で火傷した瘰がある。青い布で裹んでゐるが、隠し切れぬ。時時それを注意してゐると、後にはその注意が瘰痕を離れて外の方へ行くやうになつた。

シャルル Challes 嬢、これも近所の娘の一人で、大人びた、背の高い、肩つきの優しい、肉置のふつくらした、よい女であつた。美人といふほどではないが、ごく淑雅な、氣性の沈著いたといふ點に取り柄がある。此の女の姉の、シャルリイ Charly 夫人、これがシャンペリイ切つて第一等の美人であつた。自分では音楽を稽古しないが、娘の子は習はせた。この娘は、未だごく年若であつたけれど、母ゆづりの美貌は、確かに將來に約束を持つた。強ひて難を言へば、少し髪が結茶けてゐるだけが疵であつ

た。

ウイタシオン教會に、一人の佛蘭西の貴女があつた。名前は忘れたがこれも決して私の名簿から洩らすべきものでなかつた。いかにも女僧らしい徐かな物憂さうな調子の人であつたが、その物憂さうな聲で、飛び離れて奇抜なことを言ふので、何となく不釣合に思はれた。とかく彼女は懶け癖があつて、その才の發揮されることを好まなかつた。誰が然うしようとしても承知しなかつた。一二箇月の間私が懶けた稽古を續けた揚句に、これ私をもつと勉強させようとしたのだ。私は自分と自分を鞭つて勉強する氣にはなれぬ人間であつた。生徒を教へてゐる時は、愉快でも規則正しく出かけて行つたり、時間の勵行を迫られるのが、堪らなく可厭であつた。束縛と服従とは、全體私の堪へられぬ苦みである。これがあつては快樂そのものも、嫌悪と變ずる。回教國では、一人の男が早朝に街中を歩いて、家々の主人に、妻のための義務を怠るなと拘れて廻るさうだが、私もその時分には、一人の悪性な土耳其人であつたのであらう。

平民の中にも生徒があつた。その中の一人は、私の關係を變化する間接の原因

になつた。どうせ何も彼もうちあけて話をするのだから、そのことも後に話す。其の女は乾物屋の娘で、ラル Land 嬢と言つた。これこそ、正眞の希臘型模と言つてよい女で、若し、生命もなく、靈もなしに眞の美といふものが成り立ち得るならば、私はこの女を、自分が見たうちの最上の美人として眺めたいと思ふ。彼女の冷淡で、無感覺なことと言つたら、想像に餘る。喜ばせることも、怒らせることも、孰方も出来ぬ。て私は考へた。誰かに誘惑された時には、本心からでなく、唯無神經ゆゑに靡いて了ふのではないかと。彼女の母は此の點で萬一の危険を心配して、一步も外へ出さなかつた。唄を習はせ、年若な先生を附けて置くといふことで、母は出来得るだけ娘に元氣を起させようとしたけれども、効がなかつた。先生は娘を持ち上げる母は先生を持ち上げる。が雙方とも更に利目はなかつた。母は持前の氣爽な上に娘に持たせたいやうな氣質をも兼ねてゐた。軀の小さいちよつと愛嬌のある、薄痘痕の出来た女であつた。小さい眼がぎら／＼と光つて、始終血走つてゐた。毎朝私が行くたびに、珈琲とクレムとが整然と用意されてゐる。そして極まつて私に接吻して、歓迎の意をあらはすのは有り難いが、同じ事なら、娘と

接吻して、その心意氣が見たかつた。亭主が家にゐるときでも、委細構はず、大びらに、齒の浮くほど私を可愛がつたり、接吻をしたり、平生と少しも異なることはなかつた。亭主は主人よして、いかにもこの娘の父といふことを思はせた。そして妻も亭主を騙すやうなことはなかつた。目を窺む必要がなかつたからである。

こんな可愛がられてゐながら、いつものぼんやりして、時時煩さい程、附け廻されても、唯友情を示すだけのものと見てゐた。店へは立ち寄り、時時煩さい程、附け廻され過ぎて了ふやうなこともあると、元氣な内儀は決して黙つてゐなかつた。急の用もある時には、仕方がないから道を換へて行つたこともある。這入るのは造作もなく這入られるけれど、出たくなくても容易に歸してはくれないからだ。

餘り内儀に慕はれてゐるので、少し癢くなつて來た。心を動かさずにゐられなくなつて來た。て、その事を、何の秘密も潜んでゐないものの積りて母に話した。縦し秘密があつたところで、母に匿して置く私ではない。いかな祕事といへども、彼女に對して裏んでおくといふことは、私には出來ぬ。彼女に對する私の心は、神に對する如くに打ち抜かれてゐたのである。と聞いた母は、私が考へてゐたや

1732(21)-1736(25)

1732(21)-1736(25)

うに、然う單純には解らなかつた。唯友情としか思つてゐなかつたのを、もつと進んだものであらうと彼女は信じた。私といふものが、思つたほどの莫迦でもないといふことを、内儀が見て、どうにかして自分を私に紹介しようと努めてゐるのであるまいか——斯う母は判断した。自分の養ひ子を、他の婦人の手に委すのは、怪しからぬことだといふやうに思つては、ない。私の年頃と境遇とは、最も畏に繁り易いから、そこを安全にさせたいといふ貴い心からであつた。

同じ頃に、これよりも尙危険な誘惑にかゝつた。それも私は脱れることが出來たけれども、斯ういふ危険が續くやうでは、出來る限り用心を深くせねばならぬといふことを、母に感じさせるやうになつた。

生徒の母に當るマントン伯爵夫人は、非常に才ばしつた、悪徳にも長けた人だと言はれてゐた。噂に聞くと、種々な騒動を起したこともあつて、アントルモン家のそれなどは、殊に酷いものであつたさうである。母はちよ／＼夫人と往來して、よくその性情を看抜いてゐた。夫人の傍惚してゐる一人の紳士を、母が何知らず最負にしたといふので、何も那樣にどうの斯うの言ふ程のことでもないものを、母

が寝取つたと言つて大さわぎして、それから以後幾度この競争者を苦めようとしたか知れぬ。けれども、一度も成功しなかつた。それについて一番滑稽な話を見本に話して見よう。

二人の夫人は、多勢の紳士達と一緒に田舎へ行つたことがある。其の中には關係人である情人も交つてゐた。マントン夫人は、或る時紳士の一人に、ワレンス夫人は、いやに容態ぶるばかりで、一向趣味もなく、身形も卑吝れてゐて、領巻をした恰好なぞは、まるで商賣人みたやうだなどと喋つた。言はれた男は、他を擔ぐのが好きな人であつたので、

その領巻には、日はくがあるんです。あの夫人の胸元には、嫌な、大きな鼠の刺青があつて、それが今にも駆け出しさうなのです。

斯う彼女に答へた。憎悪も戀と同様、人に輕信を起させる。マントン夫人はこの刺青を見露して話の種にしようとかゝつた。或る時母が、夫人の情人と骨牌を取つてゐると、夫人は、此處ぞとその背後へ廻つて、突然母の椅子を半分ほど顛覆した。その途端に、母の領巻を手提ぐ引き退けてみた。と、大鼠が出ると思ひの外、

るで違つた物が眼に映つた。それは見露すよりも、忘れる方が容易でないやうなものであつた。勿論夫人の氣に入るものでもなかつた。

とても私は、豪奢な社會に身を置くマントン夫人に顧みられるやうな人體ではなかつた。それにもかかはらず、ちよいと眼を著けられた。と言つても私の容姿に對してではない。彼女もそれは何とも思つてゐなかつた。唯私が器用だといふ狙ひを附けて、自分の好きな道に何かの便宜を得よう、とそんな目論見をしたものらしい。彼女に諷刺の才があつた。いけ好かない人々を捉へて、詩歌の材料とするのが好きであつた。若し彼女が、詩作を手傳はせるため、私の詩才を認めることが出来、私の方にもそれを助ける氣があつたら、私達二人でもつて忽ちの間にシンペレイ中を顛覆すほどのことを爲出来したかも知れない。然うなれば、此の諷刺詩の作者は誰だらうと言つて、他は皆その儘に抛棄つては置くまい。その時にマントン夫人は、自分は知らぬ顔で、私を悪者にして突き出すに違ひない。すれば貴女たちに對するアポロン Apollon に化けたといふ事で、生涯禁錮にでも遭つたであらう。

幸にも、その様な事件は起らなかつた。マントン夫人は、二三度晚餐の席へ招いて種々な話をしたが、私をば唯の愚物とより釋らなかつた。自分でも感づいて悲しくなつた。それにつけても友のダンテ、ウルの腕前が美しくてならなかつた。が好い鹽梅に陥穽へも這入らずに済んだのは、全くこの愚物扱ひにされた爲であつたと思へば、有りがたくなくもない。マントン夫人と私との關係は、娘の唱歌の先生といふだけで止まつた。がシアンベリイでは靜かな暮らしをして、人々からは大切にされた。マントン夫人と智慧くらべをして、人には蛇のやうに思はれながら日を送るよりは、此の方がどのくらゐ價ある生活であつたか知れぬ。

の快活さが混じてゐたのに、遂かに一種の眞面目な調子と入れ代つた。打ち解けたやうでもなく、嚴酷なのでもなく、何か説明がなくてはと思はせるやうなものであつた。自分でいろいろに考へて見たけれども、どうしても讀めなかつたから、何爲斯う様子が變つたのかと彼女に訊いた。彼女は訊ねられるのを待つてゐた處であつた。て、明日例の花園へ散歩しに行かうと言ひ出した。翌日は終日此處で唯二人きりてゐる積りて出掛けた。その時間は、私に利益になることを教へるために費やされた。それは常の婦人のやうに、戲弄したり巫山戯たりする事ではなく、口説くといふよりも訓へると言つた心持で、優しい情と、正しい理との籠つた話であつた。それには理智よりも感情が多く刺撃された。説話は結構な有益なものであり、暖かみと歡びを含んだものではあつたけれど、十分注意して聽いてゐなかつた。外の時のやうに深く肝に銘ずることもしなかつた。緒言だけを聽くと既う胸がどきつとした。何か言つてと思ふ間に、心は普然と裳脱けて了つて、言葉を聽かうとするよりも、此の先がどう成り行くかと、そればかりに氣が先走りをしてゐた。それが容易なことと推量も出来なかつた。けれど、漸とそれが解つ

1732(21)-1736(25)

て見ると、實に何とも言へぬ妙な考想を起したものだと思つて、夢中のやうになつて了つた。母と同居して以來、唯の一度でも然ういふことを心に思ひ浮べなかつた。今之を聴かされては、もう全くその事に心が吸ひ込まれて了つた。唯この女といふことばかり思ひつめて、言ふことには耳を貸さなかつた。

兒童の最も興味を惹くやうな事物の提示を最後まで延ばして置いて、まづ自分の話すことに注意を集注させようとすることは、平凡な教授者の陥り易い過失である。此の事は、エミールの中で言つた。兒童は、自分の前に置かれた新奇な事物にまづ目を驚かされて、そればかりを考へ詰めて了ふから、先生の豫備の長くて焦慮さに徐徐に説きすゝめて行く過程を一足飛びに飛び超して、ちやんと先線をしてしまつてゐる。であるから、兒童の注意を集めるには、教授者の眞の目的をちらとも見せてはいけない。此の點から言つて、母の説話の爲方は、誤つてゐたと言へよう。彼女の考が餘り大業なので、ついちよつと話してよい事に、取越苦勞をしすぎたのである。然し、其の性體が知れてみると、向うのいふ事は碌に聴きもしないで、何が無し悉皆同意して了つた。そのみならず、私は斯うも思ふ。此の場合

1732(21)-1736(25)

としては、甚麼男でも、此の申し出に對して二の足を踏む程の勇氣は出まい。また甚麼女でも、男子が躊躇するのを黙つて見てゐる譯には行くまいと思ふ。申し出の爲方が妙であつたと同じ様に、その迹の手續も餘程風が違つてゐる。母は自分の申し出を納得させる爲に、一週間熟考へてみるがよからうと言ふ。それには及びませぬと返辭はしたが、それは表面であつた。内實は、餘りと言へば新らし過ぎる考想が胸の内て湧き返る程の騒ぎを惹き起したから、それを鎮めるには、奈何しても時間が要つた。

この一週間は、私には幾世紀の長さにも感じられたであらうと、他は思ふかも知れぬが、實際は正反對で、却つて幾世紀も續いてくれればよいに、と思つたほどであつた。その間の心の状態は、どう書いてよいか分らぬ。恐怖と不安とが互ひに入亂れて、空おそろしい邪慾に打ち震へた。終には、幸福でなくなつてもよいから、奈何なりとして、程よく此處を切り抜きたい、と然ういふことを心から考へ出すやうになつた。

熱烈な、そして放縱な氣分、燃え騰る若き血潮、戀に眩暈する胸の内、旺盛な青春の

1732(21)-1736(25)

體力、それらを思ひ浮べて貰ひたい。女に飢ゑた境遇にゐて、誰にも未だ接近しなかつたことを考へて貰ひたい。早く一人前の男になりたい、他にも一人前の男と思はれたい、——然ういふ希望や名譽心が結び附いて、且暮に氣を急立たせて居たことも思つて見て貰ひたい。殊に斯ういふことも一層深く考へて貰はねばならぬ。彼女に對する熱烈な愛情は、一度も冷めかゝることなしに、日に／＼慕るばかりであつたこと。その傍を離れては、決して幸福であり得なかつたこと。離れることがあれば、それは彼女を思ひ詰めてゐる時であつたこと。彼女の慈恩や人物ばかりでなく、女であるといふことも、姿態の美しいといふことも、——凡そ自分に取つて親愛なあらゆる箇條は、すべて私の胸に満ち／＼してゐたのだといふことも一緒に考へて貰はねばならぬ。但し、十二も年嵩な女では老け過ぎてゐて面白くなかつたらう、などとは思つて欲しくない。初めて彼女に會つて、言ひ知らぬ恍惚を覺えてから、もう五六年にもなるが、些とも様子が變つたところはな。況して私には奈何して然う思はれよう。始終私に魅力を持つてゐた。世間の人に對しても同様であつた。幾らか身體が肥つたやうな氣はするけれど、その眼差し、

1732(21)-1736(25)

色澤、胸元の肉付き、恰好美しい金髪、快關な氣分、聲音に至るまでも悉皆昔の儘でなものはなかつた。殊に那の若々しい、銀鈴のやうな聲音は何時の世までも耳の底に鳴つてゐるやうに思へて、今でも奈何かして、美しい少女の聲などを聴くと、身の顫へが停め兼ねる位だ。

て、斯う言つた親愛な女を、いよ／＼自分の自由にするといふ日になると、容易ならぬ心配が起るのは當然だと思ふ。何爲と言つて女を自由にすれば、すぐあら底まで見抜けて了ふといふこと。欲望や妄想を制へて、我が本心を失はずにゐることが出来まいといふこと。是があるからだ。ずつと後になつてからだが、戀しい女が、少しばかり自分に氣を許したと思ふやうな事があると、すぐに血がはげしく滾えて、その女と自分との間の距離を無難に残して置くことが出来ない場合などもあつた。幾ら私がとぼけてゐたからとて、青春期の第一歩を踏み入れるのに、何爲／＼してゐただらう。快樂より苦痛の多いことが奈何して解つただらう。芳烈な甘味に酔はされる代りに、厭惡と恐怖とばかりを感ずることが、どうして出来たであらう。程よく此の幸福が避けられたら、心からそれを放棄したと

は疑ふまでもない。彼女に對する戀愛史の中には、餘程風變りな事がいくつもあると預言して置いたが、是などは殊に豫想以上の例だ。

面白くもない讀者は、彼女にはアネエといふ別の男が出来たから、もう私の眼には餘りありがたくななくなつて、以前ほど尊敬してゐなかつたのであらうと、然う推察するかも知れぬが、それは過つてゐる。いかにも彼女が心を貳つにするといふことは堪へられぬ程の苦痛であつた。心を分けるといふことは、彼女にも私にも面白くないことと思はれると同時に、自然のデリケートな感情からも然う苦痛を感じたのであつた。然し、彼女に對する私の情には何の變動もなかつた。そればかりでない。彼女をわが物にしようと思はない時が、一番強く彼女を愛してゐる時であつた、といふことが誓へる。私は十分彼女の清貞な心、氷冷な氣質を知り抜いてゐた。一身を私に獻げたといふ中に、少しでも官能の慾念が交つてゐたとは邪推にも思はれない。唯私に他の誘惑に牽かされぬやう、本心を失はせぬやうにさせようといふ心配から自分が犠牲にならうといふ心であつた。その愛は、普通の女の所謂愛とは全く別物の積りてゐたことは、後段で解る。私は彼女のため

1732(21)-1736(25)

に又自分のために歎いた。私は斯う言ひたかつた。「どうしてお母さん、それは御無用です。然うしていただかなくとも、決して御思召に背くやうなことはしませんと。けれども、それを言ひ得なかつた。這麼ことは元來口に出すべき事でない。その上それが實際でないことも知つてゐた。他の女の誘惑から安全に身を保つには、尙且一人の女の力に依る外はなかつたからである。母に對する心を奪はうとする總べての物を、禍として見てゐたやうに、彼女を自由にしたいといふ氣もなしに、他の女に對する慾念の防禦になつて貰ひたかつた。

長年彼女と無邪氣に同居して來たが、その爲に私の愛情が薄くなるやうなことがなかつたのみか、却つて濃く、鋭く、深くなる一方であつた。そして段々官能の慾から遠ざかつて行つた。彼女を母と呼び習はし、實の子同様の心安さをもつて互ひに接した結果は、實際の子であり、實際の母であるかのやうに思つて了ふやうになつた。てどんなに戀しく思つても自分の持物にしようなどは、夢にも思はなかつた。

憶ひ起せば初めて彼女を見た時の情は、今から見ると餘程縦なものであつた。

1732(21)-1736(25)

唯餘り激しくなかつただけである。アヌシイ時代には、全く酩酊の状態に在つた。シアンペリイへ来てから始めて我に還つた、何時とて彼女を愛するに、心を傾倒せぬといふことはなかつたけれど、自分の爲にとよりは、寧ろ彼女の爲に愛する場合が多かつた。少くも自分の快樂よりも、幸福を多く求めようとした。彼女は私に對しては、姉以上のもの、母以上のもの、友以上のもの、否、情婦以上のものであつたからである。此の原因から彼女は、本當の情婦にはなれなかつたのである。詰り私の愛し方は、斯ういふ風であつたから、彼女に向つて貪婪な眼を輝かす暇はなかつた。私の理智は霽れてゐた。

希望よりも恐怖をもつて待つた其の日がとうとう来た。私は幸福であつたらうか？ 決して然うてない。打消し難き悲痛に幸福は散々な破損を受けた。て私は二三度彼女に縋り附いて、其の胸に涙の洪水を漲らした。彼女は悲し氣でもなく、元氣さうでもなかつた。唯可憐に唯靜穩であつた。官能的な女でなく、欲情その物の満足を求めたのでもなかつたから、それを快樂とも思はねば、悔恨も更に感じなかつた。

繰り返していふが、彼女の失行は過ちから生ずるのであつて、決して欲情から來るのではなかつた。彼女の素性は上品で、心は潔白で、嗜好は眞直で、性向は眞率で、趣味は精緻であつた。その一身は宛ら純美の權化とも思はれた。それを常に愛せぬではなかつたけれど、それで貫かうといふ氣はなかつた。その譯は、正しい感情の命に従はないで、謬つた理性の命に服したからである。一度間違つた主義に誘はれてからは、いつも自然な感情と乾反つた方へ向いて行つた。不幸にして彼女は哲學に腐蝕されてゐた。それゆゑ此の哲學から割り出された倫理觀は、彼女の良心と相容れぬものとなつた。

最初の戀人であつたタヴルといふ人は、彼女の哲學の先生であつたが、彼女に教へた哲學上の主義は、畢竟彼女を誘惑しようとするやうなものであつた。始終彼女が夫と義務とに身を獻げて、いつも冷かに、理智を活かせて、到底感情に動かされさうもないことを見て取つた彼は、盛んに詭辯を揮つて、義務などといふものは、恰も教義問答を喋喋するやうなもので、單に子供だましに過ぎないなどといふ事を頻りに鼓吹んだ、夫妻の關係なども、それ自身には何の意味もないものだといふ

1732(21)-1736(25)

た。夫妻間の信頼は、しよう事なしの見せかけだ。倫理學者の寢言だと説いた。妻は唯夫の機嫌を損じなければそれでよいだから他に知れない不貞なら、少しも害にはならず、良心にも咎められることはないと言った。畢竟罪惡は其自身には、何でもないもので、唯喧しく言ひ觸らすから仰山らしく聞えるのである。節操が有るらしく見せかけて居れば、それで節操に成るのだと説いた。斯ういふ風の解釋は、夫人の眞の感情までを破壊することは出来なかつたけれど、理性だけはたしかに腐蝕させて了つた。ところが彼は其の罰に、夫を待遇すやうにと教へた通りの待遇を、自分が反つて受けるやうになりはせぬかとの懸念に、激しく惱まされた。此の點で彼が認つてゐたか、奈何かは知らぬが、宣教師のペレエ Parrot といふ人が彼の後釜になつた。

夫人の冷かな氣質はこの説に迷はされる憂もあるまいと思はれたに、却つてそれを棄てかねるやうになつたのは事實である。自分が何氣なく思つてゐる事も、存外重大な意味のあるものだといふやうなことは、彼女には理解出来なかつた。節操といふことなども、彼女には一向價値のない事であつたから、一個の徳として

1732(21)-1736(25)

尊ぶことを知らなかつたのである。

それゆゑ自分のためには、此の妄説に左右されることはなかつたが、他人の爲といふ時には、随分動かされた。これは彼女に慈惠深い心があつた處へ、やはり一種の愚な哲學思想が加はつたからであつた。男を牽きつけるには、女の方から身を投げ出すに限るといふ考を持つてゐた。て彼女は自分の男友には、單に友情だけで交際つたが、彼等を強く牽きつけるためには、自分の力に能ふかぎりあらゆる方便を用ひた。それ程深強な友情であつた。これで大抵が思ふ通りに行つたのは驚くべきことである。彼女との交りが親密になればなる程、其處にまた更に別な愛情を呼び起さぬ譯に行かない。實に可憐な婦人であつた。尙だ他に著しい一つの事實は最初の失敗に懲りてからは、唯もう不幸な者ばかりを可愛がつたことである。多幸な社會の人達は、彼女の愛を求めようと苦勞しても、皆無効に終はつた。然し、初めに彼女の同情を得てゐながら、後になつてその愛を失つたやうな人は、その人自身に美點がなかつたからに違ひない。縦し、價値なき者を近づけることはあつても、それは劣等な動機からではなくて、——彼女の尊い心には、然ういふ

考が起る筈もないから、彼女の性格が然うさせたのである。彼女は十分な辨別もせず、いつも、餘り寛容な、餘り慈惠なる、餘り同情に富んだ、餘り敏感な性格を持つてゐたからである。

幾らかの謬つた理智のために横道へ誘はれることがあつても、別に彼女には誤りならぬ微妙な理智が多く備はつてゐた。理性の伴はぬ過失を弱行と言へるなら、それは彼女にあつた。けれども他の多くの徳で、十分償ふことは出来た。例の情人は、或る點で、彼女を傷つけたにしても、他の多くの點で、少からぬ教訓を與へた。彼女の情緒は、固より荒れず、居ないから、良心の命には常に服した。詭辯に誤られない時の行爲は、實に立派なものであつた。過失を爲出来しても、動機には賞すべきものがあつた。欺かれて悪を行ふことはあつても、悪と知つてしたことは何もなかつた。彼女は二重の心と虚偽を忌み嫌つた。眞摯、平正、虚心、慈仁、無邪、それがあつた。自分の言葉、自分の友、自分の義務に對しては常に誠實であつた。復讐、怨恨などは、彼女には出来ぬことであつた。寛恕といふことさへ、別に手柄とも思つてゐなかつた。最後に、彼女として、一番不心得であつたことは、他人に施す

1732(21)-1736(25)

1732(21)-1736(25)

慈惠の、如何に高價なものであるかと言ふことをも考へないで、手當り次第に撒き散らし、幾程自分は窮しても、その報酬を他から受け取らうといふ商賣氣が、微塵もなかつたことである。て、私は尙進んで斯う言ひたい。若し、ソオクラテエス、*Aspasia* がアスバシア *Aspasia* を尊敬したと言ふなら、ソレンス夫人をも、尊敬したに違ひあるまいと譯者云。アスバシアは、ペリクレエス *Pericles* の情婦。艷容と才藝とで、當時雅典實際のヒロインとなつてゐた。ソオクラテエスや、その外の文人學者等、彼女の家に出はひりをせぬものは、殆どなかつたといふ。

感情が鋭敏で、氣質が冷淡な人だと言へば、それは矛盾だ、といふ人があるかも知れぬ。これは造化の悪戯であつた。然ういふことは有り得ぬ事實かも知れぬ。が、彼女は正しくそれであつた。今生きてゐて、ソレンス夫人を知つてゐる人達は、誰でも彼女の人物を實際然うだつたと認めない者はない。彼女の現世に於ける唯一の樂みは、わが愛する人たちのために心を碎く、といふことであつたことも附け加へたい。若し今まで言つたことが間違つてゐると思へば、誰でも好きなやうに反證を擧げることには勝手だ。私としては、唯有體を言へばそれでよい。無理に

第五卷
事實を信ぜさせるのが目的でない。

1732(21)-1736(25)

今話したやうな事は、二人が打ち解けてから後の談話で段段解つて来た。それが爲に交情はますます親しくなつた。私になさけを掛ければ、とりも直さず私に利益があらうと思つたのは道理であつた。私はそれから莫大な教訓を見出した。今迄は、子供と思はれるたので、談話は何時も私の身に就いたことばかりであつた。けれども今からは大人待遇にされて談話にも彼女自身のことが多く出るやうになつた。で、何事を言つても、自分に取つては興味のあることであり、ひどく胸を打たれるやうに思つた。それから深く反省して、課業に教はる事よりも、此の眞味な談話をよく酌み分けて、修養の資料にすることを努めた。相手の談話がその心の底から出て来ることを感ずる場合には、吾々の方でもまた相手の告白を受け入れようとして、自然と胸が展がるものである。殊に道學者等がいくら口を酸ばくして講義を列べたところで、到底吾々の愛する婦人が、切なる情を籠めた物語の一

片にも値るものではない。

1732(21)-1736(25)

親密な生活をしてゐる間に、私を鑑別することが以前よりも餘計都合がよくなつた。私の風采が舉らないにも構はず、勉強して世間の風を見習ふやうにすれば、一朝位置を得た時に、速く立身が出来たらうと考へた。此の考から、私の心の眼を開けるやうに骨を折つた。それに外貌から舉動などにも氣を留めて、氣品と愛嬌のあるものに仕立てようとした。若し世間の成功といふものが、道徳を俟つて始めて完成するものであるといふなら、——私は然うは信ぜぬけれど——彼女の計畫と教訓ほど、それに適當したものはあるまいと思ふ。何となれば、フランス夫人は人間を知つてゐた。特に人間との交渉が得意で、虚偽輕率に流れもせず、又人を欺き、感情を傷ふやうな事もなかつたからである。然し、此の手段は教訓としてよりも、その天稟にあつた。他に口授するよりも、自分で實地に模範を示す方が得意らしかつた。そして私はまた、斯ういふ技術を學ぶには、此の上もない不適當な人間であつた。それゆゑ、此の目的に用ひられた有らゆる方便は、いづれも殆ど無駄骨折となつて了つた。それは丁度、舞踏と擊劍とを私に仕込まうとしたのと、同じ

不結果に終つた。

素より輕捷であり、身軀の恰好もよかつたけれど、ミスエットオ一つも踊れなかつた。それは足に肉刺が出来て、始終踵で歩くといふ始末で、先生のロオシツラ治すことが出来なかつたからである。見掛けは丈夫さうな脚を持つてゐながら、輕捷に溝を飛び越すことさへ出来かねた。それが擊劍の道場では尙困つた。三月も稽古してゐるのに、唯教師に相手をして貰ふほか、他と仕合をするといふ段までにはなかなか行かなかつた。そして握が柔く出来ないと、腕に力を入れることが出来ないの、何時も教師に自分の持つてゐる劍を拂ひ落された。附け加へて置くが、擊劍ばかりは死んでも嫌ひだ。稽古に疲れる迄教師は教へてくれたが、その教師も大嫌ひであつた。人を殺す稽古が、幾ら上手になつたからと言つて、那樣に自慢も出来ないではないか、といふのが私の意見であつた。教師はまた、自分がどれくらゐの天才者であるかを見せようと思つて、知りもしない音樂上の用語など

を引つ張つて来て、無暗と擊劍の方へ附會けては説明の資にした。音程の第三度だの、第四度といふ語と、擊劍の眞向の構衝を避す構といふ語とは同じものだと言つて、大發見でもした氣であつた。陽撃を試らうとする時には、すぐさあ此の變化記號に用心しろといふ。これは以前 diese のことを *jeinte* と言ひならはしたから。また私の手から劍を打ち落して置いてにやりと笑つて、それが全休止だなどと言つたりする。とにかく此の哀むべき擊劍道具を着けた男ほど、鼻摘みな術學者は、生涯に見たことがない。

那樣譯で、擊劍も根つから進まなかつた。つくづく可厭になつて、すぐに放棄つて了つた。然し自分に取つてもつと大切な爲事が一つあるから、その方へ氣を入れた。それは外でもない。今の自分の境遇に安住すること、それであつた。現存よりも優れた位置は、到底自分の柄にないのだといふことを考へ出した。その方の希望は罷めにして了つた。母の生涯を幸福にして進げよう、といふ希望のみに身を獻げた私は、彼女の傍にさへ附いてゐれば、言ひ分はなかつたのである。て、市中をかけずり廻つて、生徒たちを教へに行くのは、如何に音樂が好物の私にしても、

餘り有り難くないやうになつて來た。

1732(21)-1736(25)

私はクロオド・アネエが果して夫人と自分との交情の親密さを氣取つたかどうかは知らぬ。けれども全く知らぬのでもなからうと思はぬでもない。若いに似合はぬ何事にも洞見の利く方だが、然し餘程謹慎深い男で、自分の考を偽つて話すといふこともせぬ代りに、大抵の場合には、それを打ち明けることもしなかつた。二人の仲を氣取つたらしい様子は些とも見せぬやうにはしてゐながら、素振から推して見ると萬更知らないのでもないらしい處があつた。それは此の男の邪推からではない。主婦の平生の意見を知り抜いてゐた彼は、その意見の當然の結果から斯うなつたのであるといふことを否定することが出来なかつたのである。年齢は主婦と同じ位だが、眞面目な老成な男で、私達を子供のやうに思つてゐた。だから何事も大目に見たのだ。そして私達も十分な尊敬を拂てゐた。母がどれ程彼に心を傾けてゐたかといふことは、後に彼を疎略にし出す迄は、些とも知らず

1732(21)-1736(25)

にゐた。私の考へも、感じも、憧憬も、すべて彼女の上げばかりにあつたことは、彼女も熱く知つてゐた。で、自分がどのくらゐアネエを愛してゐるかといふ事を私に見せて、そして私にも同じ位アネエを愛させようとした。そして彼に親むとよりは、尊ぶといふ態度でゐた。然うした方が私にも眞似がしよいかからであつた。幾たび彼は私達の心を感動させ、涙ながらに私達を擁き合せ、彼女の生涯を幸福にするものは、全く二人の力であるといふことを繰り返したであらう！ 婦人讀者は此の條を讀んでも冷笑せぬやうに願ひたい。彼女の氣質として、これを決して二つの意味を持つた言葉とは言へない。單に眞心から出た要求の聲であつたのだ。斯くてわれ／＼三人の間には、地上の何處にも類ひない、一致の社會が出来上つた。三人の希望も、心遣ひも、まごゝろも、すべて共通のものとなつた。そして、此の小社會の範圍内だけに行はれた。かういふ團樂の生活を續けて、全く外界と懸け離れてゐた習慣が段々力強くなつて、食事の時などに三人の中一人が見えなかつたり、又は見知らぬ人が這入つたりすることがあると、何も彼も番狂はせになつた。母との結びつきに特別の關係はありながら、樂みの上からいふと三人一緒に居る

方がよかつた。三人互ひに心からの信頼を交換してゐるから、束縛といふやうな観念は跡方もなくなつた。始終忙しなく精々と働いてゐるから、倦怠を感じる暇もなかつた。母は絶えず何事か計畫に耽つて、沈著く隙がないので、私達にも無聊てゐさせなかつた。然し自分でしたいと思ふことは、十分に出来た。

思ふに無事閑散といふことは、獨居の寂しい時でも好ましくないことだが、社會に在つては一層有害な疫病である。人が始終對向て一室に閉ぢ籠もつてゐるほど見界を狭くし、無用の事に花を咲かせるものはない。中傷、離間、虚言などは此處で培養される。斯ういふ時には、唯のべつに喋るだけが爲事になつて了ふ。何か爲事をしてゐれば、話す必要のある時でなければ話さないけれど、何も爲ることがないと、唯もう掛かつて話に逆上せあがる外はない。取返しのかぬ災難を招くのも、皆これが因である。もし進んで言へば、人間社會を平和にするには、一人一人が何か爲事——多少ともに注意の要る——爲事に取りかゝつてゐればよいといふことになる。例へば編物、これなどは、何もしてゐると同じ事である。編物をしてゐる婦人の話相手にならうと思へば、向うは腕拱をしてゐるも同然だ

と思つて懸らねばならぬ。けれども刺繡となると、少し事が違ふ。此の方は可なり忙がしいから、黙つて仕事に取りかからねばならぬ。さて彼の無爲の徒輩が、その談話の間に何をすると見てゐると、起つたり坐つたり、往つたり來たり、踵でぐるぐる廻つて見たり、煖爐の置物を何遍となし弄くつて見たり、談話の源を涸らすまいとして頭を切り、疲らせて、見てゐても反吐の出さうな笑ふにも笑はれぬやうな、種種雑多な所作を演ずるのである。何と見上げた爲事ではないか！ 這麼徒輩は何處へ行つても人困らせはいふ迄もなく、自分自身も大抵な暇潰してない。私がモチエエに居た頃、近所の人の處へ線帶を編みに行つたことがあつた。若し私が再び世間へ出るやうな時があつたら、衣兜の中にビルボケエ bilboquet (玩具)を入れて置いて、何も議論するやうな問題もないのに、喋り仲間へ引つ込まれぬやうに終日これを弄つて遊んでゐたいと思ふ。誰も彼も私の真似をするやうになつたら、社會の弊風は矯正され、人間の交際は一層純潔に、一層愉快になるべきことと信じて疑はぬ。諧謔す人は勝手に諧謔すがよいが、現時の急に應ずべき唯一の道徳は、このビルボケエ道徳であらうと思ふ。

1732(21)-1736(25)

私達だけの時なら倦怠を知らないから、それを紛らせる必要もないが、頼み客が續いて来ると、その必要が大いにあつて、あとまでも續いた。以前に彼等から受けた焦燥しさは減じなかつた。違ふ點はその感を起させる時間が少くなつたことである。哀むべき母は、以前と變らず、何か知らず事業の計畫を立ててゐた。家計が逼迫して来れば来るほど、ますます妄想を逞しくして心痛を紛らさうとした。現在の収入が減れば減るほど、未來になつて収入の増すことを夢みた。年が経つに従つて、この痴愚しさはたゞ増長するばかりであつた。世の中の面白味や、青春の歡樂が稀になつて来たゞけ、それを填めるために人知れぬ快樂若しくは、未來の悅樂といふものを考へた。家の中には野師とか、製造人とか、煉金家だとかなどの居ない例しかなかつた。そして皆寄つて集つて、さまざまの目論見を立つなり、多寡が一エキウウ二圓欲しさに金が降るやうな旨い事を列べて行つた。誰も此家を出る時に手ぶらで行つた者はない。それである、這様に長い間財源に窮すること

1732(21)-1736(25)

なく、債權者等を弱らせることもなしに、よくこの莫大な濫費に堪へられたものと驚く外はなかつた。

この頃の計畫で、無理のない事業と思はれたのは、此のシンペリイに歴とした専門家を附けた王室植物園を設置しようといふことであつた。誰のために此の位置を作らうとしたのであるかは、言はずと知れてゐる。亞爾伯の山間なるシンペリイの市街は、植物研究には恰好の位置に在つた。いつも一つの計畫があると、又別のものゝ輪を懸ける癖の母は、藥學校を其處へ附設しようとした。此地方は随分な片田舎で、醫者といへば藥劑師の外にないやうな處だから、此の計畫が當れば面白かつたのだ。ザイトトリオ王が雇はれたので、侍醫長のグロッシイ(Grossi)が、シンペリイへ退隱することになつた。それが此の計畫の因になつたのかも知れぬ。とにかく母はグロッシイに取り入らうとした。彼は私の知つてゐる中でも、一番奇辛い、そして一番野卑な紳士であつたゞけなかく、喰へぬ人間であつた。その一斑は、次の例話を讀めば解る。

或る日醫師會が開かれた。その中に本當の醫者で、アヌシイから來たのがあつ

1732(21)-1736(25)

た。此の青年醫師は、未だ修業の足りない處があつて、侍醫長の意見に反對ばかりしてゐた。侍醫長はそれに對する答辯としては何も言はないで、唯何時郷里に歸る積りかとか、どの街道を通るかとか、甚麽車に乗るかとか、いふやうなことを訊いた。青年は一通り答をして、さて何か別に御用でもあるならと問うて見た。するとグロッシイの返事は、

「いや、別に何も用はないが、君の通つて行く道筋で、何か家の窓でも借りて見物したいと思ふのだが……馬に乗つた驢馬がてくてくやつて行くところをさ。」

と斯うであつた。金持の癖に、吝嗇な無神経な人間であつた。或る時友人が、抵當で金が借りたいと言つて來た。彼は友の手を握つて、齒をぎりぎり噛み合しなから、

「おい君僕はね、聖彼得が天降つて來て、三神を擔保に預けるから、十ピストオル」
 〇〇約計四十圓借せと言つたからつて、まあ斷り申し上げたいと思つてるのだよ」と答へた。又或る日、サウアの知事で、非常に神信心なピイコン Picon 伯爵邸の晩餐會に請待されて行くと、時間が少し早かつたので、知事公は今しも勤行最中で

1732(21)-1736(25)

彼にも仲間へ這入り給へと勧めた。頓に答の言葉も見出せなかつたから、しぶしぶ顔面をしながら、ともかくも跪いた。がたつた二度ばかり、アヴェマリアを唱へたと思ふともう堪へ切れなくなつて、突然身を起して、物も言はずにステッキを把つて駆け出した。ピイコン伯は背後へ追ひ縊つて、

「グロッシイさん！ グロッシイさん！ 一寸お待ちなさい。折角差し上げようと思つて旨い鷓鴣が料つてあるのですから。」
 と叫ぶと、

「閣下。」と呼びかへして首を振り向けて、天使の焼肉でも眞平御免を蒙りたいです。」

とさう答へた。

これが侍醫長グロッシイといふ人の一斑であるが、此の人を母は好く待遇して、到頭手馴付けて了つた。非常に繁忙の身であつたけれど、よく母の家へ訪ねて來た。アネエとは別して懇意になつた。アネエを智者と見て、ちよつと噂するにも、餘程尊敬の風を見せた。這處獸みたやうな人間にしては思ひも寄らぬ過去の印象を

1732(21)-1736(25)

打ち消す積りか無暗と彼を大切にかけた。といふのは、アネエは、今こそもう下男といふ位置でもないが、以前が然うであつたところから、此の醫長が尊敬して見せない、誰も然うする者があるまいから、それで彼を大切に懸けたのは、丁度此方て望んでゐたことであつた。アネエは、黒の表衣を着て假髪は綺麗に櫛目を入れ眞面目な作法に慥つた容態を見せた。動作は機敏で注意深く、植物や藥物のことも精しく、校長にも最負されてゐるから、若し彼の植物園が設置されるやうになれば、教師には申し分のない適任者と思はれてゐた。グロッシイも此の計畫に賛成した。平和が克復して必要な事業を起したり、経費が支出出来るやうな時機を俟つて、此の事を政府へ出願することになつた。

いよいよ此の計畫が實施されることになれば、多分私も植物の研究に身を委ねて、自分の本領に落ち着けた筈だつたのに、又しても不慮の打壊しに遇つて、これも流れた。どう考へて見ても、私は悲惨な犠牲になるべき人間であつた。言はば、運命の手は、奈何しても斯ういふ非常な試練に遭はせずには置けなかつたのであらう。

1732(21)-1736(25)

或る時アネエはジニビイ Gaiipi と云ふ植物を探りに登山した。此の植物は、亞爾伯の山中でなければ見つからない珍しい物で、グロッシイが切りに欲しがつたのであつた。ところが、此の哀むべき青年は、これが因で大熱に冒つた末に、劇しい肋膜炎にまでなつて、此の病氣の特効薬と言はれるそのジニビイさへ、一向効験がなかつた。名醫のグロッシイが有らむ限りの手を盡したことも、夫人と私が力の及ぶだけ看護に心を傷めたことも、ことごとく無駄になつた。腕きに腕いた揚句、とうとう私達に抱かれたまゝして、五日目といふ日に死んだ。最後の苦痛の間に、此の男を元氣附けたのは私であつた。随分と心を籠めて、限りなき憂愁の情を見せたのだから、若し私を理解する事が出来たら、必と慰めになつたに違ひない。斯の様に、して私は、生涯で最も約束堅き一人の友を亡つた。尊ぶべく、得がたい人であつた。此の人には教育がなかつた代りに、自然があつた。下賤な境涯にゐながら、偉人に必要な素質は、窈かに培養してゐた。或はいつかそれを世の中に發揮する折もあつたらうに、とう／＼永久に葬り去られた。

明くる日此のなまなましい可傷ましい新愁を、母とて物語してゐると、ふと卑し

い陋劣しい心が私に起つた。アネエの遺物殊に立派な表衣が、自分の有に成つたといふことを思つた。然ら母にも喋つた。彼女に對しては考へてゐるのも口へ出して言ふのも同じ事であつたからで。さつぱりとして鷹揚なのは、故人の長所であつたのに、今この私の陋劣しい言葉を聞かされた彼女には、これほど酷く愁のうへに、新たな傷手を増したものはなかつた。哀れなる女は何の返辭もせずにあらぬ方へ首を向けて、潸然と泣いた。ああ可惜しく貴き涙！ その手應へは確かにあつた。じり／＼と私の胸の奥底に沁み入つた。そして胸の隅隅を洗ひ清めた。陋劣しい下卑た欲心は跡もなくなつた。そんな根性は、此の以後再びとは私に歸つて來ないやうになつた。

今度の損失で、母は憂愁と共に依怙地を持つやうになつた。是から後といふものは、彼女の爲事が段々と荒む一方であつた。アネエは、几帳面な男で家中のことは何でもきちんと整頓を附けた。餘り綿密すぎて嫌はれるほどであつた代りに

何事も亂雑に流れるやうなこともなかつた。母さへもアネエに悪口を言はれるのを氣遣つて、無駄費などを注意した。母は此の男に惚れられてゐながら、未だその上に尊敬をも失ふまいと思つて、アネエに小言を喰ふことを一番恐れた。貴女は自分の物でも他の物でも見界なしに、手當り放題濫費すから困りますなどと、時開き直つて理窟をいふことがあつた。母の所業に就いては私も同じやうに忠告したこともあつた。けれども、私にはアネエほどの權威がない。で私の言ふことは、それほど印象を與へることは出来なかつた。もう其のアネエも居なくなつたのだから、可厭でも私が代つて後任をやつて行かねばならぬのだが、逆もそれは私の柄でなし、自分でも好んでする氣になれなかつた。引き受けはしても不行届き千萬だつた。私は疎懶の上に、女らしい性分であつた。自分に責むべきことがあつても、行く處まで行かせて見るといふ風であつた。アネエと同じ程に信用されてゐても、權威はそれと對しなかつた。家の亂脈を眺めては、胸を躍らして悲んだけれど、それを奈何しようといふ分別も出なかつた。つまり理非を正して詰開きをするには、餘りに若く、餘りに燥いてゐたのである。で、いざ諫め立をしよう

とすると、母は可憐しさに私の頬を撫でて、プッチイメントオル Mentor と呼んで、那樣事で復たもとの嬰兒にして丁つた譯者云。メントオルは希臘イタカ Ithaka 王オデッセウス Odysseus の子なるテレマホス Telemachos の師傅。プッチイメントオルは小先生の義。

心痛に堪へないのは家計の亂賑であつた。この儘では、早晚母も落目に遭はねばならぬ時が来るであらう。さう思つて、私もとにかく家の執事である以上、知らぬ顔は出来ない。段段精算して見ると、収入と支出が、恐ろしく權衡を失つてゐることに氣附いた。此の頃からずつと私に多少貪慾の傾向が附いたのは、この爲であつたかと思ふ。一時の出来心でなければ、滅多に莫迦な無駄費をしなかつた。又、金が有らうと無からうと些とも苦にはならなかつた。けれども斯うなると、氣になり出して、財布が大切といふことを知つて來た。立派な動機から、卑吝者になつて了つた。正直の處、私は唯母が後になつて悲惨な世話場を演じ出しはせぬかとの心配から、それを掻ふ工夫に餘念がなかつた。債權者等が、年金を捲き上げはすまいか。その金が停止になりはすまいか。若し然らなつた時には自分の貯め

た端錢でも、大きな役に立つのでなからうか。狭い私の量見て、然らぬことを想つて見た。然らして若干でも貯蓄するとすれば、隠れてする外はあるまい。何故なら母が如彼して企業熱に浮かされてゐるのに、自分だけ金を貯めてゐると思はれるのも、面白くない事だから。彼處此處と隠す場所を探して、若干といふ金を窶然蓄へて置いた。此奴をばつ／＼殖して行つて、可ささうな處で、母の足元へづしんと放り出して見せる胸算用であつた。ところが拙に隠したために、何時も見附かつてゐた。母も人が悪くて、見て見ぬ振りをするために、私の藏つて置いた金をもつと澤山な別の金と摺りかへて窶として置いた。餘り極りが悪くなつて、自分の小さい金庫を共同の大金庫へ合併して了つた。すると母は早速其の金を掘み出して、私の物だと言つては、銀作の劔だの時計だの、そんな持物や裝飾品に惜し氣もなく拂いて了つた。

逆ももう貯蓄などは出来る氣遣ひもなく、縦し出來たところで、何んの足し前にもなるものでないと諦めて、此の上は、萬一の備へに何か一定の職を求めて彼女に盡さうといふ氣になつた。不幸にも、此の計畫を好きな道の方へ持つて行つた。

1732(21)-1736(25)

例の音楽こそ、幸運を作り出すものと愚かにも信じて、其の傳手を探した。すぐ頭腦のなかには音楽のことばかりで充された。旨くこれが利用出来れば、自分はその名家になつて、近代的オルフェウス Orpheus の名を博し、其の樂調で秘露の金銀を譯無く吸寄せてみようと信じ込んだ譯者云。オルフェウスは希臘神話に、アポロンの子で、音楽の名手と立てられてゐる。其の妻エフリッヂイケ Eurydike が毒蛇に囓まれて死んだので、哀哭の餘、戀の神エロス Eros の允許を得て、幽界ハアデス Hades に降り、龜甲琴に託した切なる戀の唱歌に、幽王の心を動かして、再び愛人を伴つて歸る。又、秘露の國は、金銀、鳥糞などの豊饒なところから、その國名が佛蘭西では、大幸運の代名詞として用ひられる。既う一通り樂譜は讀めるから、此の上は、作曲だけ學べばよいことになつてゐる。

困難なのは、どうして此の方の良い教師を求めようかといふ一點である。尤も手元にはラモオの著書もあるが、これだけでは到底見込が立たぬ。そしてル・メエトルが居なくなつてからは、サヴァに一人として和聲學の片端すら知つてゐる者はなかつたのである。

1732(21)-1736(25)

私の生涯は尻の結べない事件で滿ちてゐる。此の無連絡のために、すぐ手の届きさうになつた計畫も、忽ち立ち消えになることは、稀しくなかつた。此處にも亦其の例がある。ヴンチ、ウルは、切りに自分の作曲の教師であつたブランシヤール Blanchard のことを吹聴したことがあつた。ブランシヤールは技術に練達した人で、その時分は、ブザンソン Besançon の大會堂で音楽教師をしてゐたが、今ではヴェルサイユの會堂で、同じ職を務めてゐる。て私はブザンソンへ行つて教を受けようと決心した。此の思ひ立ちに無理がないことを信じて、到頭母を捲き込んで了つた。そこで彼女は又しても旅行の準備といふので、また平生のどたんばたんを始めた。倒産を未然に防ぎ、濫費の償ひを將來に完くしようといふ量見に逐はれて、此の際まづ學資として八百フラン(約計三百二十圓)の金が入ると打ち出した。それは否運を挽回する本にしようとして、却つて彼女の窮乏を早めたやうなものであつた。痴けた話のやうだが、私の心は未來の幻影で罩まれて了つてゐた。彼女

の心も、尙且私のと異なることはなかつた。私は彼女の利益を考へて勉強するのだと信じ、彼女はまた私の利益のために勉強させてやるのだと信じて、二人とも其の餘の念慮はなかつた。

最初の積りては、ブランチアルは今も尙アヌシイに居るであらうから、此の男からブランチアル師に紹介して貰はうと思つたのであつた。ところが彼はもう其處には居なかつた。爲方がないから、彼が推舉したといふ徴證に、豫ねて貰つてあつた彼が自作の四部祈禱歌を持つて行くことにした。ジネエツを通るにつけては、其處で親族の誰彼に逢つて行つた。ニヨンではまた父に逢つた。いつもの調子で荷物が來たら、迹から送つてやらうなどと話した。これは私が騎馬旅行をしてゐるので、荷物はいつも迹に廻たからである。ブザンソンへ來た。ブランチアル師は歡んで迎へた。教へることは勿論、その外に何なりと用があれば助けてやらうと言つた。さて稽古を始めようといふ時に、父から手紙が届いたので、披いて見ると、荷物は、瑞西の國境のルッス Rousses に在る佛蘭西の税關で差押へられたといふことであつた。通知に驚いて、没收の原因を訊さうと、ブザンソンで相識になつた

人を頼んで問ひ合せてみた。行李の中には禁制品などの這入つてゐる氣遣ひはないのだから、どういふ嫌疑で那樣目に遇つたか、合點が行かなかつた。けれどもそれは解つた。あまり不思議な話であるから話さずには置けない。

ジャンベリイで一人の年老いた里昂人に知人があつた。名はデュヴィエ Duvier と言ふ人柄の良い人で、攝政時代には印璽まで預つてゐたが、職を失つてから彼の測量をしに來た。良い社會に人と爲つた人で、知識も技能も一通り具へた上に、氣質の温和な、丁寧な人であつた。音樂にも通じてゐた。そして私とは一緒の室にゐたから、周囲の没分曉漢どもよりも、互同士が殊に親密になつた。彼は巴里の方と聯絡があつて、其處から言ふにも足らぬ出來事や、影のやうな新聞種を受け取つてゐた。どれも、原因なしに流傳したり、知らぬ間に消えて了ふやうな下らぬ世間の噂ばかりであつた。時時晚餐などに、母の家へ連れて來た關係から、私の機嫌も取るやうになり、面白づくに、例の新聞種を話して聽かせた。が、いくら好きにならせようと骨を折つても、那樣事は天性嫌ひな私だから面白くも何ともなく、一度も手に取つて讀んで見たことはなかつた。生憎此の呪ふべき新聞が一枚

1732(21)-1736(25)

私の新しい服の中單の衣兜に這入つてゐた。税關吏に見つけられてはと思つてたつた二三度きり手も通さずに在つた服である。此の新聞には、ラシイヌ Racine の「ミトリダート Mithridate」の面白い一段を極平凡なジャンセニスト janseniste 流の戯詩に作り替へたのが出てゐた。その詩を十行ばかり読みかけた儘衣兜に押し込んで置いて、迂濶忘れてゐた。それが今度の没收の原因になつた。税關吏等は行李の中の物品名を目錄に作つた。その首めに事實を膨大した調書を書いて、此の原稿は、ジッネエグから密かに佛蘭西へ持ち込んで印刷に附して國中へ配布しようとした物であるなどと言つてある。神の敵、教會の敵に對して、宗教的漫罵を加へ、此の大隠謀を未發に摘發することを得たのは、偏へに敬虔な警戒の力に因るものであると自惚れてゐる譯者云。ジャンセニスムは、和蘭の人コルネリス・ヤンセー Cornelis Jansen の創めた加特力教の一派で、公教からは異端視されてゐる。恐らく彼等は、私の襯衣までが異教臭い香がすると思つたのであらう。其の證據には此の可怕的な新聞一枚の爲に、何も彼もが没收の憂き目に遭つて、以後再び哀むべき行李については何の消息も聞かなかつた。それを這箇から持ち出すと、種

1732(21)-1736(25)

な教令や訓示や、證明書や、覺え書などが要るといふので、奈何してよいか、見當が附かなくなつて、とうとう思ひ切つて眼を瞑つて了つた。その時の税關の調書を、何故保存して置かなかつたかと思つて後悔する。これを殘して置けば、引き続き出す文集の中の、殊に光彩ある一篇となることが出来たであらうに。

此の損害で、餘儀なくジャンペレイへ歸つて來なければならぬやうになつた。プランシアル師には、何の影も蒙らなかつた。計畫する事毎に不運の伴はぬことがないことを觀念して未來の事はどう考へても、自分の力に能はぬのである。そんなことに無用の心配をするより、ぢつと母の傍に膠著してゐて、彼女と運命を共にするに若くは莫いと諦めた。彼女は寶藏でも獲て歸つたかのやうに私を迎へて、復追追に衣物を拵へてくれた。私の不幸は、彼女にも私にも、大なる打撃ではあつたが出會したのが不意であつただけ、また忽ちに忘れて了つた。

此の災難で、音樂の方の野心は冷めたとは云へ、ラモオの研究だけは廢めなかつ

1732(21)-1736(25)

た。其の結果、書中の意味も明かになり、幾つか短い作曲の試もしてみても、其が成功したと思ふと、又勇氣が出て来た。アントルモン侯爵の令息ベルガルド Bellegarde 伯爵が、アウグスト August 王の崩後、ドレスデン Dresden から歸つて来た。長く巴里に住つた人で、音楽が此の上もなく好きであつた。ラモオが取り別け熱心であつた。その兄弟のナンジス Nancis 伯は、ヴィオロンが達者、姉妹のラッセル La Tour 伯爵夫人は聲樂が一寸得意であつた。斯ういふ人だちが集つたので、ジャンペリイは音楽の流行地となつて、公開の音楽會まで出来た。そして初めの間は、指揮者には私が可からうといふことになつた。けれども、指揮の任は私には重すぎるといふことが見露されて、外の人が引き受けることになつた。でも自作の小曲を續々會へ出した。或る歌謡曲で大へんに推稱されたのがあつた。これとても決して名作などいふべきものではないが、歌謡に清新の分子が盈ちて、音楽上の効果も少くなかつたから、私にしては意外な出来だといふ點から褒められたのである。紳士たちは、樂譜が本當に讀めない私が、人並に作曲が出来るといふ道理はないと訝つて、他人の作から竊んで來るのだらうなぞと思つた。その實否を確める氣で、或る

1732(21)-1736(25)

朝ナンジス伯爵が、クレランボオの歌謡曲を持つて訪ねて來て言ふには、此の曲を自分の音域に合さうと思つて、移調してみたら、原曲の低音が樂器に合はなくなつて了つたから、別の低音を附けて欲しい、とのことであつた。私は答へて、これは容易ならぬ勞力の要る爲事、とても今すぐにと言つた處で、出来つことはないと言つた。然う言つて通げる積りと睨んだ彼は、一層手強く迫つて來て、宣叙調一箇所の低音だけなりとも、是非附けて見してくれと無理に言ふ。爲方がないから、註文通りやつて見た。無論拙い。これは何事に限らず巧くしようと思へば、たゞ獨りの時に悠々と暇に飽かしてでなくては出来ない性分であるから。然し、拙いとは言ふ條とにかく規則には當嵌まつてゐたので、それを看てゐた彼も、私が作曲の原理を心得てゐることに就いては疑を挾まなくなつた。斯ういふ譯で、自分の弟子達は失すやうなことはなかつたが、苟も音楽會を開きながら、私といふものを重く用ひないといふ法はあるまいと、斯う考へ出すと、何となく音楽の熱が醒めかかつて來た。

丁度此の時分に、平和が克復されて、佛蘭西軍は復た亞爾伯を越えた。多くの將

校たちは母に遇ひに來た。其の中のロオトレエク伯爵は、オルレアン Orleans 聯隊長で、後にはジ、ネエツ駐劄の全權公使となり、それから終には元帥まで行つた人であつたが、此の人に紹介された。母の物語を聞いた伯爵は、大いに同情した容子で、いろいろの利益を約束してくれたけれど、晩年になるまで其の約束を憶ひ出さなかつたらしい。憶ひだした時分には、私の方も、最早その引立てに預る必要がなかつた。トリノ大使の令息で、年若なサンネクテル Senneclere 侯爵も、同時にシャンペリイを通つた。彼がマントン夫人の處で午餐を認めてゐる時に、私も丁度其處へ行き合はせた。食後の談は音楽に移つた。彼は音楽通であつた。當時はエフタ Jephthah の歌劇が新しきものであつた譯者云。エフタは以色列の士師の一人、舊約書中の人物。士師記 一、一、二。此の歌劇は、ベルグラン Pellegriin と云ふ僧の填詞、モントクレエル Montclair の作曲で、此の頃初めて舞臺に上つた。此の歌劇の話から本まで取り寄せた。二人で、この曲を唱つて見ようと言はれた時には、かつと逆上せた。本を開けると、丁度次の有名な二部合唱歌のところが目の前へ出た。

La terre, l'enfer, le ciel même,

1732(21)-1736(25)

Tout tremble devant le Seigneur.

大地も、地獄も、天堂までも、

ことごとく主の前にうち懼ふ。

彼は私に言つた。

「君は幾音部唱へるか？ 僕は此の六部とも唱るよ。」

私は此のやうな佛蘭西人の氣早さには未だ慣れてゐなかつた。自分も時には數部を跳躍することはあつたけれど、一人が同時に六部も唱れるといふは固より、二部すら同時に出來ようとは曾て想ひもかけなかつた。凡そ音楽の演奏では這廢に急速に一部から他部へ移動して、同時に全曲を見渡してゐるといふことほど、私に困難なことはなかつた。然う言はれて逡巡してゐるので、彼は屹度私が音楽が解つてゐないのだと信じたに違ひあるまい。一番試して見ようといふ積りか、マントン嬢に書いてやりたいから、自分の唱ふ歌を寫し取つてくれと言ひ出した。それ迄も斷ることは出來なかつた。彼は唱ひ出した。私は聴きながら譜に取つて行つて、餘り幾度も訊き直すやうなことはなかつた。出來た譜を檢べて見たが

1732(21)-1736(25)

間違はなかつた。初めは氣の毒さうに私の迷惑するのを見てゐたが、斯うして、ともかくも譜だけは書き取れたので褒めた。固よりこれは簡單極まる物であつた。實際自分は餘程音楽には通じた積りであつたが、唯一瞥の下に、全曲を呑み込んで了ふといふ其の點が足らぬ所であつた。尤もこれは何事につけても然うなのであつたが、取り分け音楽では然う言つた敏活なはたらきは、慘憺たる苦學練習の結果でなくては得られぬ筈のものである。其はそれとして、彼が深切にも私の器量を下げたといふ感じを、他の人たちは勿論私自身の心から拭ひ去らうとしたことは、感謝せざるにゐられなかつた。其の後十二年乃至十五年も経つて、巴里のいろんな家へ出遇つたことがあつたので、當時の逸話を憶ひ出させて私が未だ忘れずに居るといふことを知らせようと、幾度も思つた。然し其の時から、彼は兩方の眼を失つてゐた。若し此の話をし出さうものなら、昔はあれほどによく働いた眼が、那樣悲しい状態に成り變つたと、どのくらゐ心を痛めるか知れぬと思つて、何も言はずに了つた。

1732(21)-1736(25)

茲て私は自分の過去の生活と、現在のそれとを結び附けるやうな機會に逢著してゐる。其の當時から今日まで繋がつてゐる若干の交友は、換へ難いほど貴いものになつて來た。彼等はしばしば此の幸福な陰翳を追慕せしめた。其の頃に友達と名乗つた人たちは、皆僞らぬ朋友の情を持つて、私のために私を愛するといふ状態であつた。決して見得に知名の士と相識にならうとか、接近して傷つけようなどといふ那樣腹の黒い人間は一人もなかつた。舊い馴染のゴオフクウル Gaultier と知己になつたのも丁度此の時からであつた。種種な人間がこの二人の仲を引つ裂かうとして腕いたにもかかはらず、今に至つても彼は私の親友である。今に至つても私の親友……ては既うなくなつた。噫！ 彼は奪られて行つた！ 然し彼は生涯の最終まで私を愛することを忘れなかつた。友情はその死と共に初めて消えたのである。

ゴオフクウルは、世の中の最も親しみある人の一人であつた。一目彼を見て、愛せずにはゐられぬ人であつた。一緒に居て慕はしくならず居られぬ人であつ

1732(21)-1736(25)

た。これ程快闊な愛の溢れた誠意の露れた情と理を兼ねた風の頼もしい容子を具へた人を見たことがない。心に隔てをこしらへて行つても顔を見合はずとから忽ち二十年の知己でもあつたかの思ひをさせられた。初対面の場合といふと、いつも氣臆れのする私ですら、最初の瞬間からもう全く隔てが取れて了つた。その調子、その語音、その會話、すべてが彼の外貌と一致した。きつぱりと透き通るやうな音量のたつぷりある、音楽的な綺麗な低音がどつしりと潤澤に富んだ聲で出て來ると、耳の中へ一杯に流れ込んで、心の底まで響き渡る。斑の無い、柔しい快活さ、真率で清らかな愛嬌、自然的な、そして非常に精い修練を重ねた趣味——それらは此の人に限つて見られる特色であつた。未だそればかりでない。憐恤の心は誰彼にとなく注がれて行つた。好意にも分け隔てをつけなかつた。友の事に就いては、夢中に世話をした。むしろ世話をするためには友を求めるといふ傾きさへあつた。然うやつて他の事ばかりにかまけて了ふかと言へば、自分の爲事も決して疎略にはしなかつた譯者云。Cappertonier de Gantecourt はル、ソオに對する友情の點て稱せられた人である。その嗜好は主として書史であつた。一六九一年巴

1732(21)-1736(25)

里に生れ、一七六六年に歿した。

ゴオフクウルは或る時計屋の息子で、自分もその職をした。然し、風采と伎倆に別の社會へ押し出されて行つた。ジ、ネエグに居た佛蘭西のラクロジッル公使と友となつた。其の人の紹介で、巴里で多くの知己を得るやうになつて大きに利益した。其の人たちの傳手で、ブレエ州の鹽の供給を、一手で請負ふ事になつたので、一箇年に二萬リイッル(約計八千圓)の収益があつた。これでは彼は事業の方では言ひ分はなかつたが、女の事に就ては大分心配があつた。自己一身の幸福を願ふ餘りに、それに一番都合のよい方法を選んだ。彼れには貴い美點があつた。甚麼階級の人にも關係があつて、何處へ行つても可愛がられ追ひ廻された。誰一人彼を嫉み、惡む者はなかつた。多分は死ぬ間際まで、一人の敵をも作らなかつたのであらうと思ふ。幸福な人だ！

彼は毎年エエクス・Aixへ湯治に出掛けて、近所の村落から、氣の合ひさうな仲間を集めて來た。サッアの貴族たちとは大抵懇意であつたから、エエクスからシヤンペリイへ來て、ベルガルド伯爵や、その父のアントルモン侯爵に遇つた。此の侯爵

1732(21)-1736(25)

邸で、母も私も彼と相識になつたのである。初めは此の交際に深い意味もなかつた。數年間は無沙汰にもなつてゐたところが、或る機會——後に話す——から圖らず舊交を温めて眞實の友情を取り交はすやうになつた。自分とは最も親密にした友のことを私の口から言ふのだから、十分信を措くに足る。けれども、彼の行動について私意は加へなかつた。彼れは眞に愛すべき人で、夥しい天賦の美質も持つてゐたから、永く彼を記念することは、人類の名譽といふやうへから言つても甚だ良いことと思ふ。それ程愛すべき人ではあつたけれども、矢張一般の人間と同様に、多少の缺點もあつた。それは後に解る。若し全く缺點のない人であつたら、それ程愛すべき人ではなかつたかも知れない。出來得るだけ、彼を面白い人にするには、幾らか罪がかつた事もあつたとして見なければならぬ。

同じ頃また別に一つの友誼が成り立つた。人の心から消え難い、その短い瞬間の歡びに、今でも始終動かされてゐる。サヴォアの紳士でコンジエ Courais と言ふの

1732(21)-1736(25)

が其の頃は年も若く、人好きのする人であつた。音楽を稽古したがつて、その方の教師と心安くなりたと言つてゐた。藝術の趣味と鑑賞の力を持ち、性情の優しい所から誰も皆牽き寄せられた。對手さへ優しければ、自分もその氣になる私とは、關係がすぐに結ばつた。頭の中でじり／＼動きかけて來た文學と哲學との芽生は少しの刺撃を與へさへすれば、すぐ伸び出すまでになつてゐた。此の時丁度それらの物を彼に見出す事が出來た。彼の性質は音楽には不向きであつた。それさへ私に取つては都合がよかつた。課業の時間といつても、大抵音楽以外のこととして過ごした。朝飯も一緒に喰ひ、談話もし、新刊の書物なども讀んだけれど、一言も音楽のことに移つて行かなかつた。當時ヴォルテールが普魯士(後)にフリードリヒ Friedrich 大王と書簡のやりとりをしたといふことが、世間の評判になつてゐたから、此の高名な人たちの事蹟なども、私達の會話に出た。皇子は程なく即位して、後日甚だ英主となるべきかを微見せて居たが、一方は——今こそ世人の驚嘆の的になつてゐるけれど——其の時分は酷く名を墜してゐたので、彼を追ひ行く薄倖は、大人物には免れがたい附屬物かと思つて、衷心から私達は悲んだ。普魯

士皇子も若年の頃は餘り幸福でなかつた。ヴォルテールも幸福な人になれるとはどうしても見えなかつた。此の二人について持つた興味は、段々に擴がつて行つて、其に關係のある事は、何でも話し出した。ヴォルテールの書いた物は、一冊として私達の讀まなかつたものはない。此の讀書の興味に少からず刺撃されて、文章を書くなら、この様な美文、このやうな魅力ある作家の、明い色調を模倣しようといふた。此の頃哲學書簡 *Lettres philosophiques* が世に出た。此の書物は決して彼の名作とは言へないが、私を研究の方へ引き入れたのは、全く此の本の力であつた。此の時から私の研究心は、だん／＼嵩じて來る一方であつた。

然し、全く此の方へ身を獻げる時期は未だ來なかつた。稍輕躁な氣質、漂漂する心は、幾分か制限されたけれど、根を絶つてには至らないし、母の家の状態は、私の寂しい心に對しては、餘りに賑か過ぎるので、却つてそのやうな性情を増長させる傾きもあつた。毎日のやうに、方方から周圍へ寄り集つて來る種種な人間は、各自

の隱謀を抱いて母を騙さうとする者ばかりのやうに思はれて、言ひがたい心苦しさを覺えた。クロオド・アネの後繼者となつてからは、家計上へ立ち入つて見ると、日に日に形勢が悪くなつて行くばかりなので、驚いた。幾度となくその次第を話して、押しつゝ緩めつして諫め立てして見ても、母は取り合はなかつた。彼女の足元に身を平伏し、語氣を激まして、大破綻が眼前に來かゝつてゐることを口説いた。萬望今までは暮し向を改めて、自分の言葉に従つてほしい。母は今未だ年が若いのだから、此の間に少少不自由を忍んでも、斯うして絶えず負債を拵へて行つて、老後に債主の呵責と、一身の悲惨を見るよりは、數等優つてゐるではないかといふことを、力を籠めて言ひ聞かせた。熱心と眞面目に感じた彼女は、いかにもと思つて立派な口約束もせぬではなかつた。が、悪性な奴が一人やつて來ると、其の場ですぐに忘れて了ふ。千萬遍異見をして見ても、更に何の效もない。到底將來の否運は我が手で防ぐことは出來ぬ。私としては、唯此の否運から自分の眼を轉ずるより外に、執る途がなかつた。家に居ても、禍の門を我が手で衛することは出來ない。此家を自分で遠ざかることにした。ニヨンや、ジ、ネエツや、里昂などへ向けてしき

りに旅行して見た。その爲に、又費用が嵩んだけれど、幾らか心の悩みを紛らすことは出来た。それだけの費用を節約して、實際母の利益になるなら、喜んで其不自由でも堪へることは出来たが、私が節約しても、それだけの金は他の狡猾い奴等に奪てやられることは、見え透いてゐると思つて故らに悪黨共の仲間入をして母の氣を落着けたのである。丁度屠牛場から還つて来る犬のやうに、自分の力で救ふことの出来なかつた其の肉の一片を、我が物に占領したやうなものであつた。旅行の言草は、幾らでもあつた。母までが餘分な口實を私に與へた。何爲かと言へば、彼女の關係者は何處にもあつて、相談や打ち合せの要る用向が多かつたから、確かな人間を代理に出すことは望む處であつたからだ。然ういふ場合には必ず私が吩咐かるので、必と私も進んで出て行つた。このために自然放浪生活に近づいて行くやうになつた。斯うした旅行中に、いくらも知人が出来て、後に愉快な利益ある交際をした。里昂ではベリシオン Perichon 氏との交際、これは、向うからは懇篤にしてくれたに、自分の方から疎遠に過すやうになつたのは残念であつた。パリゾオ Parisot といふ人との交際のこと、は追つて話をする。グルノオブルでは、

デイマン Deybens 夫人に、バルドナンシ ヷ Partonanche 裁判所長夫人。殊に後の方はなかなかの卓見家であつた。若ししばしば會ふ機會があつたら、最負にして貰へたのであつた。ジ、ネエ ヱでは佛蘭西の公使ラ、クロ、ジ、ウ、ル氏、これは、切りに私の亡つた實の母親の事を噂した人で、母が死んでも、時が経つても、彼の心から彼女の印象を打ち消すことは出来なかつた。パリヨオ Barilot 父子とも相識になつたが、父の方は私を孫と呼んだりなぞして、面白い人であつた。私の尊敬する一人であつた。共和國に騒動があつた時、此の父子は互ひに反對の意見を懷いて、息子は平民黨へ、父は政府黨へと、別れわかれに自分の籍を置くやうになつた。戦争が始まると言つたのは、一七三七年のこと、私は丁度ジ、ネ、エ、ウに居たから實地に觀て知つてゐるが、有らうことか、父と子が其の同じ自分たちの家から、てんでに武装して、一人は市廳へ、一人は自分の兵營へと指して出た。二時間後には戦線、顔と顔を突き合して、互ひに喉を刺違へよう、と堅く覺悟して行つたのである。此の竦然たる光景を見せられた私は、刺られるやうな印象を感じた。何日か自分が公民となる時があつても、決して内亂には與すべきものでない。身體を突き出すにしても、意

見としてても、決して國內では、兇器に懇へて自由を争ふべきでない、といふことを深く心に誓ふやうになつた。或る際鋭い場合に、此の心の誓を破らなかつた證據も擧げることが出来る。其をよく守つたのは、値打のない事でもなかつたと他も認めるであらう。少くも自分は然う思ふ。

然し、未だ眞に愛國の情で心が沸騰するまでには行かなかつた。この情は武装したジ、ネエツを見てから徐徐に心を刺撃し出したのであつた。それは、私に不利益な、或る重大な事件に依つて見ても解らうと思ふ。この事は、つひ言ひそくれたが、言はずには濟まされないので話をする。

1732(21)-1736(25)

小父のベルナルは、數年間、カロライナ Carolina 州に行つてゐて、其處で自分の設計したチアルズトン Charleston の市街の建設にかかつて程なく死んだ。彼の哀むべき従弟も、普魯士王に仕へてゐる中に死んだので、小母は一どきに息子と夫とに別れて了つた。此の打撃は生残つた親類中で一番近しい者と親ませた。近しい

1732(21)-1736(25)

者といへば私だ。私はジ、ネエツへ行く度に、小母の家に寢泊して、小父の書物や書類を弄つたり展げたりして遊んだ。種々な珍しい物があつた。誰も氣の附かぬ手紙などもあつた。小母は這麼紙屑を何とも思つてゐないから、欲しいと言へば、みんな與れた處であつた。然し、私は、書物を二三冊貰つただけで満足した。いづれも私の祖父の、宣教師をしてゐたベルナルが、自分の手で書き入れたものであつた。その中に四折版で、ロホオ Rochaut の遺著があつて、餘白には、一面に參考になるやうな注意が書いてあつた。これが私の數學が好きになつた原因であつた。此の書物は、ワレンス夫人の藏書中に紛れ込んで了つて何時もそれを大切に置いて置かなかつたことを悔いた。尙その外に、原稿の儘の漫録が五六種あつた。其の中の一つ、有名なミシ、リイ、テ、クレ、Michelle Ducret の書いた物だけは版になつてゐた。此の人は、非凡な知能を備へて、應用の利く人であつたけれど、餘り暴動好きであつたために、ジ、ネエツの當局から虐待されて、アルベルヒ Arbog の監獄で長いこと苦痛を受けた揚句、到頭死んで了つた。人の噂では、ベルヌの叛亂に加擔したからだと言ふことであつた。

1732(21)-1736(25)

其の原稿と言ふのは、ジッネエツで採用になつた城壁築造の大計畫をば、無謀の舉だと言つて堂々と論じた批評文であつた。議會が此の計畫を實施しようといふ裏面に、甚麼魂膽があるかをも知らなかつた技師などは、此の論文を冷笑に附してゐた。ミシッリイは、此の事業を罵つたために、築城委員會から除名された。けれども、二百の議員中の一人として、一個の公民として、自分の意見を發表することは差聞ないと信じて、論文を公にした。が、縦し世間に弘めなかつたにしろ、印刷させたいふのが、注意の周到を缺いた點であつた。二百部だけ刷らせて委員へ發送しようとした小冊子は、議會の命令で、残らず郵便局で差し押へられた。私は此の論文と、それに對して小父がその筋の命て書いた答辯書とを、多くの書類の中から見出して取つて置いた。

此の旅行は、私が測量の方を罷めて間もなくの事であつた。そして尙だ法律顧問長のコッチュルリイ氏と親交を繋いでゐる時であつた。少し經つて税關長が、自分の子供のために私を教父に頼み、教母にはコッチュルリイ夫人を頼むといふことであつた。顧問長とも言はれる人と同等の位置に立つて、教父になるといふこと

1732(21)-1736(25)

は、無上の光榮と心は飛び立つやうで、此の名譽に負かぬほどの資格を見せたいと思ふ心に逸つた。

てその時の考へに、彼のミシッリイ氏の刷物を彼に見せるより外に良い分別はあるまい。あの刷物は、世に得難いものだ。斯ういふ物を所持してゐるといふことは、取りも直さず國家の祕密を知つてゐる。ジッネエツの歴々に關係ある人と思はせる譯だと、然う思つた。けれども、私は何爲と言ふこともなく、唯控へ目に、小父の答辯書だけは、見せなかつた。それは原稿のまゝであつて、顧問長には印刷物の外に用はないと考へたからであつたらうと思ふ。然し彼は、それが一個の貴重書類であるといふことをよく知つてゐた。迂闊彼を信じて手渡しして了つた後は、奈何しても取り戻すことが出来なかつた。然うかと言つて、幾ら談判を持ちかけても無効といふことは、知れ切つてゐるので、寧ろもう功德にならうと思つて奪られた物ではあつたけれど、與れてやつたことにして置いた。この重寶な珍奇らしい書類を、トリノ政府では甚麼にか有難がつたらう。彼も亦斯ういふ書類を手に入れるには、莫大な費用がかかつたといふことで、それだけの金を政府から拂ひ戻して

貫ふ運動でもしたに違ひない。此の事から何か波瀾が起らうかといふ杞憂の中にも、サルヂニア王が、ジッネエツへ攻め入つて来るなどといふ虞は、まづ無さうに思はれるから安心だ(譯者云)。然るにルッソの歿後數月を経ぬ中に、此の虞が事實となつて現はれるやうになつた。然し決して攻め入つて来ないとは保證の出来ないことであるから、舊怨ある敵の方へ、ジッネエツ市の警備の不完全なことを知らせるやうな、淺ましい虚榮心を始終叱呵めてゐるのだ。

1732(21)-1736(25)

斯うして音楽と製薬と、空計と旅行とて二三年を送つてゐる間に、其から其へと無間斷に彷徨つて、何といふ標的もなしに、安住の地を求めて廻つたが、それでも藝術家たちと遇つたり文學談を聴いたり、その夥伴に這入つたりしたので、何時となく學問の味が解つて來た。けれど、書物を讀むと言つても、真味を掴むとよりは、それを種に、太平樂をならべて居る方であつた。幾度かジッネエツへ行つた時に、よく舊い知己のシモン氏を訪ねた。此の人はバイイエエや譯者云。 Adrien Baillet. 第十

1732(21)-1736(25)

七世紀後半に出た佛蘭西の文士、宗教家や、コロムニエ Colomes から抄出した清新な文學界の消息で、萌しかけた私の競争心を一層煽つた。また折々シンペライで、名は忘れたけれど、一人の修道僧で、理化學の教師をしてゐる人に遇つた。時時實驗をして見せて貰つた。なる程面白いものだと思つた。一番摹似をして、隱顯墨を拵へかけて見た。て、一個の硝子罎へ半分以上生石灰と雌黃と水を混合して、その口を密閉した。すると忽ち劇しい沸騰が起つた。手掬く口を開かうとしたけれど、時間が後れて罎は爆裂彈のやうに私の顔の上に破裂した。雌黃と石灰をうんと呑まされて、死ぬ程に苦められた。眼は六週間以上も潰れたやうになつてゐた。これでもう私は碌碌藥品の性質も知らないで、滅多に理化の實驗などするものではないといふことを悟つた。

飛んだ災難が健康の上に不幸な影響を與へたか、少時してからは、目に見えて衰弱が來た。體格は丈夫であり、過度な不攝生をしたことのない私が、斯う段段衰弱して來るといふのは、意外である。胸膈は立派に發達してゐたから、呼吸も樂に出來る筈なのに、何となくそれが困難で、肺に壓迫を感じ、不隨意に溜息が出たり、動悸

は昂り略血までした。體温も始終不定であつた。斯ういふ習慣は後々まで全治しなかつた。内臓に故障もなく、特に健康を害するほどの原因もなくて、奈何して年若な者が斯ういふ状態に陥るのであらう。

「刀身は鞘を耗す」といふ諺がある。丁度私の身の上を言つたものだ譯者云。但諺の原語は「L'épée use le fourreau」とある。或は「La lame use le fourreau」ともいふ、那箇ても同義である。刀身は精神で、鞘は身體に喩へる。過度に精神を勞する者は、身體を傷害する意。私は情熱に依つて生きた代りに、また其の情熱に殺された。甚麼情熱だといへば、それは言ふにも足らぬもの、小兒らしい物を目的としての情熱であつたが、然し、それに動亂させられることは、恰もヘレエネ Helene を我が物とするか、全世界の帝王となるかといふほどの騒ぎであつた譯者云。ヘレエネは希臘傳説に、ゼウス Zeus の娘で、メネラオス Menelaos の妻、艶容儷なきものと傳へられた。トロヤ王プリアモスの子パリス Paris が、此の女を誘拐する。メネラオスはパリスと決闘する。這麼事からトロヤ戦争が始まつた。殆ど十年間包圍戦争の後、トロヤは落ちて灰燼となつた。まづ女のこと。一人の女が手に入れば、それで満足し

てゐるやうでも、情はなかなか鎮まらぬ。幸福の最中にも、戀の饑ゑに身が燃えてゐる。柔しい母——慕はしい女友はあつても、別に愛人がなくてはならぬ。其の愛人を假想してみても、幾度も——其の姿を作り變へてみた。若し私が母を抱いたとしたら、十分の愛は感じて、欲情は悉く消え失せてあらう。母の柔しさには、嗚咽しても、歡樂は味はずに了つたであらう。歡樂！これが人の極め得る事だらうか？ 若し生涯に唯一度、甘き戀の糜爛した味を味はつたとしても、脆い、厖弱い私の五體は、その満足を感じ得たとは、どうしても想像出來ぬ。恐らく、その爲に生命まで失つたであらう。

斯ういふ譯て私は、的なき戀に身を焼き盡してゐた。斯うしてゐては、唯破滅を招くより外はない。同時に又、哀むべき母の家政が、日増しに面白くないのを見せられ、瓦解の知れた、不謹慎な行動の罷まないのを、苦に病んで、一瞬間も沈着かなかつた。殘忍な、そして常も不幸を廓大して考へる私の想像は、絶えず不幸を極度まで展げて見たばかりでなく、その結果がどんなに惨しいかを想はせず、に居なかつた。一朝その災禍の來た時には、我が全生涯を獻げ、此の人でなくて自分を喜ばせ

る者もない母との仲を、むごたらしく裂き分けられて了ふのではないかと思つて見た。これが私の精神を過勞させた所以である。欲望と恐怖と、それがかはるがはる私の刀身を摩り耗らしたのであつた。

音楽の欲は、前の二つの情から見ると、強さはそれ程でもなかつた。けれども、全身を打ち込むほどの熱心で、無暗に晦澁なラモオの樂理を研究して、覺えられないのを無理に填め込もうとしたり、樂譜の謄寫に、幾晩も一／＼取りかかつたくらゐだから、決して精力を耗らさぬといふものではなかつた。然し、何時までも是ばかりに氣を取られてゐられぬ譯があつた。私の蕩搖く頭は、その日限りの果敢ない慰み、たとへば旅行、音樂會、晚餐會、散步、小説、芝居、その外いろ／＼の思ひ掛けない娛樂や、爲事てみちみちて居て、嗤笑しいほど猛烈な情となつたために、容易ならぬ苦痛と感ぜられて來た際であつたからである。クリイヴランドの想像的不幸を、事情に妨げられつゝも、熱心に讀んで見たが、確かに自分の不幸よりも、除計氣を悪くさせられた譯者云。クリイヴランドは一七三二—三九九年に、L'Abbe Prévostの書「*Histoire de M. Cleveland, fils naturel de Cromwell, ou le philosophe anglais*」の主人公。作者

1732(21)-1736(25)

ブレヴォオのことは、後篇六四頁に出る。

茲にジ、ネエツ生れのバアグレ、Bagneretと言ふ男がある。露西亞で彼得大帝の下に使はれてゐた、世にも品格の卑しい大痴漢であつた。其の癖いろゝな目算もあるらしいが、人物同様矢張莫迦氣切つたことばかりで、何百萬の金を雨のやうに降らして見せるなどと言つてゐるが、實は、零が跣足で遁げるやうな事ばかりであつた。此の男が何か、上院へ請願があると言ふので、ジャンペリイに來て、母に取り入つた。彼に取つては、大いに理のあることで、例の金を降らす傳でうまうま騙し込んで、一つまた一つと、母の衣兜からなけなしのエキ、ウ錢を撈ひ取つて行つた。私は此の男が嫌ひであつた。私の事だから、すぐそれを見抜かれて了つた。それから私の機嫌を取らうとして、種種な卑劣いことをし向けた。自分が少し知つてゐると言つて、將棋を始めようと言ひ出した。あまり進まなかつたけれど、言はれるままに、棋子の筋道ぐらゐ教へて貰つた。すると、めきめき上達が見えて、初めての都合ですつかり盛り返す程の腕を上げた。此の上の稽古はもう不必要であつた。これからまた將棋に夢中になつた。將棋盤を買ふやら、クラブリア Calabrie

1732(21)-1736(25)

1732(21)-1736(25)

の棋子を買ふやらして、室に閉ぢ籠つた儘晝となく夜となく、息も吐かず手も休めず、あらゆる手を研究して、よかれ悪しかれ悉皆頭へ入れて了はうと、一生懸命であつた。二三箇月間、非常な苦心で研究した後は、身體が瘦せて蒼白なつて、まるで痴鈍のやうな顔をして、カフェエへ這入つて行つた。其處で復たバアグレエと手合をした。一席、二席と二十回まで續けて私は負かされた。種種な手が頭の中で沸騰し出した。氣が上ずつて了つて、眼に雲が覆冠さつたかと思えた。フィリドオ、Philidor やスタンマ、Stamma の書物に據つて、よい手を考へ出さうと焦慮つてみても、矢張少しも效がなかつた。そして倦み疲れて來ると、一層考へが鈍くなつて了つた。此處で將棋を廢して了つても、休まずに争つてゐても、とにかく初の時から一段と昇る氣づかひはなかつた。始終前と同じ處に居すわりであつた。バアグレエに勝たうと思へば、幾世紀の間稽古したところて追ひ付くことではない。いや一步も進みはしない。良い時間潰しだと讀者は言ふだらうが、時間はそれで潰れ過ぎた。逆ももう續ける元氣がないといふ時になつてなれば、爲かけた事を罷めなかつた。室を出て來る時分にはまるで死人のやうな相好をしてゐた。

1732(21)-1736(25)

若し引き續き勝負を争つてゐたら、本當に死んで了つたかも知れない。青年の血氣にまかせて、斯う頭を疲らせては、いつ迄も身體を健康にする折のないことは誰が見ても解つた話だ。

身體の異状は、氣質の上にも差し響いて、餘り縦な妄想を燃すやうなことが少くなつた。衰弱が眼に見えるところから、次第に深沈とした氣分が出て來た。無暗に旅行などに耽らぬやうになつた。家の中に引つ込んでばかり居ても、別に疲れは感じなかつたが、鬱憂に取りつかれた。曩の情熱の代りの空想が湧いて來た。憔悴は悲哀となつて譯もなく泣き悲んだ。未だ本當に生を樂まない中にも、うその生が、自分から去つて行くやうに感じた。母を如何なる境遇に残して置いて自分が先立つて了ふのか、彼女の墜ちかけてゐる境涯はこんなでもあらうか、とそれらを思ふにつけて私は泣き顔へた。彼女を棄て、彼女を嘆きに殘して行く事が、私の唯一の遺憾であつたといふことは、憚りなく言へる。到頭私は全くの病人になつた。彼女の看護の爲方は、實の子にするより以上のものであつた。そして、此の看護は偶然にも、彼女自身の利益にもなつた。餘計な爲事に手を出したり、多勢の

1732(21)-1733(25)

食客を引き入れたりすることが少くなつたからである。若し此の時に死が訪れて來たら甚だに私は平和で終つたであらう。縦し今迄に生の享樂を縦にしたことがなくとも、少しも不幸を感じなかつたであらう。和平を得た私の靈魂は、生と死を併せ毒する人間世界の不正不義に對する感傷をも知らず、いとも靜かに飛揚したであらう。我が親愛な半身夫人の名に於いて未だ生き残つてゐるといふことを限りなき慰めとして死んだであらう。して見ると、實は死と言ふべきものでなかつた。母の運命を氣遣ふ念も消えて、死ぬと言つても唯眠る氣で居られたであらう。そして苦い不安までが、いとをしい可憐な情のために調和されたことであらう。母には斯う言つた。

「お母さんにはこの身體を預けてありますから、どうぞ幸福になれるやうにして下さる。」

到底むづかしいと思ふやうなことが二三回あつたので、其の時は夜中でも寢床から下りて彼女の室へ膝行り込んで、平生の行爲に就いて様様の苦言を與へた。公平に巧妙に、殊に彼女の將來にどれ程痛心してゐるかといふことを、鮮明に言ひ

1732(21)-1736(25)

聞かせた。涙は私の滋養分であり、薬でもあつたかのやうに、彼女の寢臺の傍に坐つて、彼女の腕を握つて、潜々と泣いてからは、不思議に氣丈夫になつた。時間は斯のやうな夜語の間に移つて行つた。自分の室に歸つて來た時には、始めよりは、ずつと容態が良くなつてゐた。彼女からの約束と希望に満足して沈著いたために、心の平和と神への忍従とで、安らかに眠れた。あゝ神よ、願はくは、種種の理由から生を呪ふやうになつた私、あまた度世の狂風に吹き捲られて、終に得堪へぬ惱みを孕むやうになつた私に對して一切に終を與へるところの死が、此の時よりも尙以上平和に來らむことを！

心痛と看護と、不測の勞苦とで、母は私の生命を救つた。私を救ふ者は、實際彼女の外になかつたのである。醫者のすることは餘り信用しないが、眞の友の介抱は心から頼りにする。何よりも効果のあるのは、自分達の幸福の本になつてゐるのである。若し特に楽しい感情は何かと訊かれたら、それは私達が互ひに片方の

爲に生れたといふことが證據立てられた時だと言はねばならぬ。二人の仲が以前にも増して濃厚になるといふことは出来やうもないけれど、何爲とは知らず、との單純さに親和の度が加はり、密著の力が強くなつて來た。私は全く母の作物となり、生みの子となつた。知らず識らず互ひに離れまい、二人の生命を共通のものにしようとしてゐた。互の幸福に取つては、互の身が必要であり、同時に十分であると感じ合つて、それから一切の餘念を斷ち、二人の幸福と、互ひに一方を我が物にしようといふ變つた願望だけを堅く守るやうな習慣を作つた。我が物にしようといふこの情が、決して戀でないことは、前に言つた通りである。即ち、官能にも性にも、年齢にも容姿にも關係の無いもので、唯自己の存在上、缺くことの出来ない、そして五體が減びる迄は、必ず伴ふ種々な條件に關係を持つたものである。

これ程貴い瞬間が彼女なり、私なりの後の生涯に幸福を持ち來らなかつたのは、どういふ譯であらう。尤もそれは私の罪ではない。其には自分が安心出来るだけの證據がある。又彼女とても、好き好んで然う成つた譯ではなかつた。良久すると私の固有の特質が、またまた復活するやうな因果になつてゐたのである。然

し、それは未だ急な事で始まらなかつた。よい鹽梅にその復活までの間に、多少の餘暇があつた。その間は短くても、大切な時であつた。自分の過失から、その時間を無駄にしてつたといふ心配は、私の方に少しもない。

重い病氣は癒つたが元氣は十分回復しなかつた。腹の工合がまだ本當でなく、熱も醒め切らないで、何時迄もぶらぶらしてゐた。唯この親みある女の傍で、殘生を過ごしたいといふこと、彼女のよい決心を何時までも失させまいといふこと、幸福な生活の眞味は、奈何いふ處に在るかを感じさせたいといふこと、又、其が私に關係を有つ以上、實際に然ういふ方へ導いて上げたいといふ事、それより外に慾はなかつた。て斯ういふ考へをして見た。這麼陰鬱な、うら悲しい家にばかりゐて、何時迄も二人切りの寂しい生涯を續けて行つたら、終には矢張うら悲しい最後を見なければなるまい。と思ふ中に、これを治す方法が自然見附かつた。母は私に牛乳を飲め、田畝へ行つて飲んで來いと勧めた。一緒に跟いて來てくれるなら、言ふ約束で、それに同意した。それをまた用意させるには、手間は要らぬ。唯其の場所だけが極まらずにあつた。彼の郊外の庭園の位置は、元來野といふ程の處で

なかつた。周邊には餘所の家や庭が、轟と立ち圍んでゐて、田舎の佗住居としては目を怡ばすに足る程のものが少しもなかつた。加之アネエが死つてからは、樹木の世話などしようといふ考もなし、外に此の別荘については何の心残りもなかつししたから、第一、經濟の關係から、とう／＼此の庭園は人手に譲つて了つた。

母も市街が可厭になり出したといふことを見て取つた私は、早速今の家を棄てて了つて、うるさい客などの足踏もせぬやうな市街から取つて退いた寂然として、趣きの深い隠れ家に、二人が身を落ち着けては、と言つて見た。彼女は賛成した。二人を護る天使の暗示ともいふべき此の計畫は、私共の境涯を、死が二人の仲を裂きに來るまで、幸福に、安靜にするものとしか思はれなかつた。然し、然うした境涯は、私達には立ち入ることが禁められてあつた。母は今までに、豪奢な生活をして來たから、其の生活を抛つて了つても、後悔のないやうに、貧困の中に一生を終る運命を持つてゐた。私は又、有りとある逆運に責め煽られて、世の公徳と正義を死守し、徒黨の後衛や、同臭の庇護を恃にもせず、唯自己の公明な心から人生の眞理を宣傳するやうな人たちの模範となるべき人間であつた。

偶とした取越苦勞でこの計畫は邪魔されさうに見えた。家主の感情を害ねることを恐れて、此の陋き家を思ひ切つて得見棄てなかつた。彼女が斯う言ふ。「隱遁生活の趣向は、面白くもあり、私も大氣に入つた。だけれど、生命は何處に居ても繋いで行かなくてはならない。牢舎のやうな家だけれど、此家を棄てて了つては、麪包が得られなくなる。森の中へ這入るのも可いが、麪包がなければ、依然市街へ捜しに出て來なければなるまい。それが可厭なら、此の家は此の儘にして置いた方がよくはなかつて？ サン・ロオラン伯爵の方へは、是迄通り少しづつ家賃さへ拂つて居れば、私の年金の方には何の祟りもあるまい。然うして置いて不斷の住居には、遙と市街を離れた、然うかと言つて、さあ歸ると言つた時に、餘り不便でないやうな、何處か閑靜な家を見立てようぢやないか。」

で、其の通りにすることになつた。其處此處と捜した末に、とう／＼コンジェ氏の持ち地面で、レ・シャルメット Les Charmettes と云ふ處へ越して行くことにした。此處はシャンペリーのぢき近所なのに、百リウも隔つてゐるかと思はれる程、世を離れて物寂かな處であつた。稍高い二脈の丘が、緩かに繞る間ひを、北から南へ溪が續い

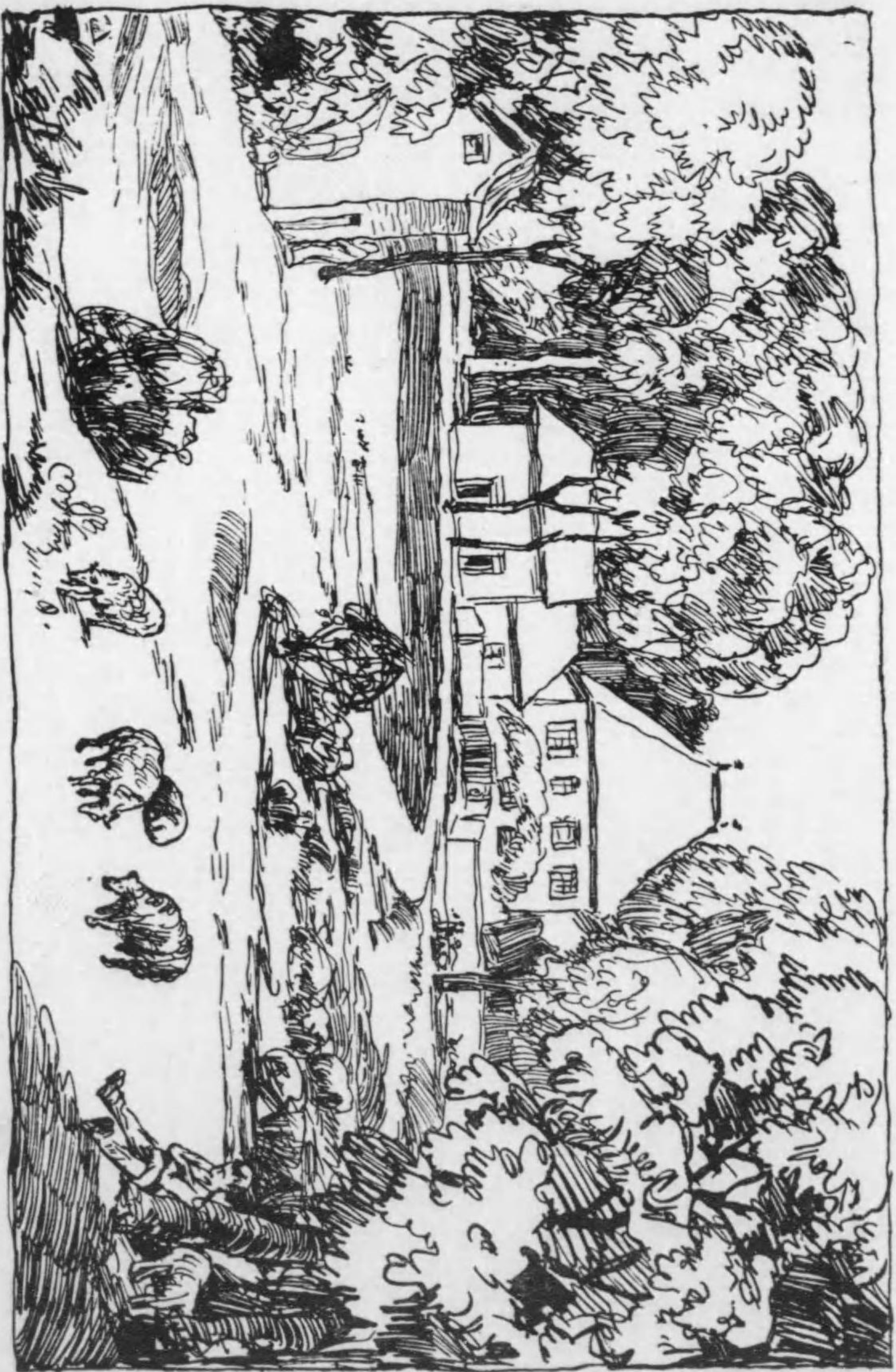
1732(21)-1736(25)

て其の底の邊に石を分け、樹の茂みを透して、一條の小流れが駛つて行く。溪に沿つた兩岸の斜面地に田舎家が散ばつて見えるのが、素朴な隠れ家愛する人には、甚麽に幽しく思はれたらう。二三軒聞き合せて見て、一番よささうなのに極めた。それはノアレエ Noiret と言ふ官吏の持家であつた。家はよく手が届いて居た。真ん前の高臺には花園がある。その上の方には葡萄畑、下の方には果樹園がある。向うには栗の樹が立並んで、すぐ傍に泉水が噴き上げてゐる。丘のずつと上には牧場も見える。すべて私達の理想とした、田園生活の條件に、何一つ缺けてゐる物がなかつた。多分此處へ来たのは、一七三六年の夏の末頃であつたと思ふ。初めて来て泊つたその日から、私は嬉しさが包めなかつた。

「お母さん！」

斯う叫んで、突如親愛な友を擁抱して、感激と歡びの涙に彼女を漂はせながら、

「此家こそ『幸福』と『無心』の住み家だ。此家でそれが得られないとすれば、何處へ行つて捜したつて見附かる氣遣ひはありはしません。」



居舊のトッメルツ

1736(25)

一七三六。

Hoc erit in votis : modus agri non ita magnus,

Hortus ubi, et tecto vicinus jugis aquae fons ;

Et paulum sylvae super his foret.....

我が常に望みしは、さまで廣からぬ一區の地域に、
第 六 卷



第六卷

家近く花苑のありて、永久に涸れせず湧き出づる清泉と。

さてはやや繁りたる一むらの木立との備はらむことなりき。

私はこれへ、

Anctius atque Di melius fecere.

然るに神は我が願ひよりも更に多くの幸を授け給ひぬ(ホラチウス)。

とまでは附け加へることは出来ないが、前のだけでも澤山だ。その上私には其の所有権さへも不必要だ。唯それで享樂することが出来さへすれば堪能するのであつた。全體有権者と、事實上の所有者とは、往往性質の異ふ者であるといふことは、久しい前からの考へてもあり、他にも話したことであつた。それでは所天と戀人とも尙且此の部類へ這入るべきものかと言へば、それは姑く別として差間は無いが。

こゝから私の生涯中の盛り短い幸福が始まる。此の瞬間は、極めて速く経過して行つたけれど、其の間の安静であつた點から言つて、真に私の生き甲斐があつたと思つたのは、全く此の時であつた。値貴く、そして感懐多き瞬間！ 噫！その可

1736(25)

1736(25)

憐な道行きを再び繰り返す事が出来ないものか。せめて出来るなら、あんなに疾く飛び去るやうなことはしないで、緩徐に私の記憶を流れて呉れ。この様に魅力あり、又素朴な此の記録を自分のために敷衍出来るだけ敷衍するには、奈何すればよからう。然うかと言つて、餘り同じ事ばかり、幾度も幾度も繰り返して、自分とはかく、讀者を疲らせるやうなことをしなすためには、奈何すれば可からう。それとも此の記憶が、事實や言葉などから成立つてゐるものならば、奈何にか書き立てて讀者に懇へることも出来ようといふものだが、それが、どういふ事實があつたといふのでもなく、斯ういふ事を考へたといふのでもなしに、唯私に取つて斯んな感味があつた、斯んな情緒が湧いたといふだけに止まる。で、此の心もちを取り除いて了ふと、幸福であつたといふ事實を證明する方便が外に少しもないから困り切るのだ。毎朝太陽と一緒に床を離れた。それがやがて幸福に感じた。散歩をすれば、それが又楽しい。母と顔を合すのも楽しい。母と離れてもそれが楽しかつた。森や岡を駆けまはり、谷間に迷ひ入り、本を讀み、休息をし、花園の爲事をし、果實を集め、家事の手傳をする、その間に幸福は何處へでも跟いて廻はつた。さて其の

幸福は、どれと指して或る物の上に在つた譯ではなく、全く私の心の内部に附着してゐたので、唯の一瞬間でも私から離れたことはなかつた。

この心ゆく時期の間に身の上に出つた事、又私の始終行つた事、言つた事、考へた事は、いづれも記憶にその儘残つた。これより前のことか、後のことは動ともすると断續する傾きがあるのに、此の間のことばかりは、少しの空隙もなしに記えてゐるので、今この時まで、そのまま引き續いて來てゐるかの感じがする。若い時分には、餘り飛び揚り過ぎ、年を取つた今日では、反對に沈滞してゐる私の想像力は、此の樂み極りなき回想に依つて、永久に失つた希望を償ふことが出来る。「未來」には少しも誘惑されぬが、過去を回想する時だけは、言ひ知れぬ媚を感じず。今しも話しかけた時期の回想が、特に潑刺として精醇であるがために、自分の凄慘な境遇をも一時忘れて、幸福なライフを營んでゐるやうな氣がすることも稀でない。

然うした思ひ出の中から、唯一例を話させてもらはう。それに依つて、その記憶の力と、偽なきことを證據立てることが出来る。初めてこのシルメットへ泊りに行つた日は、母は昇床で擔がれて行くし、私はあとから歩いて跟いて行つた。道

1736(25)

1736(25)

は爪先上りになつた。彼女の體重は、あまり軽い方ではなかつたので、人足を疲らせるのも氣の毒のやうに思つて、途中まで來て彼女は徒歩になつた。しばらく歩いて行く中に、彼女は道傍の生垣の中に、青い物があるのを見つけて、

「おや、日日草がまだ花が残つてる。」

私はまだ日日草を見たことがなかつた。そして此の時も、俯伏してそれを檢べもしなかつた。私の眼は、甚い近眼で、立つたままでは、地面に生えてゐる草木を見分け、けることも出来ぬ。唯それらしい物にちよつと眼を呉れただけで、行き過ぎて了つた。其から物の三十年も経つ中に、日日草といふものを見もせず、注意したこともなかつた。一七六四年に、友のペイルウ Peyrou 氏とクレシエ Cresier に居た時分、或る小山の頂上に登つたことがある。其處に一つの綺麗な看場があつて、道理らしく美觀といふ名が附いてゐた。折から少しばかり植物の採集を始めた時であつた。草叢の中を掻き探してゐると、不意に驚喜を以つて叫んだ。

「やあ！ どうだい日日草だ！」

いかにも日日草に違ひなかつた。ペイルウは様子を眺めて、變な顔をしてゐたが、

何のことだか譯が分らなかつたらしい。けれども他日彼がこの本を讀まれる折があつたら、屹度成る程とうなづくであらう。讀者も亦這麼些些たる事柄に據つても、當時に於ける私の印象が、何事にも鮮明であつたといふことを推察されるに難くはあるまいと思ふ。

然し此の地方の風土は、私の健康を回復させることが出来なかつた。固より衰弱してゐる上に、ますます衰弱を加へて來た。牛乳を吞むこともむづかしくなつてそれも歌めた。其の頃は、水を飲むことを以つて、萬病に效驗があるものとしてゐたので、私もその習慣に従つたが、餘り無考に飲み始めたために、すんでのことに命まで奪つて行つて了はれるところであつた。毎朝起きるとすぐ、大きな水呑を提げて泉の湧き出す處へ行つて、量なら殆ど二瓶ほどもある水を、歩きながら立つつづけに仰飲つた。食事ごとに飲んでゐた酒も、全く廢めて了つた。私の吞んだ水は、山水であるから、少し硬くて腹へ這入つても落ち著かぬ。つまりこれが嵩じて二月と経たぬ中に、今まで丈夫であつた胃を全然壞して了つた。消化不良が極度まで來たので、もうとてもこれは瘥らぬものに決めて了つた。丁度この時、一

1736(25)

1736(25)

つの出來事が起つた。その事自身が既に異常であり、結果も同様に不思議なものであつた。私が生きてゐる間は終極の附かないやうな事件である。

或る朝、不斷より病氣の劇しくない時に、小さい卓子を据ゑ附けてゐると、何とは知らぬが體軀中が遽かに顛覆るやうな感じがした。例へば斯う暴風怒濤に吹き捲かれたとしてもいつたやうな、全身の血は一時に躍り狂つて、それが忽ちに四肢五體へ漲つて出るかと思ふやうな氣持であつた。動脈は激しい力で鼓動しはじめて、それが判然自分に解るばかりでなく、其の鼓つ音までが高く耳に聞こえて、殊に頸動脈が一層盛んにそれをやり出した。兩方の耳鳴がまた酷い音を立てて、動脈の響と呼應する。それが三重、四重になつて聞こえる。おもあもしい、底響きのするやうな唸り聲と、さらさらと水の流れるやうな明かな低音と、痢の立つたやうな鋭音と、今言つた鼓動の音とで、殊に鼓動の音は、脈搏を測つて見ないでも、また體軀に手を觸れて見ないでも、容易にその數をかぞへることが出來た。この動亂は激烈を極はめた。是が爲に、今迄鋭敏であつた聽神經は鈍らされ、全くの聾といふほどではないが、耳はぐつと遠くなつて、今でも依然そのまゝになつてゐる。

1736(25)

この時の驚きと怖れとは甚麼であつたらう。私は死ぬかの思ひと共にぐつたり床へ倒れた。顔へながら、丁度來た醫者に容體を話したが、心の中では、到底回復の見込はあるまいと信じてゐた。醫者も屹度然う考へたにちがひない。然し彼はともかくも職務だけの事をして、聴いても解らない長い長い原因やら症状やらの講義もし、その實驗とても言つた格で、いそいそと患者に施術を試みた。其の施術は苦しくて、氣持が悪くて、根つから效驗がないので直に可厭になつて了つた。數週間經つのに、容體はよくもならず、悪くもならなかつたから、もう又床を離れて、復平時のやうに動き出した。が、その間も、動悸や耳鳴は、以前と少しも異りはなかつた。其の時から三十年も經つ今日まで、一分間も鎮まつたことがない。

その頃までは、この上もない寢坊であつたのが、病氣のために、全く睡眠が出來なくなつた。これも今日まで其のまゝ治らない。その時は、もうこの命も數日の間しが持たぬものと思ひ込んで了つた。斯う思ひ込んで、一時治療の懸念をも忘れて了ふことがあつた。既う命がないものとして見れば、出来るだけの事をして、遺憾のないやうにしようといふ決心も出た。そしてその事は、慮らぬ造化の恩恵

1736(25)

で、自然に出來得られた。といふ譯は、斯うした悲しい運命に任せてゐながら、當然受くべき悲哀から救はれたからだ。身體中が鳴動して、困るには困つたが、其がために苦痛を感ずることは更になかつた。またその外に、著しい習慣性の不自由もなかつた。唯夜になつて寝られぬことと、呼吸の困難なことが、つらい持病になつた。その呼吸困難も、喘息になるほどのこととなく、走つたり、少し劇しく運動でもしたりする時の外は、那樣に酷いこともなかつた。

この出來事の爲に、一命は失はれたかと思つたに、然うはならないで、反つていろんな情欲を殺して了つただけであつた。謂はば、此の病氣は精神の上に、意外な好結果を持つて來た。それを毎日自分は、自然に向つて感謝してゐる。我が身を死者として觀た時から、始めて眞の生命に這入れたやうに思はれる。今までに見棄てようとした事物の眞價が解つて來て、初めて貴い爲事に身を勞するやうになつた。例へば、今まで全く懈つてゐた、近き未來の事業といふやうなことを、いろいろ考へて見るやうになつた。私は屢々宗教に自分流儀の衣を被せた。然し全く無宗教の人間といふ譯でもなかつたから、假使多くの人たちは、此の問題を物悲し

いもののやうに解する傾きはあつても、私には甚だしい苦痛でもなかつた。況してこれをば怡樂と希望の具と考へるやうな人達に對しては、言ひ盡しがたい甘味の源であるものを。此の場合、母は私に取つて一番大切な位置に在つた。世に有らぬる宗教家たちといへども、この點では母に優ることが出来ぬ。

何事にも主義を尊ぶ母は、宗教に對しても亦主義を喧しく言ひ出した。そしてその主義は、甚だ矛盾した種々な思想から組み立つてゐた。正しい考もあれば滑稽な處もあつた。つまりこれは、彼女の性格から來る感情と、教育から來た偏見との然らしめる所であつた。神は人々の心のまゝに爲られる。正人は善神を爲り、悪人は邪神を爲る。信者の中でも憂鬱な、陰險な人は地獄ばかりを信ずる。それは、總べての人の世を咒はむとする者であるからだ。けれども、快活な、平和な人は、全くそれを信ぜぬ。私の不思議に堪へない事は、彼のフェヌロン Fenelon といふ善人が、その「テレマコス傳」 *Aventures de Télémaque* の中で、如何にも地獄といふものを信じてゐるらしい口吻を洩らしてゐることである。が、私は、其がどうか彼の眞意でなかつて欲しいと思ふ。何爲なれば、縦し甚廢に誠心の人であつたにしても、彼が

1736(25)

1736(25)

司教である以上は、時には嘘も吐かねばならぬからだ。母は私に嘘は吐かなかつた。彼女の心には、何等の陰翳もないから、外の人のやうに、暴怒の神や、復讐の神を想像することが出来なかつた。迷執の人ならば、審判や刑罰のことしか考へぬ筈であるのに、唯寛容と慈惠とばかりを眺めてゐた。彼女は時々斯ういふことを言つた。神がもし吾儕に對して眞に平等であるならば、何も上帝の審判といふことは要らぬ道理だ。然ういふことは、吾儕を良き人にするために必要な物を與へず置いて、そして神の授けたより以上の物を要求することに當るからである。悪彼女の一番異つた考は、地獄を信じないで、煉獄を信じ切つてゐたことである。悪人は地獄に墮ちるものと宣告して、了ふことも出来ず、また善に遷つて了ふ迄は、善人と一緒に置くことも出来ず、どうして可いか解らぬといふ彼女の心から、煉獄へ歸著することになつたのであらう。何にしる、現世でも來世でも、到るところ厄介を極めるものは、悪人といふやつだ。

もう一つ彼女の異つた意見。既に話したとほりて、所謂歸罪説も、贖罪説も、此の主義のためにめちやめちやになり、従つて、一般に認められた基督教の基礎が搖ぎ

1736(25)

出して、少くとも加特力教とは兩立する事がむづかしくなつたことは明かであらう。それでも彼女は加特力教の信者であつた。然うてなくてもそれに違ひないと主張してゐたことは事實である。彼女は聖書の講義が、文字に拘泥し過ぎて、徹底しないところが多いと思つてゐた。聖書中に窮なき刑罰といふことがあるのは、あれは大袈裟に修飾を加へて言つたものだ。基督の死は、眞に貴き愛を表示するもので、これによつて、神を愛せよ爾曹互ひに相愛せよといふことを人人に教へようといふ意だと、然う彼女は考へてゐた。一言でいへば、自分の信ずる宗教に熱き彼女は、其の教に關したすべての宗旨宣言書に服した。けれども、個個の信條に就いて論議を闘はず日になると、自己の信ずる教會の教義に對しても、随分反對の意見を樹てることがあつた。其の際には、眞率な心から、僞らず飾らぬ言葉で論を行ふから、却つて駄辯を弄する者よりも効果が多かつた。聽悔僧も是がためには、尠からず惱まされた。彼女は何物をも裏みかくすといふことをしなかつたからであらう。彼女が言ふには、

「わたしは加特力教のよい信者で、また永久によい信者たることを誓ひます。わ

1736(25)

たしは自分の全心の力でもつて、わが聖母教會の決議を守つて居ります。私は信仰の主ではありません、わが意志の主です。斯う申す私の言葉に僞りはありません。眞實然う信じてゐるといふことを誓ひます。この上貴僧は私に對して、何を望みなさることが有りますか？」

斯ういつた調子であつた。

縦しんば世に基督教道徳といふものが無いにしても、彼女の性格がそれに適應するやうに出來てゐる限り、克く其を踐んだことであらうと私は疑はぬ。彼女はどんな事を要求されても、屹度果したのみならず、それを迫られぬ時でも、同じやうに果した。無關係な事にも、喜んで服従した。肉食をして不可ないといふことなら、徒らな謹慎の心からでなく、神に對する誠から小齋することを苦にしなかつた。然し斯ういふ道徳は、タヴェルの説に従つたのであつた。むしろ、それが宗教と矛盾するものでないといふことに極め込んでゐた。て彼女は一日の中に、二十人の愛人に情をかけると假定しても、それでも彼女の良心には些しの疚しさもなかつた。欲情よりも以上に躊躇を感ずることもなかつたであらう。或る偏信家等の

1736(25)

中には、是よりもつと狐疑的でない者が随分あることを私は知つてゐる。がその異なる點は、彼等のは欲情に誘はれるのであり、彼女のは、唯その僻説に謬られるといふことである。感動を興へるやうな、若しくは模範ともすべき談話の間に、彼女は此の問題へ落ちて行くことがあつても、決して様子を變へることもなければ、言葉の調子を狂はせることもなく、また自分の意見と撞著してゐるなぞと感ずることさへ無いらしい。話の都合で言ひ止すことはあつても、復た其處へ戻つた時は始めと同じ様に、靜かに其の話を續けて行つた。斯うして話を途切らすことは、世間體を兼ねて差し控へるだけの事で、物の見える人ならば、その事柄次第に、解釋を入れても、適用を試みても、除外を拵へても、決して神を瀆す虞はないといふことを、飽くまで彼女は信じてゐた。此の點に就いては私の意見とは大分の差がある。併し、自分はそれを争つて見る氣は更になかつた。然ういふ事に口を出すのは、自分の位置から言つて、ます／＼器量を墜す譯になるからであつた。それを敢へてした所で、自分は除外者なのだから、唯他人の爲に説を樹てて見るに過ぎない道理だ。持説の妄用、それが彼女にあるばかりでなく、一旦信じた事を變へるやう

1736(25)

な女でないことも私は克く知つてゐる。私のために除外を要求することは、やがて彼女の可好な人皆のために除外を拵へるやうなものといふことも思つて見た。とにかく偶然此處で、他人に對する輕率といふことに筆が向つて行つた。けれども、その輕率は、彼女の行爲を動かす程の力もなく、此の時分は殊に全くその形迹すらなかつた。いづれにしても、彼女の主義は、明かに話さうといふ約束をしたのだから、私は忘れないでゐる。話は復私の上へ来る。

死とそれに伴ふ畏怖から自分を慰め得られる凡ての教訓を彼女に見出したので、其處に信仰の源をたづねた。私は今までよりも、更に強く彼女に愛著した。將に私を見離さうとした全生命を、彼女に渡して、了ひたいと望んだくらゐであつた。斯う愛著の度を深くしたと、生命が旦夕に迫つてゐるといふ暗示を得たことと、未來の運命の憂ふるに足りぬものだといふことと、其處から一つの習慣的な、極めて安靜な楽しい境涯が形られた。種種な恐怖や種種な希望に對する一切の情を、し鎮めて、僅かに残つた數日の時間をば、氣ものんびりと心ゆたかに樂む事が出來た。まだ加之に此の短い殘生を一層樂しくした事が一つある。それは自分

に出来得られる限りの娯樂を彼女に與へて、それに依つて田園の生活を楽しいものに思はせようといふ計畫であつた。花園や、牧場や、鳩や、牝牛などを、彼女にも愛させようと思つて、みんな私が自分でそれを弄つて見せた。すると、こればかりの爲事でも平和を破らずに適度な氣晴しになつたものか、牛乳やいろいろな治療法よりも數倍の效驗があつて、哀むべき私の身體の諸器官が、どうやら回復されさうにさへ見えて來た。

葡萄や果實の收穫の中に、此の年の末も楽しく過ぎた。素直な田舎人の中に取りがこまれて、日に日に質素な田園の暮らしを味深い者と思ふやうになつて來た。冬が近づくのを見て、この上もなく可恨しく思つた。といふは、その冬打ち連れてまた市へ歸らねばならなかつたからで。その時の有様は、追放に處せられた罪囚のやうであつた。中にも私は、來年の春を再び見ることゝ愾はぬのではないかと思つて、このシアルメットに對して永き訣別の辭を告げずにはゐられなかつた。地面にも樹木にも、接吻せずにはゐられなかつた。一歩づづ此地を離れて行くうちに、幾度も幾度も、あとを見返らずに進むことが出来なかつた。

1736(25)

1736(25)

最早餘程の前に、生徒たちは謝つて了つたし、都會の娯樂にも興味を失つてゐたので、私は滅多に外出をしなかつた。話相手は母と、その外にはサロモン Salomon 君ぐらゐのものであつた。これは近頃になつて、母や私を診察してくれた醫者で、正直な、細慮のある人で、宇宙の法則などといふことに就いて、能く話をした。此の人の面白い、利益になる會話は、その處方よりも一層私にとつて効果があつた。莫迦しい、下らない雜談の仲間入りには、いつも閉口し切つたけれど、何か有益なしんみりとした話になると、嬉しくて嬉しくて、傍を離れるに忍びなかつた。サロモン君の談話には全く牽き附けられた。若し他日精神の惱みを取り去られる折があつたら、ああいふ高貴な知識が得たいものなど、といふ將來のことまで想ひやるやうになつて了つた。彼に對する興味から延いて、その人の論ずる問題までが、注意を集めさせずにゐなかつた。彼の説を理解する上に、一番参考になりさうな書物をまたまた引つ張り出して來た。科學と信仰とを併せて論じたやうな書物が、一番面白かつた。中にもオラトワアルや、ポオル・ロアヤアル Port-Royal のそれなどが然うであつた譯者云。オラトワアルは、詳しくは Congrégation de l'Oratoire と

ふ。高僧の教社。一五六四年羅馬に設立されて、後に佛蘭西に移された。この教社の力で、説教家、教師、學者などの有名な人が、澤山佛蘭西に現はれるやうになつた。ボオル・ロアヤアルは巴里の近傍に在るシイトオ・Oleair 派の僧院。第十三世紀の初に設立され、一七〇九年に廢されたが、以前は、學校の本場、學藝の中心として有名であつた。此處で諸學者が集つて、貴重な書物を編纂した。其の中に、Grammaire de Port-Royal, Logique de Port-Royal などがある。斯うした書物を讀むといふよりは、獨んで喰つたやうなものである。神父ラミイ Tamy の著書「科學講話 Entretiens sur les sciences」といふのが一部私の手に這入つた。これは諸種の科學書に對する序論と言つたやうなものであつた。百遍も繰りかへしくりかへし讀んで、それを自分の手引きにする積りであつた。て到頭私は、現在の心身の狀態であるにも拘らず、否むしろ然ういふ狀態であつたがために、抵抗しがたい力が出て、段段深く勉強好きになつて行くやうに思つた。そして毎日、今日は終焉の日か、今日がかと思ひめぐらしつ、熱心に勉強してゐた有様は、自分は決して死ぬやうなことはないと思つてゐる者のごとくであつた。これが私に害を爲したかと思はれるが、却つ

1736(25)

1736(25)

て利益によかつたと思つてゐる。精神の上にはばかりでなく、身體に取つても然うであつた。何故と言へば、勉強は、もとより好きな道だから、面白くて堪らず、病氣のことなどは忘れて了つて、些とも苦にはならなかつたからである。けれども、これに病氣が全癒するなどは、もとより思ひも寄らぬことであつた。唯劇しい苦痛だけは忘れた。身體の衰弱も、睡眠の困難も、體軀を動かすかはりに頭を使ふやうになつたことも、徐徐に、且不斷に體格の敗類して行くことも、習慣になれば一向平氣なもので、これは皆避くべからざる順序で、死が來なければ到底痊癒する氣づかひのないものだ、と多寡を括つてゐた。

斯う思ひ定めて見ると、生命のために徒らに悶えさわぐことは要らなくなつた。今までの心にもない無理強ひな醫療に煩はされることも要らなくなつた。サロモン君も藥が無効になつたと知つて、嫌なものを無理に侷めることもしなくなつた。ただ母の心を落ちつかせるために、患者の氣やすめにもなり、醫師として信用を維ぐために、當りさはりのないやうな處方だけで満足してゐた。餘り攝生を重んじなくなつて、復た酒を飲みはじめた。體力の許す範圍において、すべて健康體

1736(25)

の人のするやうな事許りするやうになつたが、唯あまり過度に落ちないやうに注意した。外出して知人達に遇ひに行くやうにもなつた。コンジエ氏との交際がとりわけ愉快であつた。とにかく息を引き取るまで勉強を廢めぬといふことが貴い事と思はれたのか、或は心の奥底に、生命に對する微かな希望がいくらか潜んでゐたのか、それは解らぬが、何しろ最早死期が近くなつてゐることが明かであるのに、學問の興味が鈍くなるどころではなくて、はげしく鼓舞された。そして大急ぎで知識の收得に取りかかつた。これは未來世へ行けば、自分の持つて行く知識の外には、何物も學ぶことが出來ぬものと信じたからであつた。學者たちのよく出入したブウシアル Bouhard といふ本屋の店へ一番よく行つた。その中再びめぐり遇ふことも出來まいと思つた春も近づいて來たので、若し幸にして、もう一度シアルメットへ還られた時の用意にと思つて、幾冊かの書物を揃へた。

幸にもこの豫期が中つて心のかぎり享樂した。初春の嫩芽を眺めた時の悦びは、口では言はれぬ。ふたたび春に出遇つた私は、天國に復活した者のやうであつた。地上の雪のまだ解けかねてゐるをもかまはず、牢獄にも倅しい住家を抜け出

1736(25)

して、鶯の初音を聴きに、いきせきシアルメットへ飛んで來た。もう私は死のことなどを考へてゐない。實際この時から寂しい田舎にゐて重病に罹つたといふことは、一度もなかつた。それは随分苦痛を感ずることはあつたけれども、寢床へ打つ僵れるやうなことはさらになかつた。をりをり病氣になつたと思つた時には、側の人に向つて、斯ういふことを言つた。

「若し私が今にも死にさうになつたら、どうか柵の木の蔭へ運び出して下さい。然うすれば屹度快くなるにちがひないから。」

身體は弱つてゐながら、力相應の野良爲事を始めた。自分一人て畑の手入れがし兼ねるのを、非常に焦れた。鋤を取つて五六遍振り廻はすと、もう息切れがして汗はだくだく流れ出す。體軀を屈めると例の動悸が劇しくなつて來て、どつどつと血液が頭へ込みあがる。どうしてもすぐ眞直に立ちなほさなければならぬ。で、餘り骨の折れない爲事と思つて、鳩舎を造りにかかつた。是がまた言はれぬ樂みて、此處へ來れば數時間一生懸命に働くのに、些とても疲れるやうなことはなかつた。鳩は臆病な禽で馴らすのに骨が折れる。それをすつかり懐けて了ふと、

行く先ごとへ跟いて来て何時でも私の手に捉まるやうになつた。庭へ出て煙へ出ても、屹度二三羽は、腕か頭に載せてゐないことはなかつた。それほど可愛がつてゐたものをどうしたとか急に私は煩くなつて、彼等とは疎疎しくなつて了つた。動物の中でも殊に怖ろしい野生のものを手馴らすことについて、私は格段な興味を有つてゐた。確かな信用を彼等に吹き込むのが面白くて堪らなかつた。自分が自由に彼等から愛されることを望んだのである。

幾冊かの書物を持つて来たことは前に言つた通りであるが、その書物を讀んで利益よりは、疲勞を求めるやうな事になつた。事物の謬つた考から、私は斯ういふことを思つた。一冊の本を讀み破るためには、すべての豫備知識が必要だと。これは其の本の著者と言つても、然う博く知つてゐる者でなく、必要な場合に蒞んで始めて、他の諸書を参考するものだといふことを知らなかつたからであつた。そんな愚かな考から一行ごと（まづ）に確（はた）と行き止まつて彼の本、この本と、しきりに獵つたものであつた。て時とすると讀みかけてゐる本の十頁までも來ぬ前に、参考の圖書館を幾つ獵り竭したかも知れぬくらゐであつた。それでも尙且（やゝ）並外（まは）れた讀書

1736(25)

法のお蔭で、どのくらゐ無駄な時間を費したか知れぬ。頭の中はごちやごちやになつて、何を看たのやら、何を覺えたのやらも解らぬ始末になつた。然しよい鹽梅に、這麼道を歩いてゐては、甚麼迷宮へ牽かれて行くかも知れぬと氣がついて、あまり深入りせぬ前に本道へ引き返して來た。

如何なる學科にしても、眞にそれに興味を有つ人の、まづ第一に感ずることは、その研究を進めて行く間に、各學科の間に密接な關係があつて、そのために、相互に引き合ひ助け合ひして、相俟つて發明することが出来るもので、他の幫助を借りずに、單獨に一科の研究を全うしようといふことは望まれないといふことである。固より人智に限りあつて、全般に通ずることはむづかしくもあり、又何か一科を主眼と立てて研究するのが當然だが、それでも若し一切の補助學科を棄てて顧みなかつたならば、主眼と立てたものまでも、不明で終はつて了ふ。私の採つた方法は、それ自身には面白くもあり、有益でもあるが、唯そのやり方を改良せねばならぬと氣づいた。て私は百科全書（百科全書）に便することにして、それを各科に分解し始めた。けれどもそれと反對に各科を別別に取り扱つて、それ等が互に出會ふところまで、一つ一

1736(25)

1736(25)

つに追究して行かねばならぬものだといふことを知つた。斯うして所謂總合法といふ所へ這入つて行つたが、正しい途を歩んでゐるといふ信念を持つことが出来た。瞑想は知識の足らぬ所を補ひ、常識的の反省は、私を正しい方へ導いて行つて、生きるにしても死ぬにしても、時間を浪費させなかつた。二十五歳になるまで、何一つ學んだことのない者が、急に何も彼も覺えて了ふといふには、出来る限り時間を有要な方へ用ひねばならなかつた。運命か、死か、何時此の熱心を奪ひに来るか知らぬけれど、どうしても、諸學科の概念だけは擱んで、同時に自分の氣質も考へ合せて見て、何を學ぶのが一番自分に適當してゐるかを、われとわが判断したいものだ、さういふ希望を抱いた。

これを實行して行く中に、また思ひ掛けぬ利益を得た。それは時間の大部分を有効に使用することが出来た事である。全體私は學問をする柄ではなかつたかして、同じ問題に向つて少し長く注意してゐると、直に疲れて来る。活潑な精神は、物の三十分と續かぬ。殊に他人の思想を讀む時などは、特に其が著しい。然ういふ時には、自分の考が先立つて、それに吸ひ込まれる事が間々あつたり、それが可な

1736(25)

りな成功を収める本にもなることがあつたからだ。或る書物には十分の注意を拂はねばならぬと覺悟しながらも、未だ幾頁も讀まぬ中に、もう魂は藻抜けて、何處かの空へ飛んで行つて了つた。頑固に構へてゐても、それは徒らに自分を疲らせるばかりであつた。忽ち眩暈がして何物も眼に這入らなくなる。がしかし種類の異つた事柄でさへあれば、縦し續け様に現れて來ようとも、一は他を緩和する譯になつて、真中で休まないでも、樂に研究して行くことが出来た。此の發見が、自分の研究上に利益となつたことは夥しい。適度に此の法を交へ用ひると、終日勉強してゐても、少しも倦怠を感ずることはなかつた。野良爲事や、家事の手傳も、注意を放散させるに必要であつたことは事實である。しかし、向學心があひあひ旺んになつて來るにつれて、同時に二種の爲事を始めて、研究の機會を作り出さうとしたが、それは雙方の爲事に對して餘り利益にならぬといふことは、夢にも知らなかつた。

細い話は澤山ある。いづれも私自身にとつては面白い物だが、讀者には少からぬ迷惑の種となることであらう。然う思つて精精注意して、あまり數數は話さぬ

1736(25)

やうにしてゐるが、恐らくこの事は、私の口から斯う言はないと、讀者の方では氣がつくまい。その一つを言へば、茲に楽しい楽しい追憶を持つてゐる。それは出来るだけ愉快に出来るだけ利益になるやうに、いろ／＼な試みをして時間を送つたことである。斯うして隠遁生活をしてゐる間は、始終病氣でふらふらしてゐるに拘らず、私の生涯で、一番怠惰でなく、一番疲勞しない時であつたといふことが言ひ得られる。二月三月は、このやうにして自分の天稟の性向を發見する間に過ぎて行つた。その間の樂しかつたことをいへば、時は年中の最美な季節に、春の神の宮居とても言へさうな土地で、斯くも貴い生の魅力、自由で柔らかな社會——若し斯くも完全な結びつきに社會といふ名を下すことが出来るなら——その魅力ならびに、自分の學ばうとしてゐる學藝の魅力をば、飽かず享受した。私は最早その學藝を自分の所有にして、了つたやうに感じた。所有したと感じたばかりではない、研究の快樂は私の幸福の大部分を占めてゐたのだから、それよりも以上のものであつたかも知れぬ。

斯うした試みは、自分には無限の慰藉を供給したものだ、話をするにしては單

1736(25)

純なものばかりだから、まづそれは抜くとしよう。繰り返して言ふが、眞の幸福は口で言へるものでない。唯然う感ずるばかりである。そして、口で言はれぬだけそれだけ感じの深さが増るのである。何爲然うかといふと、眞の幸福は、多くの事柄が集まつて出来るものでなく、唯然ういふ一定不變の一つの状態の繼續に外ならぬからである。私には物を繰り返して言ふ癖がある。然し、もし自分の心に刺撃を受ける度ごとに、同じことを繰り返してゐたならば、今よりまだまだ烈しく繰り返すことになつたかも知れぬ。さしも變幻を極めた私の生活の方法も、到頭此の時からは凡そ順序立つやうになつた。次に話すことが、毎日の課業の概略である。

毎朝日の出前に床を離れた。それから近所の果樹園を通つて、眺望に富んだ村徑へ出る。この村徑は葡萄畑の上にあつて、シアンペリイの方へつづいてゐる。此處を私は散歩しながら祈禱をする。それは決して口ささばかりの徒な念誦ではなく、眞に敬虔な心の態度を以つて、今しも眼の下に展げられたその可憐な天然の美の創造者を讃仰するのであつた。室内の祈禱なら一向氣乗りはしない。室の

1736(25)

壁だのごたごたと人間の拵へたいろいろの物が、神と私との間を邪魔するやうに思はれてならぬ。自然の拵へた物の中で默想するのが好きだ。その時に限つて、私の清い心はちのづと神の方へ靡き寄るやうに思ふ。私の祈禱は、たしかに清浄であつた。それだけまた聽かれる程の價値もあつた。私の祈願したのは、自身のため、また此の胸から離れることの出来ない彼女のために、一個の無邪氣な、靜穩な生涯を作つて、苦痛邪惡窮困から遠ざかるやう、そして義人として死なれるやう、また來世に於いても、義人としての運命が得られるやう、と唯それだけであつた。とは言へ斯ういふことは祈願したといふよりも、嘆美又は、觀照したと言つた方が正しいかも知れぬといふのは、眞に善き物の施濟者たる神の手から吾儕に必要な物を求めるには、ただ祈るよりも、それに相應するやうにすれば可い、といふことを、私は知つてゐたからである。さてわざ／＼紆廻をして歸つて來るみちみちも、自分を取巻いてゐる美しい田舎の風物を飽くことも知らず、夢見るやうに眺め入つた。眼に疲れを感じず、心に傷みをおぼえないものは、唯この野の景色ばかりであつた。家に近づくまゝに、こちらの方から、もう母が起きたかと様子を考へて、若し窓の扉

1736(25)

が開いてゐれば、喜び勇んで家へ走つて來る。若し未だ窓が開いてゐない時には、窺と庭の方へ廻つて、起きて出て來るのを待つてゐる。その間に前夜習つた所を復習したり、庭いぢりなどをしてゐた。その内に窓の扉が開くと、早速駆け附けてベッドの上に居る母に抱きついた。が、時時未だ昏昏として、目の寤めきらぬ時もある。それとても潔白な柔しい抱擁であつた。その無邪氣さは、官能の慾にも勝る程魅力のあることを感ぜさせるやうなものであつた。

大抵の時は、ミルク入りの珈琲を啜つて朝飯を済ました。これが一日中一番平和な時で、二人が物語をするにも、心の置ける所はちつとも無かつた。此の會食は多く長時間に涉つたもので、それからは朝飯といふものを大層愉快なものと思ふやうになつた。佛蘭西式の朝食では、人人は各自に自分の部屋で勝手にむしやむしや喫るか、然もなければ大抵至て朝飯を食はないかであるが、それよりも英吉利や瑞西の様に、いろんな人人が集まつて來て、眞箇に食事をすると、言つた風の朝食の方が甚だ面白いか知れぬと思ふ。一二時間を談話で費して、それから私は晝食頃まで讀書をする。まづ哲學書類を讀み始めた。中に「ポオル・ロアヤアルの

1736(25)

論理學 Logique de Port-Royal, ロックの論文集、マアブルランシ、Malebranche ライブ
ニ、Leibnitz デカルト Descartes などが有つた。私は是等の論者達が相互ひに永
解決の出来ない矛盾に立脚してゐる事に氣が注いで、どうかしてその矛盾の調和
を圖りたいといふやうな、無謀な計畫を立つた。それがために恐ろしく疲れて了
つて、時間を失つたことも夥しかつた。頭の中は紛糾つて、些とも先へ進まなかつ
た。てまた這麼研究法をも棄ててもつとよい方法を取つた。固より學問の能力
の薄い自分ではあつたが、それがために進歩の跡が著しく見えて來た。それは或
る一人の著書を読む場合に、其の説の是非に拘らず、決して自分の意見を持ち出し
たり、別の書物と比較したり、また論争したりなどしないで、何がなしに、大尾まで讀
み通すといふ癖をつけたことであつた。私は斯う思つた。「まあ始めの中は、嘘に
しろ、眞にしろ、正直に、いろんな學說の間屋になる氣でゐれば、其の中には頭が段々
進んで來て、比較も選擇も自由に出来るやうになるだらう」と。此の研究法も決し
て樂ではないが、研究の目的に對しては成功した。斯うして數年の間は、他人の説
ばかりを研究して、その間に毫しも省察や推論を交へなかつたが、最早十分の材料

1736(25)

が蒐まつたやうに感じて、今は他の幫助を借りずとも、自分ひとりて考察すること
が出来さうになつた。旅行の時や、爲事て忙しい時などに、書物を參考してゐる暇
はなくとも、今までに讀み溜めた材料を憶ひ出しては、比較を試みたり、種々な説を
推理の權に懸けてみたり、時には自分の先生を批判してみたりするのが、却つて樂
みになつた。大分年月を経てから、私は法律に關した爲事をするやうになつたが
そのために少しでも生氣を失ふといふやうなことはなかつた。それに自己の意
見を發表することがあつても、他は私をば下劣な使徒だ、大家の聲色ばかり使つて
ゐるなどと言つて貶すやうなこともなかつた。

續いて幾何學の初歩を學んだ。薄弱な記憶力に鞭つて、同じ部分を何遍でも、斷
えず繰り返し繰り返して確り叩き込まうと決心してゐたから、餘り先へは進ま
なかつた。エウクリイデスの幾何は可厭であつた。この本は觀念の聯合よりも
寧ろ説明の連絡といふことに重きを置き過ぎてゐるからである。それよりも神
父ラミイの著書の方を擇んだ。ラミイは此の時から、私の好きな著者の一人とな
つた。今でも此の人の諸作には、多大の興味を有つてゐる。其の次に學んだのは

1736(25)

代數であつたが、矢張ラミイの本を基にした。大分進んで来てから、神父レイノオ Reynaud の "La Science du calcul", や同じ人の "Analyse démontrée", などをほんの一通り研究した。私は代數を幾何に應用することを、十分に理解するところまで行かなかつた。自分が何をしてゐるのかまるで夢中で、斯ういふ解法を試みるのを、面白く思はなかつた。代數式を使つて幾何の問題を證明するのは、何の事はない把手を廻して樂器を鳴らすやうなものだと思つてゐた。二項式の平方は、その各項の平方と、兩項の相乗の二倍から成り立つといふことを、始めて計算に依つて知つた時には、其の運算が正しかつたにも拘らず、圖を作つてみるまでは、どうもそれを眞と認めることが出来かねた。無名量を取扱ふ場合ならば、代數に對して強ち興味を有たなかつたわけではないが、廣袤に應用された場合には、どうしても線の上でその解法を試して見ないと、全く理解が出来なかつたのだ。

代數の次には羅句語が來た。これは私の學科の中で、一番困難なもので、どんなにしても目ざましい進歩が見えなかつた。最初はボオル・ロアヤアルの羅句語研究法に従つたが、何の効果もなかつた。そのオストロゴオタ Ostrogoljat 昔の伊太利

1736(25)

亞の住民の詩と來ては、胸に痞へるほどのもので、耳へなど這入らなかつた。文法上の面倒な規則責めにされて、惘然となつたまま、後の規則を諳記してゐる中、前のは悉皆忘れて了つてゐた。語學の研究などといふものは、記憶力の乏しい人間のすべき事でない。でも頑固にそれを爲すべからうとしたのは、たゞ記憶力そのものを練磨しようといふ目的からであつたのだ。然し、それも遂には棄てて了はねばならぬやうになつた。羅句文の組立がやゝ解るやうになつて、辭書と類引ならば、易しい書物が讀めようかといふくらゐまでになつた。此の方法で進んで、成功が少くなかつた。翻譯も始めた。が、それは書き出すのではなくて、胸の中でするのであつたが、これも續けてしてみた。時間と練習との蔭で、羅句作家のものが可なり流暢に讀めるやうになつたけれど、とても羅句語で、話すの書くのといふ段々では行かなかつた。それがため、後日或る機會から文學者連の仲間に這入つた時にも、大抵な困り方ではなかつた。斯ういふ研究の爲方から起つたもう一つの困難は、韻律のことに暗かつたことだ。其よりも作詩法が、まるで解らなかつたことだ。それでも私は此の國語の韻文や散文にあらはれる諧調の美を味ひたいと思つて、

1736(25)

勉強はした。然し教師に就かないでは、殆んど無効にをはるだらうといふことを覺悟した。造句法の中で、一番易しい六歩句の構造を覚えてからは、非常な努力を費してあらゆるウエルギリウスの詩の律格を調べ、それに歩と長短とを標つけてみた。若し或る一つの音歩の長短が疑はしいときには、すぐウエルギリウスを引き出して来て対照するやうにした。詩には往往破格を許容される習ひであるから、それを知らずに拘泥してゐた私は、少からず誤りを生じたことは言ふまでもない。獨學には利益な點も多少あることは勿論であるが、同時に甚だしい不便と言ふに言はれぬ苦みとがあることも確かである。私は誰よりも一層深くこの理を感じた。

午前に讀書を歇めて、もし未だ晝食の用意が出来てゐなければ、それを待つ間、親友の鳩を訪問するか、或は庭爲事をしに出た。用意が出来て呼ばれると、いそぐと走つて行く。無論食欲は強い。私は甚だに加減が悪くても、食思を缺いたといふことは、滅多になかつた。愉快に食事をした。母が食べるのを待つ間に、自分達の爲事に就いて談を交へた。一週間に二三度天氣の晴れた日には、家の背後の四

1736(25)

阿に行つた。涼しげな木蔭の多い私が蔓草で裝飾をして置いたところであるが、此處へ来て珈琲を呑む。日盛りの時分には、その楽しさは格別であつた。此處で少時は、野菜や草花を見廻つたり、所帯のことについて談をしたりした。それが更に私達の平和を誘ふ因になつた。庭の片隅にも、う一つ私の家族があつた。それは蜜蜂であつた。私は大抵の場合、母も然うであつたが、この蜜蜂を見舞はぬといふことはなかつた。私は彼等の労働に限なき興味を感じた。彼等がその掠奪から歸つて來るときに、時々身動きもならぬほどの重荷を、辛うじて持ち込むのを見ては、獨りて微笑まれた。初めの間物珍しさに、亂暴なことをしたため、二三度螫されたこともあつたが、其の後はどうも傍へ近寄つて行つても、何の事もなくなつた。巢の中には一杯に蜂が羣つて、今にも總勢で飛び出さうとして、私をその中に取り圍み、手や顔の上へ集ることがあつても、些とも害は受けなかつた。總じて動物は人間を疑ぐるもの、それが彼等の天性なのであらう。けれども一旦その人間に害心がないといふことを察して、了へば、却つて信用を増すやうになる。蠻人でもなければ、自分たちの信用に負くことはあるまいといふことになる。

1736(25)

それから復讀書にかかると。然し午後の課業は、課業だ勉強だと言ふよりも、保養か娛樂と言つてよいものであつた。晝食後室内の勉強はどうしても堪へられなかつた。日中が殊に苦しかつた。でも何か知らざる。が、別に束縛もなく、順序も立てず、唯氣まかせに讀書する。一番規則正しく勉強したのは歴史と地理で、この二科はそんなに注意力を要さないから、弱い記憶でも、随分よくまぼえられた。神父ベトオ Pelerin の書物を讀まうと思つて、年代學の暗黒の中に没した事がある。しかし其の議論の部分になると、歸著點が解らないので、つくづく可厭になつて、それから又、時間の精確な測定や、諸天體の運動、といふやうなことに趣味を持つやうになつた。相當な機械さへあつたら、星學がやりたかつたのだが、已むを得ず書物中から得た僅かな知識と、自分の望遠鏡で觀察した少しばかりの粗雑な事實を基礎にして、それ諸星の雜とした位置ぐらゐを知るだけで満足した。私の近視では、とても肉眼で正しく諸星を觀測しようといふことは無理であつた。此の話で可笑しい實驗を試みたことを憶ひ出す。星座を研究する積りで、平面天體圖を買つて來て、それを枠へ貼り着けた。空の澄み渡つた夜ごとに庭へ出て、此の枠を自

1736(25)

分の背と同じ高さの、四本の杵の上に載せて、天體圖はひつくり返して置いた。それから風火の消えぬやうに、四本の杵の真中へ、木製の手桶を入れて、その中へ蠟燭を立てて置いた。替りばんこに、眼では圖面を視、望遠鏡では天を眺めて、星を知り、星座を見分ける練習をした。前にも話した通り、此のノアレエ氏の庭は、高臺にあつたから、その上してゐる事は、みんな下の街道からよく見えた。或る晩、夜更けて百姓たちが、その下道を通りかかると、私は異様な準備をして、いつもの様に觀測をしてゐる。百姓達は天體圖に映つてゐる火の光を眺めたが、蠟燭が桶の中に隠れてゐるから、火の出どころが解らないので、變だと思つてゐると、四本の杵がある、異體の知れぬ符牒を描きつけた大きな圖面もある、望遠鏡が彼方此方と動き廻る。そんなことが、まるで妖術を使つてゐるやうにしか見えないので、みんな吃驚して了つた。私の風體がまた彼等の驚きを鎮めることの出來ぬやうなものであつた。頭には寢帽を冠つたその上へ、もう一つ兩耳の垂れた帽を戴き、母のすすめに従つて、彼女が仕立ててくれた短衣を羽織つてゐたので、彼等の眼には、紛れもない一個の魔法使ひと見えた。時刻も丁度眞夜中だから、今から此處でサッバア(三)

一三頁の注が始まるのであらう。然う彼等は信じたらしい。此の有様を詳しく見届ける氣も起らなかつたか、そのまゝ魂も銷えるやうに逃げ散つて、その狀況を告げ知らせるために、近所中を喚いて廻つた。すると風説は忽ちそこら一面に擴がつて翌朝になると誰も彼も、ノアレエさんの裏庭で、昨晚サーバアが開かれたさうな、と言はぬものはなかつた。此の風説の結果が甚麼事になつたか、知らぬが、その晩にあの妖術を實見した百姓の一人が、二人のエヌイタ僧の處へ此の顛末を申し出た事だけは解つた。此の僧たちはよく家へ出這入りをした人たちであつたが、譯がわからないから、ともかくも安心するやうにと慰めて歸した。二人は私達にその事を話した。私は斯ういふ次第でと譯を言つて聞かせたら、大笑ひになつた。けれども、無暗に人を嚇かすのも能てあるまいと思つて、それから後は、夜分の觀測には燭光を用ひないで、天體圖は家へ歸つて看ることにした。「山より」の中にある「ネチア魔術を讀んだ人達は、私が久しく魔法つかひとして、名譽を博したといふことを思ひ合はされるであらう。

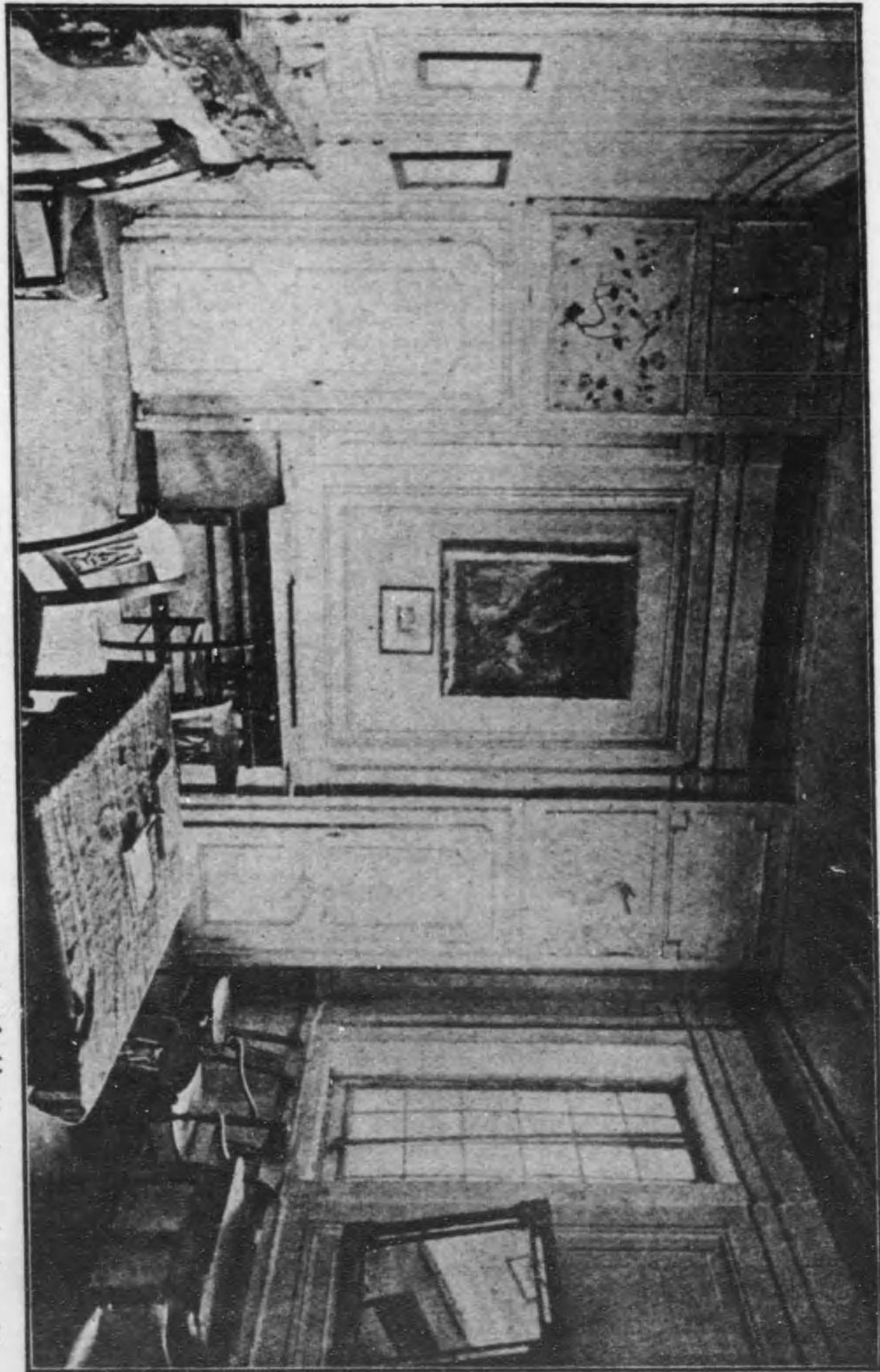
以上話したやうな事が野良爲事以外、シャルメットの日常の課業であつた。て

も何と言つても、おもなものは矢張野良爲事であつた。精力に相應するだけは、百姓の眞似もした。然し身體の衰弱が甚しいので、働きたい意志は十分あつても、長くは堪へられなかつた。それに一どきに二つの爲事をしようといふ考があつたから、孰方も眞箇に爲果せることは出来なかつた。私は無理無體に記憶を練らうと腕いた。熱心に澤山な事柄を諸記しようとした。何處へ行くにも本を放したことがなく、甚い骨折を忍んで、外の爲事の間にも讀んだり考へたりした。這麼に始終無駄骨折を續けてゐて、それでよく莫迦にもならなかつたものだと思ふと、不思議なくらゐである。ウエルギリウスの牧歌を讀み返したのだけでも、二十遍ではきくまい。それに一語も記えてゐない。鳩舎でも、庭でも、果樹園でも、葡萄畑でも、行くさき毎に書物を提げて行つたために、澤山な書物を失したり、壞したりした。外の爲事をする間に、書物を樹の下や、籬根へうつちやつて置くと、大抵それを持つて歸ることを忘れて了ふ。時とすると、二週間も経つてから、それを見出すことがあると、何時の間にかばらばらに腐れてゐたり、蟻や蝸牛の餌食になつてゐたりした。學科に對するこのやうな熱衷から、一種の躁狂が出来た。私はまるで痴鈍の

やうになつて、何時ともなく口の中で、習つた事や語句などを、嘖語のやうに嘖嘖と
 獨言に言つてゐた。

ポオル・ロアヤアルや、オラトワアルで編纂された書物を、一番數多く讀んだため
 に、半分私はジャンセニスト化して、了つて、如何に信を堅くしてゐても、その無情な教
 義に時時脅かされた。今までは地獄といふものを少しも怖れなかつたに、次第に
 可怖しい氣がし出して來て、心の和氣がかき亂された。それゆゑ、母が私を沈著け
 るやうにしてくれなかつたら、此の可怖しい教義のために、私は全く動揺して、了つ
 たかも知れぬ。私の聽悔僧は母のそれと同じ人であつた。この人も母が力を協
 して私の心を安めてくれた。その人はエスイタ派の僧で、神父エメエ Hemetと言
 つた。性質の善い、聰明な老人であつたが、此の人を追想すれば、尊敬せずにはゐられ
 ぬ。エスイタ僧ではあつたが、子供を見るやうに天真爛漫な所があつた。彼の道
 徳は寛大を通り越して、放縱に近いものであつた。丁度私がジャンセニスムで情な
 い印象を受けてゐたのを打ち消すには、都合がよかつた。斯うした人のよい爺
 さんと、もう一人その友人の神父コピエ Copier とが、老人には氣の毒なほど、道が遠

1736(25)



室客の人夫スソレヲるけ於にトツメルマシ

い上に平坦でないも構はず、わざわざシアルメントまで訪ねて来てくれた。其の度に私が恩恵を得たことは勿論である。——吁神よ。願はくは此二人の靈の前にその恩恵を返し給はむことを！ 當時二人共甚く齡をとつてゐたから、最早今日まで生存へてゐようとは想像出来ぬゆゑに。——這箇からもシアンペリイへ出掛け、ては、二人を訪問して段段親しくなつた。彼等の書庫は、私の利益の源になつた。この幸多き時期の記憶は、このエヌイタ僧の記憶と給み合つて、片方を懐愛しく思へば、片方も従つて懐愛まなければならぬやうになつてゐる。エヌイタの教義は、いつも何となく、險呑なやうに思はれたが、心から二人の僧を憎むといふやうなことは出来なかつた。

私の胸に起伏したやうな、極幼稚な思想を、外の人たちも経験することがあるか、何うか、私はそれを知りたくてならぬ。あの通り熱心に研究もし、此の上もない無邪氣な境涯に居て、そして傍の人人からは、連りに然ういふことはないと言つて慰められてゐるにもかかはらず、どうも私は彼の地獄といふものが消え入るやうに可怕しくてならなかつた。そこで自分で問答をする。「今自分はどういふ境遇に

1736(25)

居るのだらう？ 今死ねば果して地獄へ墮おされるのだらうか？」ジャンセニスムに随へば明かに地獄を肯定してゐる。然し自分の良心はこれに反對である。こんな風な心配をして、思想が波立つばかりだから、此の憂を打ち消さうと思つて、滑稽極まる摹ま似しをして見た。外の人が誰か那樣莫ま迦かげきつた摹ま似しをするのだつたら、私は狂人と見み做せして監禁して了つたかも知れぬくらゐのことであつた。或る時此の氣がかりな問題を考へ込みながら、我知らず樹の幹を目め蒐さけて石を投げつけてゐたところが例の鈍間どんまだからどの石もどの石も、皆狙ねらひが外それて中なからない。此の兒戲いごの間に、偶ぐと氣がついて、彼の平生の心配を打ち消すために、これこれこをこしてみようと思ひ立つた。て私は自分に、俺は今この石を、眞正面まじらめんのあの樹きへ中なかて見る。若し巧たくまく中なかれば救はれる前兆ぜんせうで、中なからなければ地獄へ行くんだ。」と獨言を言つた。斯すう前まへおきをして置いて、うち顛たふへる手に石を掴み、胸の動悸どうきを昂たかぶらせながら、樹の幹を目め蒐さけて投げつけた。幸なるかな、石は樹の眞中まじらのあたりへしたたか撞ぶ突つつて、戛が然ぜんと音を立てた。猾ずく考へて、大木のしかも餘程手近よぢにあるのを見定めて投なつたのだから、中なかるのは當然だつた。それからもう、自分は地獄へ行

1736(25)

く人でないと信じて疑はぬやうになつた。此の戯れを憶ひ出すにつけて、果して自分の身を笑つてよいのか、悲まねばならぬのか、何とも言へぬ。この私の痴ちけた所作所作を嗤わらふほどの聰明な人々は、自分たちの憂うれい事ことを得意になつてゐるのも可たからうけれど、萬望ばんぼう私わたしを悲あはれな奴やつだと言つて貶おとしさぬやうにして欲しい。私は心こゝろから自分の悲あはれな人間であることを、強く感じてゐるのだから。

信仰問題とは離れない是等の心配や、恐慌も決して永く續いたものではなかつた。大抵の場合には、心は至極安らかに、死期が近づいてゐるといふ考から受けた印象も、さほどに悲しくはなく、却つて平和のための疲勞つかれの方が深い悲しみを與へた。がそれとてもまた強ち其の中に楽しい情が含まつてゐないでもなかつた。私はこの節古ふせい紙屑かみくずの中から、當時の自箴みづかひのやうなものを見出したが、それに據つて見ると、肉も靈も、俱ともに未だ甚しく汚れない内に、死の前に自若じじやくとして立ち得る年齢で殞なれることの出来るのは、祝福すべき限りであるといふやうな意味のことが書いてあつた。何と立派な思想ではないか！ 生せいを厭いとふやうになつたのは、禍わざはひがそれに伴はむことを危惧おそしたからである。年を取つてから自分の上に覆おほつ冠かんさ

1736(25)

らうとする黒い運命の影が、その時分の目に見えるやうに思つたに違ひない。全く此の時ぐらゐる靈智に近づいた幸福な時はなかつた。過去に大なる悔恨もなく、未來の畏怖といふものも感じないで、感情の中心は、唯現在の歡樂に執着してばかりゐた。嚴肅な信仰家にも、多少とも強い欲望があつて、それで以つて差閫のない範圍まで、無邪な歡樂を享けようとするのが普通である。それに凡俗の輩が之を一種の罪惡でもあるかのやうに言ひ曲げるのは怪しからぬ。否、それは別に怪むべきことでない。彼等凡俗の輩みづからは、其の無邪な歡樂の感味に麻痺して了つてゐるために、他人がそれを享樂すると聞いては、妬ましさで堪へられないのであらう。私自身はその無邪な歡樂の味をよく知つてゐる。そしてこれを享樂しても、少しも良心の平和を紊すやうなことはない。まだ新しい私の心は、此の幼兒のやうな歡樂——今少し強く言へば、むしろ天使のやうな放縱の中に耽溺して了つた。これらの清澄な歡樂は、眞に樂園のそれにも比すべきものであつた。モンタニョール Montagnole の青草の上での晝食、四阿の晚餐、果實、葡萄の收穫、苧麻の皮を剥ぐために、田舎人とする夜綺爲事、すべてこんな事は、大饗宴よりも楽しかつた。

1736(25)

母もともにこれを喜んだ。寂しい野山の散歩には、更に數倍の魅力があつた。その時には、此の心が、限りもなく自由にうち開くからで。その中に特に際立つて記憶に残つてゐることが一つある。

それは母の名に縁ある聖路易節の日のことであつた。朝早く近所の會堂へ、カメル Carmel 教會の僧が來たので、其處で祈禱を済まして、唯二人きりで匆匆に出かけた。今までに未だ一度も行つたことのない、向う側の山手の方を歩いて見ようと私が言ひ出した。此の遠足が日一杯かかることは知れてゐるから、辨當の仕度は行つた先でするやうに、豫め材料を送つて置いた。母は肥滿してゐる方であつたが、歩くには甚く難儀もしなかつた。岡から岡を傳はり、林から林を抜けて、日向へ出たと思ふと、また樹蔭を歩いて、疲れては休み休みしながら行くうちに、時間のことなどは忘れて了つた。みちみち、二人の交情の親密なこと、われわれの運命の優しいことなどを話し合つて、すべてそれが破れぬやうの祈をも捧げた。——しかしこの祈は後に無駄になつた。すべての物は、みな今日の幸福に力を添へた。四五日雨の續いた揚句で、纖塵も立たず、小川の流れば漫漫としてゐる。清しい軟

1736(25)

風は徐かに木の葉を揺かし、空氣は鮮しく、地平線の上には一かげらの雲きれもない。碧空の澄み切つて物靜かなことは、丁度私の胸の中と同一であつた。晝食は或百姓家ですることになつた。其の家の人たちにも、分配して喰つて貰つた。彼等は心の底を傾けて、私達のために幸あれと祈つてくれた。噫、譬へやうもなく心の清いサツア人達だつた！ 食事が濟むと、大きな樹の蔭に這入つた。其處で珈琲を煎るために枯枝を掻き寄せてゐると、母は草叢で藥草を採集した。彼女のためにも思つて、私が途中で摘んだ草花の束を使つて、花の構造に就いて、いろ／＼な微妙な點を話してくれた。

面白かつた。どうやらこれに植物學といふものも、好きになりさうな様子であつたが、併しその時機はまだ來なかつた。私は餘りいろ／＼の研究に取りかかつて頭が纏つてゐなかつた。それに、此の時の心の中に、花や植物に對する注意を奪ふやうな考が起つて來た。この心の状態、此の口中私達の言つたり爲たりした總べての事が、又私の受けた種種な印象から、七八年も前に、アヌシイで經驗した白日夢のことが回想されて來た。この夢の話については、その條下を看て欲しい。(二)

1736(25)

二一頁。丁度今亦それと同じやうな状態を感じたので、甚く感動させられた。われ知らぬ涙がぼろぼろと零れた。餘りの感激に恍惚となつて、この可憐い友に鼻と取り絶つた。

「ああお母さん！ 今日と言ふ日は、久しい前から私に約束されてあつた日です。外にもう私は何も望むことはありません。お母さんの力で、私は幸福の絶頂へ來ました。萬望これがこの儘で崩れないやうに、私がこの感味を失はないかぎり、何時までも何時までも續いて行つて欲しいと思ふだけです。命のある間は何時までも……」

感情が込み上げて後が言はれなかつた。

斯様にして來る日も來る日も、幸福の中に過ぎて行つた。何物もこの幸福を破ることが出來ないと知つては、尙一層有りがたさを覺えた。以前の不安が跡もなく消え去つた譯ではないが、自分てその不安の方向を換へるやうにした。出來得るだけ有用な爲事に取りかかりさへすれば、それが旋て氣晴しにもなるであらう。かう思つた。母は性來田舎が好きな質であつた。私と一緒になつてからも、その

1736(25)

熱は減めなかつた。その中に彼女はぼつぼつ野良爲事が面白くなつて來たらしい。田畑を利用しようと思つても來た。幾らか其の方の心得もあつたので、樂んで實地に應用したりした。今の借宅に附屬しただけの地面では不足だと言つて、田地や牧場などを借り入れたこともあつた。つまり彼女の爲事好きな性分を、農業といつたやうな事の上に向け換へたのである。家てぶらぶら遊んでゐるよりも、一廉の百姓にてもなる方針に出たのである。然し私は這様に大仕掛でやり出すのが面白くなかつた。これでは到底失敗は免れない。元來が物に構はぬ、やりつ放しな質であるから、掛けただけの資本が、收穫によつて取返せる氣遣ひはない。斯う言つても強硬に反對もしてみた。けれども又一方では、全然何も穫れぬといふこともあるまいし、それなれば幾らか生活の補助にもなる譯だと、斯う思ひかへしては、獨りて自分を慰めてゐた。彼女の企てさうな事業の中でも、斯ういふ事をしてゐるなら、一番祟も輕からうと思つた。彼女のやうに、これを利益爲事とは見ないで、唯斯うして絶えず何か知らしてゐれば、心得ちがひな計畫を立つたり、詐欺師どもに瞞されたりするやうな憂を斷つことが出来るであらうと考へてゐた。

1737(26)-1741(30)

斯う考へ附いてからは、私は速く健康と體力を回復することに焦慮した。それは彼女の爲事の監督をしたり、下に使つてゐる労働者の取締をしたり、乃至は自分で小作頭とならうとするにも、這般身體では役に立たぬからであつた。すると妙なもので、斯うして何かせねばならぬとなると、讀書や研究のことも、いつしか忘れるやうになつて、病氣もだんだん快い方であつた。

一七三七—一七四一。——其の冬にバリオオが伊太利亞から歸つて來て、いろゝろな書物を持つて來てくれた。その中に、神父バンキエリ Bauchieri の “Bontempi” と「樂典摘要 Cartella per Musica」とがあつたので、それから音楽史と、此の藝術の理論方面のことを研究するのが好きになつた。バリオオは少時私達と一緒にゐた。そして私は此の頃丁度成人に達したから、來春は一度ジッネエツに行つて、實兄の發落が知れるまで、實母の遺産——少くとも私の所有に屬するだけのものを相続するがよからうといふ話が極まつた。此の計畫は極まつたとほりに行けた。私は

ジッホエツへ行つた。父の方からも其處へ出かけて来た。餘程前から父はジッホエツへ還つて来たが、別に無罪を宣告されたのでもなかつたけれど、誰も父を拒む者はなかつた。而已ならず、彼の臆量と誠實とは豫ねてから尊敬を受けてゐたので、人人はその以前の事件を知つてゐても知らぬ振をした。政府の方でも、間もなく起つた大事件で憧憬してゐる時であつたから、這麼折のわるい時に其の曠昔の不當な處分を憶ひ出させて却つて人民を激昂させるてもあるまいと思つてゐたらしかつた。

私は改宗者となつてゐたので、若しかすると困るやうなことがあるはせぬかと心配して行つたが、別條はなかつた。ジッホエツの法律は、此の點についてはベルヌのよりは餘程寛大である。何しろベルヌでは、誰でもかまはぬ改宗した者だといふと、自由も財産も没收されて了ふ。私の財産に就いて誰も彼はいふ者はなかつたけれど、何爲か知らぬが、ひどく減られてゐた。實兄が死亡したであらうといふことは、最早疑ふ餘地もないが、未だ正式の證據が出ない。て兄の分まで相續するといふことは出来ないから、甘んじて、それを父の所得にする積りて抛棄つて置い

1737(26)-1741(30)

た。父は生涯その金で旨いことをした。公の手續が済んで、金が私の手へ這入るや否や、その幾分て若干の書物を買ひ込んだまま、殘餘の金を引つ掴んで大急ぎに母の足もとへ飛んで歸つた。その途中この胸は歡びに躍つた。そして其の金を母の手へ渡した瞬間の嬉しさは、自分の手に這入つた時よりも幾層倍うれしかつたか知れぬ。が彼女は金を受け取りながら、清い心には一向無貪著で、決して相好を崩すやうなことはなかつた。然ういふことには慣れてゐた。その金を同じ無貪著さて全部私の物に費つて了つた。縱しその金が別な處から這入つて来た物でも、皆斯ういふ工合に費つて了つたにちがひない。

健康は此の時もまだ本當に回復しなかつた。却つて目に見えて衰弱した。顔は死人のやうに蒼白を呈した。骸骨と見ちがへるほどに瘦せ細つて了つた。おそろしく脈搏が劇しくて、動悸も頻りと波立つ。絶えず強い壓迫を感じて、ちよつと身動きをするのでも、容易ならぬ苦痛を覺えた。それ程生氣が竭き果てた。一足歩いても息切れがする。身軀を曲げても眩暈がする、軽い物を持ち上げることすら出来ない。私のやうな感動質な人間に取つて一番苦しい、無爲懈怠の状態で居な

1737(26)-1741(30)

ければならぬやうになつた。斯うなると自然と鬱悒が伴つて來た。鬱愛狂は元來幸福な人の持病と言ふべきもので、とりも直さず私の場合がそれに當る。泣くべきものもないのにさめくとなつたり、木の葉の音、小禽の聲などにも甚く胸を亂されたり、至樂の境涯にゐながら、氣分の動搖がはげしかつたりするのは、いづれも皆安逸の疲れから起つて來ることだ。是が爲に、只さへ鋭敏な感じは、止めどなくあたけて行くやうになつた。私達は、この世では幸福を享けることの慚はない身に生れて來てゐるのかも知れぬ。身體と精神と、一どきに苦むことがなければ、孰方か一方は、屹度約束したやうに苦まねばならぬことになつてゐた。殊にその一方が好い鹽梅に行つてゐると思ふ間に、それがつまり片方のために害をなしてゐた。十分に生を味はうとする時には、身體がそれを許さぬ。そしてこの苦痛が、何處に宿つてゐるかといふことも、明かに指すことが出來ない。だんだん年月を経て、齡が傾き、いろんな手酷い、眞剣な災難が降りかかつて來る時分になつてからは、反つて體力は丈夫になつて來るばかりである。お蔭で、苦い不幸の味は十分に味ふことが出來る。今この文を書いてゐるのは、六十歳に手が届かうかとい

1737(26)-1741(30)

ふ時で、身體は固より虚弱ではあるが、あらむ限りの憂悶に身を責められつつも、その苦みに對して、一層精氣と活力を持つてゐるやうに感じられる。若い盛りの花の年頃に、眞の幸福の正中で、飽くまでも享樂したいと思つた時分には、その精力は、殆どあるかないかの有様であつた。

もう少し自分のことを話すが、書物で生理の事を少し讀みかけて、それから解剖學の研究を始めた。人體各部の器官の微妙な作用を、だんだん讀み究めて行く間に、一日に二十遍も、自分の身體がばらばらに解きほぐされるやうに感ずる氣でゐた。自分の死にさうだといふことを驚く代りに、未だ生きてゐるといふことに氣が注いで驚いた。そして何か疾病に就いての記載があると、それを自分の上だと思ひ／＼讀んで行つた。縦し始めから病體でなかつたにしろ、斯ういふ陰氣な書物を読んでゐれば、どうしても病氣にならずにゐられないところであつたらうと思ふ。種々な病氣の診候といふ處を讀んで見ると、一身に思ひ當ることばかりなので、自分には、そのすべての徴候があるのだと思ひ込んだ。それからまた一倍面倒なことを思ひ出した。それは、もう諦めてゐた治療に對する熱望であつた。

これは誰でも醫書を読み出すと、屹度思ひ立つに極まであることだ。研究比較の末、自分の病氣の原因は、心臓の息肉にあるのだと想像した。サロモン君も是には同意したらしかつた。本當なら此の意見に依つて、以前諦めたとほりに決心しなければならぬ筈であるのに、却つてどうすれば此の病氣が癒るかといろ／＼に知慧を絞つて、この異常な治療に取りかゝらうと思ひ定めた。嘗てアネエがモンベリエ Montpellier に旅行して、ソオヴァジ、Gaurages 教授の植物園を參觀に行つたときに、フィズ Fizes 氏が息肉らしいものを治したことがあるといふことを、誰かに聞いて來た。母はその事を記えてゐて、私に話した。そのフィズ氏に診てもらひに行かうと決心するには手間は要らなかつた。病氣が癒るといふ希望が、私に此の旅行を計畫する勇氣と元氣を回復させた。ジ、ネエツで取つて來た金が、その費用に充てられた。母もそれをしきりに勧めた。これではモンベリエに旅行することになつた。

けれども、其の醫者を見出すために、然う遠くまで行くことは要らなかつた。馬に乗つてゐると、身體が疲れてならないから、グルノオブルへ來た時に馬車に乗り替へた。モアラン Minans まで來ると、私の後へ五六臺の馬車が列になつて續いた。これが眞に擔架上のアヴンテ、ウルといふべきものであつた。その馬車は大かたコロンビエ Colombier 夫人といふ新婚者の一行であつた。その女と一緒にラルナアジツ Tarnage 夫人といふのも乗つてゐた。これは前の夫人から見ると、大分年輩で、縹緞も劣る方であつたけれど、愛嬌はないではなかつた。コロンビエ夫人だけはロマン Romans へ降りる筈であるが、此の人はもつと、先のサンテスピリット Saint-Espirit 橋の近所で、サンタンデオル Saint-Andiol といふ處まで行くのであつた。固よりの臆病者が、斯ういふ身分のある夫人たちや、其の同伴者と昵近にならうといふことは、輕々しく望まれぬ。しかし同じ道中をして、同じ宿屋に寢泊してゐるのであり、偏屈でばかりも押し通す譯に行かないから、同じ食卓で食事もするといふやうなことから、到頭自然に親しくなるやうになつた。斯うして結ばれた懇親は、想つてゐたよりは造作のないものであつた。病氣で氣分がすぐれぬ、殊に私のやうな氣

1737(26)-1741(30)

質の者は、やたらに人交際をするのは、随分煩いものであるから、それで那樣感じが始めにしたのである。全體媚婦が男子に近づくには、其の好奇心が固となつて、故らに甘い嬌態をつくつて、男子を惑亂するのが始めの手段である。丁度私の出遇つたのがそれだ。コロンビエ夫人には年の若い取巻が多勢隨いてゐて、殊に這箇を見かへりもしなかつたし、それにもう別れ際でもあつたので、昵懇になつたところて爲方もなかつた。が、ラルナアジッ夫人には、別に嬖人も隨いてゐない様子で、折から旅行中の慰みを考へてゐた處であつた。然ういふ譯から私は此の夫人に生擒にされた。彼女の前では哀れなジャンジックも、熱も鬱憂も、息肉も、みんな何處かへ行つて了つた。残つてゐるのは、胸の動悸ばかりであつた。こればかりは彼女が治したくなかつた。私の健康のすぐれないといふことが、馴れあひの發端であつた。實際私が病氣であるといふことも、今またモンベリエへ行くのだといふこともよく解つた。そして私が決して淫蕩兒でない證據は、風采や舉動で知れてゐた。現に、それから後は病人として其處へ旅をして行くといふことに疑を持つものが誰もなかつた。健康が良くないからと言つて、其の事が貴婦人への紹介と

1737(26)-1741(30)

なる道理もないが、確かに注意を惹く者にはなつた。朝になると、機嫌は如何かと言つて、見舞に人を寄越した。一緒にシ・コラアを飲みに来ないかと招んでくれた。どうして夜を過ごしたかをたづねても呉れた。一度なども私は、いつもの無考に物を言ふといふ見上げた度胸から、

「どうですか、存じません。」

と答へたことがあつた。これでは他に莫迦と思はれても爲方はない。彼女達は何もつと進んだ所まで、私の試験をして行つた。その結果は、私の不利益となるやうなものではなかつた。ある時コロンビエ夫人が、その友に、

「まだ坊ちゃんですわねえ。でも可愛いわ。」

と言つてゐるのを聞いた。此の言葉に私は元氣づいて、實際それに負かないやうにしようと思つた。

次第に親しくなるにつれて、私の身の上、何處から来た者で、何者であるかといふことを話さずにはゐられなくなつて来た。これに大きにまごついた。何爲といへば、上流の人々の間で、しかも修養ある婦人たちに對して、自分は一個の新しい改宗

1737(26)-1741(30)

者だと名乗ることは如何にも辛かつた、何と言ふ物ずきの心からか、私はとうとう英吉利人であると済まして言つた。英吉利人でもジャコバイト Jacobite の一人だと告げた。皆本當のことに思つた。自分でダッチング Dudding と名乗つてゐると、外の人もみなダッチングさんと呼ぶやうになつた。トリニアン Torignau 侯爵といふ私と同じ様に病氣で、ずつと年を取つた性質も面白からぬ、いけ好かぬ人物が居合はせた。その人が、ダッチング君と談話をして見ようと言ひ出した。て彼は、ジェイムズ James 王や、老僧王や、サン・ジェルマン Saint-Germain の古宮殿のことなどを話し出した譯者云。ジャコバイトは、茲に謂ふジェイムズ二世王從者の義。ジェイムズ二世讓位の後、王子チャールズ・フランシス・エドワーズ Charles Francis Edwards 及び王孫チャールズ・エドワーズ Charles Edwards を擁して叛を謀つた一味の黨與を指す。僧望者といふは、この二人の王子と王孫である。サン・ジェルマン宮は、巴里の附近、セヌ Seine の河岸に立つ。ジェイムズが佛蘭西へ逃げのびた時、路易十四世が、彼を此の宮中に匿つたことがある。私は針の上に居る心地がした。それはまるで私の知らない事ばかりであつた。纒かにハミルトン伯の著書や、新聞などから得た零碎な知識を

1737(26)-1741(30)

持つてゐるばかりであつた譯者云。Count Anthony Hamilton. 英國出の佛蘭西記者。一七二〇歿。然し、此の厩かな知識を巧く使ひこなしたので、破綻を出さずに済んだ。英語のことを話し出して來なかつたのが大助かりであつた。英語と來ては、私は、一語も知らなかつた。

一行は面白い人ばかりであつたから、その中に皆わかれわかれになつて了ふのだと想ふと、悲しい氣がしてならなかつた。吾儕は蝸牛が躡るやうな步調で行つた。日曜日にサン・マルセルサン Saint-Marcellin に着いた。ラルナアジッ夫人は祈禱へ出た。私も一緒に行つた。これがぶつ壊しの因であつた。いつものとほり、愼ましくしんねりとして構へてゐたので、私は一個の偏信者と認められた。その誤解のことは、二日経つて彼女の自白した言葉で解つた。此の誤解を拭ひ去るには、どうしても夫人に媚を賣るやうにしなければならなかつた。それよりも、夫人の方は、有繋に經驗のある女だけ、然う手もなく落膽するやうなことはなかつた。彼女の方から私を挑むやうにしかけて來て、這箇で起す反應を視詰めてゐた。いろいろ手出しをして來た。自分の姿と相談もせず、私は自分が弄られてゐるのだ